

# 小原台だより



紅太鼓

# C O N T E N T S

■新年のご挨拶	3	33期生のホーム・ビジット・デイ (HVD)	41-2
■新副校長に聞く		18期生会の現況について	42
より良い教育訓練環境を目指して	4	防大53期生に聞く	
防衛大学校における教育・研究の改革の現状	5	幹部候補生学校に入校して想うこと	43
■新幹事に聞く		幹部候補生学校で学んだこと	44
「伝統は誰が、どう継承する。」	6	入校して半年	44
■小原台は今		防大53期に聞く	45
『防衛の努め 自衛隊の精神的拠点』の刊行について	7	■支部だより	
新学生舎等の紹介	7	東北地域支部の活動状況	47
校友会活動（運動系・文科系等）	13	関西地区支部の活動状況	48
グライダー訓練の再開	15	北陸地区支部の活動状況	49
校内競技会の近年の状況	17	山口地区支部の活動状況	50
「OB特別講話」を聴講して	18	四国地域支部の活動状況	51
顕彰碑献花式／開校記念祭今昔物語	19	九州防大同窓会の活動状況	51
■同窓生アラカルト		桜華会の活動状況	52
部屋会	21	■同窓会事業	
榎校長の思い出	22	平成20年度代議員会等開催	53
村井よしひろ宮城県知事再選	23	第53期生等卒業謝恩会	54
日本の慰霊事業は今！	23	第56期生会発会式	54
日本の屋台骨として育て	25	第53期生等卒業式	54
ノモンハン航空戦の今日的意義	26	第57期生等入校式	55
リーダーに求められるもの	27	第3学年の部隊実習支援	56
常在教場―再任用教官として―	28	第12回防大同窓会テニス大会	57
沖縄の思い出と中国の脅威	29	第11回防大同窓会囲碁大会	57
自衛隊という素晴らしい組織	30	第13回防大同窓会ゴルフ大会	58
撤収業務について	31	防大卒留学生歓迎夕食会	59
防人の魂を胸に、政治を志して	32	■連絡事項等	
■期生会だより		平成20年度防衛大学校同窓会決算書	60
「榎の樹」記念植樹の記	34	会費の納入状況、会費納入のお願い	61
3期生卒業50周年記念行事	35	平成21年度防衛大学校同窓会懇親会等へのご案内	62
<b>今人生、男盛り</b>		同窓会旗の図案募集について	62
再定年を迎えて思うこと	37	地域支部等への助成事業について	63
米国珍道中記	37	名簿管理に関するお知らせ	64
「今人生、男盛り」	38	機関誌「小原台だより」投稿のお願い	64
「今、人生男盛り」	39	期生会会長・代議員名簿	65
ホーム カミングデー (HCD) に参加して	41-1	同窓会本部・支部等の役員紹介	66
		会員の訃報	67

# 新年のご挨拶



防衛大学校同窓会会長 先崎 一

国の内外各地においてご活躍中の現役並びにOB同窓会員の皆さん、よき新年をお迎えの事とお慶び申し上げます。

昨年4月から、竹河内前会長の後を受け同窓会会長をやらせていただいています12期卒（陸）の先崎です。同窓会本部は現在、主に12期から19期卒までの陸・海・空自衛隊OBの有志により構成されております。今年度も、各地域支部等との連携を図りつつ、現役とOBとの絆をより一層深めながら取り組んでいく所存です。どうぞよろしくお願い致します。

さて、我が国を取り巻く安全保障環境は、世界的な経済危機、地球規模の環境問題を始め、国際テロ、大量破壊兵器の拡散等、軍事・非軍事の分野が複雑に絡み合っており、益々不透明、不安定な様相を呈しており、世界は新たな秩序の構築を求め本格的な多極化時代に突入したと云っても過言ではないと思います。そのような中、我が国においても昨年は政治の大転換期を迎え、その激動の中、新年の幕開けとなりました。軍事的側面からとらえても、日米同盟のあり方、防衛力のあり方、政軍関係のあり方等に関する見直し・新たな構築への取り組みが模索されております。しかしながら、このような司令塔たる政治の流動化・不安定化は我が国安全保障上の最大のリスクとして懸念され、早期安定化が望まれるところであります。

今日、防衛省・自衛隊には厳しい内外情勢の下、多種多様な役割が益々求められてきています。特に近年は軍事力の果たすべき役割の一つとして、わが国防衛と云う本来任務の他、国際社会の平和と安定への寄与と云う役割が増大しつつあることはご承知の通りであります。自衛隊の統合運用体制も3年目に入り、NK（北朝鮮）の弾道ミサイル対処、スマトラ地震対処、ソマリア沖海賊対策等、幾多の経験を積み重ね着実に軌道に乗りつつあると伺っております。このような統合運用の場においても、中核となって活躍しているのは我が同窓生であることは云うまでもありません。

母校においては、永年にわたり培われてきた歴史・伝統・校風の下、新たな時代のリーダー育成を狙いに様々

な取り組みが行われております。特に年間約40名が海外の士官学校に留学、7ヶ国約70名の士官候補生の防大受け入れ、国際士官候補生会議等、防衛交流の拡充が図られています。同時に学業・訓練、学生隊生活、校友会活動のバランスに配慮された軍学校としての人材育成教育がなされており、いわば統合の士官学校として発足した本校の意義・役割は、今日のような自衛隊統合の時代を迎え、その先見性ととともに、将来、自衛隊の中核となる幹部人材育成の場として、益々重要になってきていると思います。同窓会としてもこのような統合の時代を支え、防大の発展に寄与しうる物心両面の支援を引き続き行って参りたいと思います。

現在、同窓会の各種活動も「会員相互の親睦」「母校の発展及び社会的活動への寄与」という設立趣旨に沿い、本部及びそれぞれの地域の特性を生かした支部毎の活動が順調に行われており、来年1月には防大同窓会創立50周年を迎えようとしております。この節目にあたり、すでに準備委員会を立ち上げ、記念事業の具体的検討に着手しております。現在のところ、記念事業としては同窓会自体事業（記念講演など独自の事業）、母校支援事業（すでに出版された「防衛の務め」復刻版、防大創立60周年関連寄贈品）等を検討しています。

云うまでもなく現役同窓会員にあっては自衛隊における各部隊、地域における幹部団の中核として、OB会員においては、自衛隊部外関係団体を始め、国政の場、マスコミ界（言論界）、学会、執筆活動、地方自治体における首長、議員、危機管理のリーダー、カウンセラー、NPO等ボランティア活動、宇宙飛行士等々幅広い分野でご活躍され、防大同窓生への期待は益々高まりつつあるように思います。

同窓生として、母校に対する思いは様々であろうと思いますが、国を思い、後輩の成長を期待し暖かく見守る心は等しく共有しあえると確信しております。

今年も、防衛大学校卒業生としての絆を大切に、相互啓発しつつ、より充実した同窓会活動を目指して参りたいと思います。海外留学生約200名、女性約330名の卒業生を含み2万2千余の我々同窓生及びご家族にとって、健やかで、実り多い年となりますよう祈念し、新年のご挨拶とさせていただきます。

## より良い教育訓練環境を目指して

防衛大学校副校長（企画・管理担当） 高嶋 巖



私は、21年8月25日付で、防衛大学校副校長（企画・管理担当）に着任した。

平成17年8月までの一年間、本校総務部長として勤務した際、事務官の副校長職を新設する概算要求に携わったが、当時はまさか自分がその職に就くとは思ってもよらなかった。今後は、渡邊教育担当副校長、千葉幹事（21期）と連携を密にして五百旗頭学校長の学校運営がスムーズに行えるよう努力していきたい。

また、防大は、日頃同窓会から各種ご支援をいただいている。感謝申し上げるとともに、その団結の強さを羨ましくも感じている。

私は、昭和53年に防衛庁（当時）に入庁した。当時の各幕の班長は防大一桁の前半、班員が半ばから後半の期が中心であった。大学出たての若造の私が、部員の下働きとはいえ、幾多の無作法をこれらの方々に働いたかを今思うと冷汗が出る。部員時代も、幕の皆さんの支えがあって何とか仕事ができたと感じている。また、最近では、前職（内閣衛星情報センター管理部長）で小田邦男（13期）及び椋木功（16期）各所長の部下として仕え、指揮官の心構えなど無言の教えを受け、貴重な経験をさせて頂いた。

さて、4年ぶりで帰ってきた防大であるが、創立50周年記念事業の一環として建設された本部庁舎、記念講堂、図書館、さらにその後に建設された学生舎などが落ち着いた佇まいのなかにあり、心を和ませてくれる。現在残り1棟の学生舎を建設中であり、22年度末の完成が待ち遠しい。

海拔85mの敷地に建つ中央の時計台（給水塔）は50mの高さがあり、晴天時には屋上から遠く千葉、東京、富士山が望める。これは防大勤務の密かな役得であり、来校時には是非ご案内したいので声を掛けていただきたい。

防大の伝統を創っていくうえで、環境整備は欠かせないものである。

最近の動きとしては、昨年（21年）秋に学校長宿舎が完成した。池上地区に所在する一戸建ての宿舎が老朽化したことに伴い、防大近傍の集合宿舎の一角に学校長宿舎を整備した。諸外国の学校長宿舎は校内に一戸建てが多く、防大も、との声も多くあったが、数々の制約の下、このような形となった。新宿舎では外国の賓客や学生を呼びやすくするような工夫も凝らした。また、同じ場所に学校長ほどではないが広い規格の宿舎も併せて整備し、幹事や訓練部長が住めるようにした。

今後の懸案は、学生食堂、浴場の建替えである。一時

期、両者合棟の方向で検討されたが、食堂と浴場は一緒の場所にあるべきではないとの議論や両者の耐用年数が異なることから、現在はそれぞれ独立して建設する計画である。

その後、理工学館や防衛学館の建替えの順番となるが、まだ先になりそうである。

いずれにしても、ウエストポイントやアナポリスに匹敵する環境をとの心意気のもと、施設の建設とともに木々の剪定など校内美化にも配慮しつつ、環境整備に力を入れたい。そして、ホームカミングデーなどで来校される同窓生の方々が、同伴されるご家族に自慢できるような防大にしていきたい。

近年の少子化のなかで、防大といえども優秀な学生を確保するには、積極的なPRが不可欠である。このための手段として、昨今はインターネットが有効であるが、これまで当校は十分にこれを活用していたとはいいがたかった。現在、ホームページを充実させるべく検討中であり、本号が発行されるまでには成果をあげていきたい。そして、防大が今どうしているのか、今後どうなっていくのかを受験生や同窓生の方々に頻繁に見ていただけるようにしたい。

私は、平成16年に林直人陸幕副長（当時、15期）らとともに浜田副大臣（当時）の東チモールPKO部隊視察に随行した。そこで、黙々と国造りに貢献している隊員を目の当たりにして深い感銘を受けた。今や自衛官は世界各地に赴き、自衛官にしかできない任務を遂行し、まさに歴史を印している。任務が拡大した自衛隊のなかで、その中核を担う将来の幹部自衛官を養成する防大の責務は大である。また、その教育訓練の成果は直ちに検証できるものではなく、失敗は取り返しがつかない。

私自身、直接訓練や教育に携わるものではないが、皆様方への恩返しの意味も込めて、企画・管理担当副校長として、自衛官や教官が十全に訓練、教育、研究に打ち込めるよう全力を尽くしていく所存であるので、同窓会の皆様には、引き続きご指導、ご鞭撻の程、よろしくお願ひしたい。

# 防衛大学校における教育・研究の改革の現状

防衛大学校副校長（教育担当） 渡邊 芳久



平成21年4月に教育担当の副校長を拝命した。本校のOBではないので、簡単に経歴を紹介したい。

昭和54年4月に当時の数学物理学教室物理学担当の助手として採用された。最初に担当した授業は、本科学生に対する物理学実験と理工学実験である。理工学研究科では防護計測系列の教授の下で研究指導の補助を行っていた。平成12年の学群・学科制発足時に電気情報学群機能材料工学科に配置され、材料熱力学等を講義している。本題に入ろう。平成19年3月に五百旗頭学校長が「防衛省移行にあたって—平成19年の課題—」を提言された。提言の第3項目に「幹部人材の高度化・国際化」があり、具体的には(1)研究任務の法制化、(2)大学院博士課程の開設、(3)多文化世界におけるPKO活動のための地域研究、(4)防衛学の充実と強化、(5)防衛交流の拡充、が挙げられている。また第5項目として「科学研究費による研究活動への参加」が続いている。この学校長提言に沿って、本校の教育・研究がどのように改革されているかを述べてみたい。

まず「研究任務の法制化」であるが、平成21年5月の参議院本会議で防衛省設置法改正案が可決・成立し、教官の長年の夢であった研究任務が改正設置法第15条に明記された。この防衛省あがりの熱意が文部科学省に伝わったかどうかかわからないが、これまで排除されていた競争的資金である科学研究費への本校教官の参加が認められた。平成20年10月に文科省による機関認定を受けた後、日頃から積極的に活動している先生方が平成21年度の科研費に応募し本年4月には19件（補助金総額約5,000万円）の研究テーマが採択された。採択率は全国平均値より高く、本校の先生方の研究水準の高さを示すものといえよう。この科研費への参画により他大学の教員と共同して先端的な研究を行うことが可能となり、本校の研究レベルの更なる向上が期待できる。

次に、「大学院博士課程の開設」であるが、理工学研究科ではすでに博士課程に相当する後期課程を開設し、この4月には第9期生として9名の学生が入校している。総合安全保障研究科には修士課程相当の教育しか行っていなかったが、平成20年度に後期課程の設置が認められ、この4月には第1期生として6名の学生が入校した。これにより、理工系、人社系ともに博士課程相当の大学院教育を行えるようになり、幹部自衛官に対する高度な教育に貢献できるようになった。

「多文化世界におけるPKO活動のための地域研究」では、この4月に入校した学生より、卒業までに少なくとも

も一つの地域研究の履修を義務づけるようにカリキュラムの改正を行った。学校長提言にある「防大時代に異なる社会文化について内在的に理解する勉学の機会を持ち、その社会の安全保障課題を知ることは、後の活動の貴重な知的基盤となる。」との理念に基づき、欧米、中国から南アジア、大洋州、アフリカまでの各地域に関する授業科目を開講している。また、新しい科目を展開するために必要な教授の増員も認められた。

「防衛学の充実と強化」では、前号に君塚前幹事が防衛学の変化について紹介しているので、本稿では国際防衛学セミナーを紹介しよう。平成21年度で14回を数え、海外15カ国から大佐や中佐の参加があった。今回の総括テーマは「冷戦後における軍事力の役割の多様化と戦史教育」であり、基調講演は米国陸軍戦史研究所長のコンラッド・クレーン氏による“Clio and Mars Preparing for Chaos: Using Military History to Educate for Complex Peace and the Graduate Level of War”であった。その後引き続き行われた戦史に関する2つのセッションでは防衛学教官を中心として活発な討議が行われた。

「防衛交流の拡充」では、今年度より米国陸軍士官学校へ学生を約4ヶ月派遣することとなった。これまで海軍兵学校と空軍士官学校とは約4ヶ月間の交換留学を行ってきたが、陸軍士官学校とは交渉が難航していた。学校長をはじめとする関係者の努力によりようやく実現したものである。また、毎年3月に本校で実施している国際士官候補生会議に中国の学生2名を招待し、6月には中国の大連艦艇学院が主催する国際学生週間に本校学生2名を派遣した。中国への学生派遣は本校にとって初めての試みであったが、派遣学生の帰国後の報告を聞くと、1週間という短期間の派遣にもかかわらず、相互理解や友情を深められたことなど、肯定的な評価であった。秋には中国人民解放軍理工大学への約1週間の派遣も計画されている。本科学生の海外派遣は短期（2～3週間）、中期（約4ヶ月）、長期（約1年）に分類しているが、今後はカナダや韓国への中期あるいは長期の派遣も検討している。

紙幅の都合で十分とはいえないが、教育・研究の改革の現状を述べてきた。学校長提言以降、教官・自衛官、事務官等が力を併せて提言の実現に努力している。これからも陸・海・空自衛隊の幹部自衛官になるべき者を教育・訓練するという本校の使命を忘れることなく教育・研究に励んでいきたい。

# 「伝統は誰が、どう継承する。」

防衛大学校幹事 陸将 千葉 徳次郎

## 1 眼前の防大

### 荒れたキャンパス

校内全体に雑草が伸び放題で、どう見ても春先からの成長である。芝生も雑草に侵食され、植え込みに茂る雑木の太さやコンクリートの隙間への侵食程度からここ10数年以上前から放置した状況である。路上の倒れた自転車、学生舎を含む建物周辺や学校敷地周囲のゴミ等、防衛省管理施設では類を見ない状況であり、当然諸外国の士官学校では考えられないであろう。

### 学生の様相

教場に向かう学生は背を丸め、目線を落とし、課業行進に活気がない。教室内のゴミ、飲み物の持ち込み、携帯電話の操作、机上に上半身を投げ出しての任務放棄（中には帽子を被ったまま）、来訪者に挨拶が出来ない等、修業中の姿とはかけ離れ、自主自律の気風が感じられない。

### 学校職員

「本科学生を教え育む」という大目的を忘失(?)した主役たる学生不在の業務感覚は、縦割り組織の弊害で連携意識が希薄、出来ない理由、やらない理由が先ず口に出る等、自衛官を含め消極的反応である。

以上が、7月下旬、30数年ぶりに見た母校の様変わりである。一言でいえば「夏草や 兵どもが 夢の跡 草に埋もれし 我が母校」であろうか。視覚に映る惨状よりも愕然としたのは、これ等の状況を「以前からなので気がつかなかった」、「仕方がない」、「問題ない」と思っていることであり、復旧の時機を既に逸していることに問題の深刻さを痛切に感じた次第である。とても、人を育てる環境とは言い難く、学生が可哀想であり、国民に申し訳なく、国内外の来訪者に見られるのが恥ずかしいというのが着任所見であった。

## 2 防大教育の意義

社団法人「中央調査社」による「信頼感」の世論調査で、「国会議員」、「官僚」、「裁判官」、「マスコミ」、「銀行」、「大企業」、「医療機関」、「警察」、「自衛隊」、「教師」のうち、自衛隊に対する一番高い信頼感はどこから生じたのか。同じ義務教育（高校を含め）を受けた職業集団と云う前提に立てば、大学教育（自衛官の採用後2年間を短大教育と捉え）にその差を見出すことができるのではなかろうか。防大教育は「幹部自衛官となるべき者の教育訓練＝人づくり」であり、幹候校で行う「職業教育」の準備行為として義務教育では余り取り上げられない(?)戦後日本の歴史、国防・自衛隊、国家、善悪分別を含む憲法精神、躰等、本来の国民教育の総仕上げを行う。他の9個の職業等を目指す者は必ずしも修学しない内容であるが、このこと

は一般大学の幹部自衛官輩出を否定するものではなく、防大が専門的に幹部適任者を育成しているということである。

## 3 防大の不易は何か

防大の伝統は何かと問われたときに先輩諸氏は何と答えられるであろうか。言葉を変えるなら、防大の不易は何であるべきであろうか。卒業生の一人として、かつ防大の幹事として云えば、「徳・知・体の均衡のとれた人間育成（人としての器作り）」の一言に尽きる。その具現実践の場は、学生舎生活、学業、校友会の三本柱であり、精神的要素は学生綱領である。三本柱を結んだ三角形の内接円が器、外接円は伸展性であり、その材質は綱領である。学生の目標は、不規三角形（学者や運動選手）ではなく、「日本を誇りに思い」、「挨拶ができ」、「思いやりの心を持ち」、「損得ではなく、善悪で判断し」、「自ら行動できる」等、国民が安心して武器と部下の生命を委ねられる日本人である。内心と外心のバランスがとれたより大きな三角形を目標に4年間修練を積むイメージである。教育効果は一般に遅効であり、現在の環境で育つ学生の器は今後30数年に亘り自衛官として成長を続ける。裏表のない、歪みや偏りのない器の基礎作りが防大教育の不易であり、器に満たす知識・技術は時代の流行に任せればよいと思う。

## 4 伝統の継承者

五百簾頭学校長は、横初代校長の建学の本旨が消えかけていることを危惧され、「人間としての器を作る学校」、「学者を作る学校ではない」、「教場も修養の場」等、先頭に立ち日々職員・学生を指導されている。幹事として補佐不十分に忸怩たるものを感じている毎日である。

朝夕必ず眼に映るように第1大隊学生舎角にあった横先生の胸像は、新たな一号学生舎建設に際しての損傷を回避するため記念館に仮安置したと聞かすが、雑草に埋もれた台座は、まさに建学の本旨が消え去らんとする象徴とも映り焦りを感じる。については新学生舎完成の折には、同窓会のご尽力により横先生の全身像（または胸像複製）を台座上に再び贈呈していただきたい。その角地は、綱領碑と共に学校建学の聖域として毎日、学生の手により交代で清掃維持し、「良き社会人たれ。自主自律たれ。」を継承させる要としてはいかがであろうか。伝統は、言葉では忘却の彼方に去るが、学生に日々の実践躬行により継承され確かなものとなる。

また、私の夢は建学の本旨を実践し、部隊のニーズを教育に反映できる本校卒業生が何時の日にか、学校長として勤務し伝統を具現継承することである。

# OBAMA小原台は2010

## 『防衛の務め 自衛隊の精神的拠点』の刊行について

防大元教授 田中 宏巳



平成21年11月10日に横先生の『防衛の務め』を再刊した。昭和40年の初版から数えて4回目になる。3版までは甲陽書房であったが、今回は中央公論新社にお願いし、紙型、表紙のデザイン、写真、添付資料等を一新した。先生が14年間に行なった訓示・講話、執筆原稿のため、文字遣いや送り仮名等に差違が生じ、僭越ながら必要限度内で統一をはかった。構成は第3版を踏襲する一方、内容は1篇を削除し、11篇も追加したが、1頁の文字数を150字余増やしたので、全体の頁数は若干減った。変更点が多く、4版というより「新版」と呼ぶべきかもしれない。

本書の刊行は、横記念室立上げの勉強会における「これほどの内容の書が読まれずにいる現状」を憂いて持ち上がった議である。自衛隊あるいは防衛大学の創設について、GHQ及び在日米軍と政府との交渉、政府内の折衝等の経緯を取り上げたものが多いが、防大教育あるいは国防の任につく自衛官の精神・心構え、この時代に求められた民主主義の思想・哲学に触れたものは皆無に近い。戦後を無思想時代といわないまでも、精神抜きの議論が多い中で、横先生は防衛の任につく若者たちに、拠り所となるべき崇高な精神に光を当ててこられた。これを凝縮したのが本書である。

社会に出ようとする若者は、歴史の趨勢、国家社会を動かす理念や思想、価値観を考え、悩みに悩んで自己の進むべき方向を決めていく。戦後の廢墟から出発した新生日本は、生きるため、利益を上げるための機会を提供するために腐心し、世界を驚愕させるほどの結果を残した。だが理念や精神の問題は、それが空腹を満たさないがゆえにないがしろにしてきた。

こうした戦後の潮流の中であって横先生は、将来自衛隊を背負って立つ学生たちに、新生日本が国是とした民主主義という政治思想・哲学を取り上げ、この下で自衛官・私個人は何を為すべきか、何を守らねばならないかを懇切に説き続けた。唯一の大きな責務を負った防大だけに、こうした精神、心構えが必要であったとしても、これほど格調高く語ることができる方がほかにおられたであろうか。

だが先生の高貴な精神に触れるにつけ、逝去されて40年もたちながら、卒業生及び教職員の中で先生の教えを越えた者が果たして何人いるだろうか考えると、額に冷汗が流れるのを感じないではいられない。

## 新学生舎等の紹介

小原台事務局渉外部長  
1等陸佐 牧野 正美 (25期・陸)



### 1 はじめに

防大生の居室は建学初期は8人部屋でしたが、学生の生活環境の改善や魅力化施策などにより、6人、4人、2人部屋への移行や、学年混成から学年別への移行などの変遷がありました。しかし服務事故の多発や学生同士の関係の希薄化などの問題があり、平成9年度から学年混成の4人部屋に戻り、平成16年7月に新学生舎(3大隊)が完成してからは逐次学年混成の8人部屋になっています。現在1大隊のみが4人部屋基準の建物で、他の3個大隊はすべて8人部屋基準になっています。ただし前期の間のみ4学年を部屋長とした1学年部屋を編成しています。

今回は、主として新・旧学生舎の設備の比較を提示し、今の防大の学生がどのような環境で学生舎生活を送って

いるかを紹介します。

### 2 工事工程

新学生舎の建設は平成14年度に4号学生舎の解体から始められ、1棟目が平成16年7月に完成し3大隊が入りました。次に5号学生舎を解体し、2棟目が平成18年7月に完成し4大隊が入りました。そして2・3号学生舎を解体し3棟目が平成21年7月に完成し、夏期休暇明け後(8月下旬)から2大隊が入っております。今後1号学生舎を解体し埋蔵文化財調査を終えた後4棟目(1大隊分)の工事に掛かり、平成23年3月に完成予定です。(図1「工事工程」参照)

## 新学生舎建設工事工程

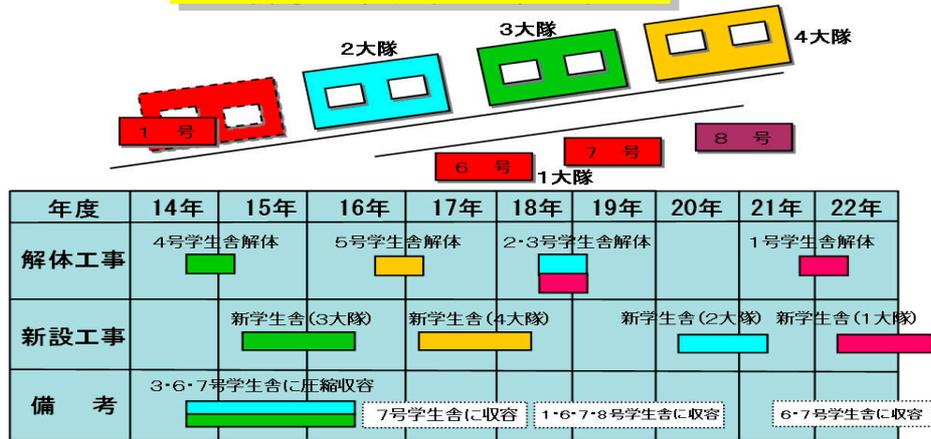


図1 工事工程

### 3 新旧学生舎の比較

下表のとおり、新学生舎は旧学生舎に比べて広さが約2倍、自習室・寝室は学生1人当たり約1.4倍、その他の設備も充実し生活環境は格段に向上しています。

施設	新		旧
延床面積	約14,400㎡	約2.9倍	約4,900㎡
1階面積	約3,600㎡	約2.9倍	約1,224㎡
自習室面積	約60㎡	約2.7倍	約22㎡
1人当たり	約7.5㎡	約1.36倍	約5.5㎡
寝室面積	約60㎡	約2.7倍	約22㎡
1人当たり	約7.5㎡	約1.36倍	約5.5㎡
冷暖房	全館空調		なし
照明	公共場所自動照明(センサー付)		手動

その他、中央廊下が広く、シャワー室、トイレなどの施設も充実しています。

一方、住空間が広がったのに伴い、公共場所の清掃所要の増大、消灯後の夜話がしにくくなった、などの苦労話もあります。

なお、6、7、8号の旧学生舎は、逐次耐震工事を施した上で、訓練教場、校友会部室、トレーニングセンターなど多目的に活用される予定です。

### 4 新学生舎の状況

以下に新学生舎を写真で紹介します。



全景

メイン道路左側手前から、1号学生舎、新2、3、4大隊学生舎です。

右側手前から1大隊が生活している6、7号学生舎、その奥が8号学生舎です(平成21年度改修予定)。



手前から2、3、4大隊



正面



学生舎裏側



側面



正面玄関



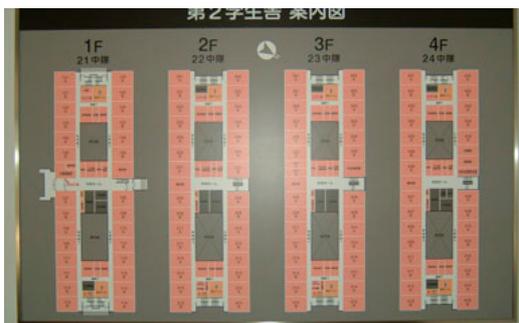
玄関上2大隊シンボル（獅子）



玄関入ってすぐ



1階中央フロアー



案内



中央からの見通し



自習室 左側



自習室 右側



寝室 (ベッド×8)



テンキーロッカー



調理室



洗面所



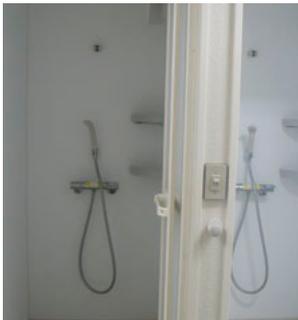
トイレ



トイレ



洗濯室 (乾燥機付き)



シャワー室



シャワー室 (更衣室)



和室



中庭 (左右2箇所)



屋上 (左右2箇所)

## 5 旧学生舎の状況

以下に旧学生舎の写真を紹介します。



1号学生舎

1号学生舎は、平成22年1月から取り壊し予定です。  
その後4棟目の新学生舎の建設に移行します。  
完成は平成23年3月の予定です。



6号学生舎（13・14中隊）



7号学生舎渡り廊下



中央廊下からの見通し



洗面所



自習室



寝室



寝室（ロッカー）



洗濯室



トイレ



和室

## 6 学生食堂、学生浴場の状況

最後に、学生食堂及び学生浴場の状況を紹介します。



全景

左上が学生会館で、その手前が学生食堂、その右隣の建物が学生浴場です。

食堂は平成23～24年度、浴場は平成25～26年度に建て替え予定です。



一斉喫食（産土祭）



一斉喫食（産土祭）



自由喫食



学生浴場（更衣室）



学生浴場（浴室）

以上です。OBの皆さんの小原台へのお越しの際の一助にでもなれば幸甚です。（平成21年9月記）

# 平成21年度運動系校友会活動結果及び部員状況

平成21年8月31日現在

校友会名	成 績	部員数		校友会名	成 績	部員数	
		男子	女子			男子	女子
応援団リーダー部	各部等応援実施 空自第2高射隊、武山分屯基地45周年記念 演武実施	9		銃剣道部	全日本青年大会 男子団体3位	26	6
短艇委員会	全日本カッター競技大会 準優勝	55			横須賀市民大会 団体、個人優勝		
バスケットボール部	男子 春季神奈川リーグ戦 2部3位 秋季関東リーグ戦 5部横浜エリア1位	39	7	グライダー部	久住山岳滑翔大会 6位入賞	31	4
	女子 春季神奈川リーグ戦 2部7位			ソフトテニス部	春季関東学生リーグ 6部6位 7部降格 全日本学生オープンソフトテニス選手権大会参加	29	
柔道部	春季神奈川柔道大会 女子軽量級 優勝	53	4	ボクシング部	関東学生ボクシングリーグ 4部優勝 3部昇格	39	
ラグビー部	セブンス大会 Consolation準優勝	100		レスリング部	東日本学生リーグ 2部優勝	28	
	関東学生リーグ戦 2部リーグ参戦中			ボート部	五大学レガッタ 舵手付きエイト 2位 舵手付きフォア 3位	33	
サッカー部	神奈川県大学春季リーグ 1部5位 神奈川県大学秋季リーグ 参戦中	45		フィールドホッケー部	春季関東学生リーグ戦 男子2部4位	27	11
剣道部	関東理工系学生選手権大会 男子団体準優勝	65	8		女子2部2位		
	全日本学生剣道選手権大会 (1名) 出場			ワンダーフォーゲル部	三重県新鹿海水浴場、山梨県西湖、 南八ヶ岳登山実施	15	
空手道部	全自衛隊大会 男子団体形優勝	44	5	パラシュート部	日本選手権大会 Jrの部優勝	14	
	春季関東学生リーグ戦 (男子) 2部2位 1部昇格 (女子) 2部1位			準硬式野球部	春季神奈川学生リーグ 1部3位	66	
バレーボール部	春季関東リーグ戦 男子6部7位 7部降格 秋季関東リーグ戦 7部6位 7部残留	27	10	合気道部	全日本合気道演武大会出場	55	5
	春季関東リーグ戦 女子6部7位 7部昇格			体操部	東日本体操競技選手権大会出場	29	3
卓球部	春季関東リーグ 5部3位	16	1	弓道部	関東学生弓道連盟春季男子リーグ参加	20	8
陸上競技部	関東学生陸上競技対校選手権大会出場	77	13	少林寺拳法部	関東学生大会 男女単独段外の部 優秀賞	46	5
硬式庭球部	松原杯シングルス大会 準優勝	42	3	フェンシング部	関東学生リーグ、関東国公立学生選手権大会出場	13	
硬式野球部	春季神奈川リーグ 2部4位	45		ウェイトリフティング部	国体関東ブロック出場	15	
射撃部	春季関東学生選手権大会 団体総合2部6位	13		相撲部	全国国公立大学対抗相撲大会 個人戦優勝	14	2
山岳部	甲斐駒ヶ岳、鹿島槍ヶ岳、剣岳登山実施	6			東日本体重別選手権大会 全日本体重別選手権大会出場権獲得		
水泳(競泳)部	全国国公立大学選手権大会出場	29	5	バドミントン部	春季神奈川学生リーグ シングルス優勝	30	
水泳(水球)部	関東学生水球リーグ戦 3部2位	19		居合道部	平日及び休日を利用し練習を実施	17	1
ハンドボール部	春季関東学生リーグ 3部6位	28		吹奏楽部	月例観閲式奏会実施	44	13
アメリカンフットボール部	関東学生リーグ戦 2部リーグ参戦中	75			武山分屯基地45周年記念支援		
ヨット(小型)部	春季関東学生選手権大会 470級:9位/14 スナイプ級:9位/10	25	1	儀仗隊	入校式典、新発田駐屯地祭ドリル実施	47	4
ヨット(クルーザー)部	世界学生ヨット選手権予選大会 3位	11	1		川崎音楽祭参加		
		823	58			638	62

## 平成21年度文化系校友会活動結果及び部員状況

平成21年8月31日現在

校友会名	成 績	部員数		校友会名	成 績	部員数	
		男子	女子			男子	女子
アカシア会	サマードンスパーティ実施	14	12	タイ文化研究同好会	文化部合同発表会におけるステージ発表及び展示発表 開校記念祭における展示に向けた準備	32	2
	文化部合同発表会ステージ発表 開校記念祭における発表			韓国文化研究同好会	文化部合同発表会におけるステージ発表 開校記念祭における展示予定に向けた準備	5	
放送委員会	各種行事放送支援	10	6	紅太鼓同好会	文化部合同発表会におけるステージ発表 開校記念祭における発表予定に向けた準備		15
茶道部	文化部合同発表会参加 開校記念祭における茶会実施に向けた準備	14	6	インドネシア 文化研究同好会	文化部合同発表会におけるステージ発表 開校記念祭における展示に向けた準備	13	1
	京都表千家研修会参加			防衛学研究同好会	文化部合同発表会におけるステージ発表 開校記念祭における作品発表に向けた準備	7	3
弁論部	明治大学紫紺杯争奪全国学生弁論大会参加 開校記念祭における弁論大会開催に向けた準備	7			防衛学セミナー参加		
英会話部	自習時間を利用した勉強会実施	7		ベトナム 文化研究同好会	開校記念祭における展示に向けた準備	10	6
写真映画研究部	各種競技化・行事における写真撮影実施	11		モンゴル 文化研究同好会	文化部合同発表会におけるステージ発表	9	
	文化部合同発表会におけるステージ発表			自転車同好会	新島、神奈川トライアスロン大会参加	22	
棋道部	文化部合同発表会における展示	2		模型製作同好会	文化部合同発表会における展示発表 開校記念祭における展示発表に向けた準備	9	
音楽部	文化部合同発表会におけるステージ発表	36	4			107	27
軍事史研究部	自習時間を利用した勉強会実施	6	1				
軽音楽部	文化部合同発表会におけるステージ発表 開校記念祭における発表に向けた準備	24	1				
国際関係論研究部	各種討論会等参加	8					
古典ギター部	文化部合同発表会におけるステージ発表 開校記念祭における発表に向けた準備	9	1				
自動車同好会	大学対抗カートレース 3位 開校記念祭における展示に向けた準備	9					
美術同好会	文化部合同発表会における作品発表 開校記念祭における作品発表に向けた準備	7	3				
文芸同好会	文化部合同発表会参加 開校記念祭における作品発表に向けた準備	2					
書道同好会	文化部合同発表会における作品発表 開校記念祭における作品発表に向けた準備	12	4				
生花同好会	開校記念祭における作品発表に向けた準備	4					
		182	38				



美女と野獣

# グライダー訓練について

防衛大学校訓練部 第4大隊首席指導教官  
2等空佐 生越 雅英 (33期・空)



## はじめに

平成21年8月、防衛大学校所有のグライダーが静岡県富士川河口にある富士川滑空場において飛行訓練を行いました。

輸送、気象等の多くの支援を得、又天候にも恵まれ、円滑に訓練を行うことができました。

簡単ですが、その活動の紹介をします。

## 1 経緯

昭和33年から昭和38年の間、防衛大学校では航空要員の学生に対しグライダー訓練を行っていました。近隣の基地又は駐屯地等で行っていたようです。しかし、訓練場所を提供して頂いた各基地等の都合もあり、又教官の確保が困難となる等の理由により、昭和39年から本訓練は中止されていました。その後幾度か訓練再開を目指しましたが諸般の事情から実現できませんでした。

しかし、平成19年、当時の関係者の方々の尽力、そして多くの方面からの強力なお力添えのお陰で訓練再開に光明が差し込みました。そして現在、平成22年度航空要員に対する訓練再開を目指し各種準備を行っています。その準備の一環として、平成21年8月2日～8月7日の間、平成22年度訓練で使用予定の富士川滑空場においてグライダーを運用し各種検証及び必要な訓練を行ってきました。

## 2 概要

### (1) 訓練隊

航空自衛官及びグライダー部学生により訓練隊を編成しました。

総勢45名、その内グライダー部学生は24名の参加となりました。

### (2) 訓練場所

訓練場所として選定された富士川滑空場は静岡県航空協会が管理し、基本的に週末、飛行機曳航（飛行機がグライダーを曳航して離陸・上昇し、所望の高度、地点でグライダーを切り離す方式）によりグライダーを運航している所です。訓練環境、受入態勢等総合的に判断し平成22年度訓練場所として選定しています。



飛行機曳航による離陸準備風景



ウインチ曳航による離陸（約100km/hで上昇）

### (3) 検証内容

人員及び資器材の輸送要領、富士川滑空場における滑空機運用要領、宿泊・給食等の生活面に関する事項について検証を行い、平成22年度の訓練計画策定の資を得ました。



宿舎として使用した格納庫等の全景

因みに宿舎は滑空場の施設を使用しました。静岡県航空協会副会長の鈴木氏をはじめ協会の方々から工事、掃除、草刈等を事前に行う等、各種準備をして頂きました。大部屋に雑魚寝する他、格納庫に簡易ベッドを並べグライダーやウルトラライトプレーンと一緒に寝る状況でしたが、今回は生活するのに大きな支障はありませんでした。



ミーティング室 兼 寝室

来年度以降の訓練形態如何では不都合となる点が確認できましたので、必要な措置を講じていきます。



格納庫内簡易ベッド

#### (4) 訓練内容等

平成22年度の学生訓練では機体を2機使用し効果的な訓練を目指しています。(将来的には3機体制を目指します。) そのために必要な訓練を段階的に実施しました。

当初静岡県航空協会に支援して頂き、飛行機曳航により地形等の慣熟を行った後、ウインチ曳航(ウインチから引き出したワイヤーの先にグライダーを連結し、そのワイヤーを高速で巻き込みグライダーを上空に引き上げる方式)による訓練に移行しました。ウインチ曳航も当初機体1機を使用した訓練から、2機による運用を行い、各種慣熟及び必要な訓練を行いました。



ウインチによりワイヤー索を巻き込み機体を上昇させる

今回の訓練には滑空機の教育証明保有の指導教官及びグライダー部顧問も参加しましたが、グライダーエキスパートの学生がグライダーを初めて経験する指導教官等に対し色々な事を教えてくれるという頼もしい場面に多数遭遇しました。

#### (5) ハプニング…

飛行訓練3日目、順調に訓練を開始した直後、ウインチに現地では修復不能な故障が発生してしまいました。以降飛行訓練中止とするしかありませんでした。

結果的に訓練参加者の機体の組み立て、分解技量が一段と向上したということは言うまでもありません……。

#### おわりに

再開しようとしているグライダー訓練は、航空機を運用するには各種機能別の組織が緊密に連携を行い、総合的に力を発揮する必要があるということを学生に体感させることができ、航空戦力の特性の理解につながるものと考えています。

将来航空自衛官となる2学年航空要員全員に対し空の素晴しさを感じさせつつ、エアマンシップの醸成に一役立てるような訓練を目指し、今後も規則の整備、必要器材の調達、教官及び助教の育成等、訓練実施可能な体制作りを行っていきたいと思います。

平成22年7月、富士川上空を防衛大学のグライダーが飛んでいるところを見に、そして澁刺と訓練に臨んでいる57期航空要員(2学年)を見に是非富士川滑空場に足を運んでください。お待ちしております。



組み上げられた機体“防大9号機”とその後方にウインチ(オレンジ色)、さらに後方には富士山

# 校内競技会について

防衛大学校訓練課長

1等陸佐 高橋 正州 (27期・陸)



## 1 はじめに

防大創設期から「カッター」、「水泳」、「断郊」、「棒倒し」及び「体育」競技会が、また、平成4年から「持続走」競技会が始まり、現在6個の競技会が行われている。それぞれの競技会の歴史と現状について紹介する。

## 2 カッター競技会

本競技会は創設1年目の昭和29年1月に久里浜海岸で開催されたのが最初で、昭和29年10月に第2学年海上要員による中隊対抗方式で実施された。昭和30年においては、校舎移転に伴い走水沖に競技海面を変更し、全学年による中隊対抗方式で実施された。昭和33年から、4月下旬に、第2学年を対象として走水沖で競技をしている。平成6年、競技海面の縮小に伴い、直線2,000mからブイ回頭1,000m折り返し方式に変更された。また、平成4年女子学生入校に伴い、平成5年から平成14年までの間、1・2大隊と3・4大隊でそれぞれ女子クルーを編成した。現在においては、男女区分することなく、各中隊から1コクルーを編成するとともに、表彰対象を中隊及び大隊にしている。

過去10年の成績は、第4大隊が3回と多く、来年度は第4大隊が連覇をかけた大会となる。

## 3 水泳競技会

本競技会は創設2年目の昭和29年9月に武山の海兵隊プールで開催されたのが最初で昭和32年から校内プールで実施されるようになり、55年の歴史がある伝統的な競技会である。現在では、9月初旬に、全学年を対象とした大隊対抗方式で、競泳競技のほか応援合戦及び水球の17種目からなり、その総合点数で競っている。競泳競技には一般的な自由形及び平泳ぎ等のほか、作業服及び足ヒレを装着して泳ぐリレーなど、防大ならではの種目も含まれている。現在、騎馬戦については、プールの水深が深いため、安全管理上実施していない。過去の成績については、第1大隊が14回の優勝と最も多く、今年度は3連覇をかけた大会となる。

## 4 断郊競技会

本競技会は創設2年目の昭和29年12月に作業服に木銃のスタイルで久里浜から野比までを走ったのが最初で、55年の歴史がある伝統的な競技会である。当初はクロスカントリー（武装競技）と呼ばれ、翌年の昭和30年に校内周辺に場所を移し、現在の名称になる。現在では、3月中旬に観音崎公園から校内に至る約7kmのコースで、3学年を対象とした分隊及び大隊対抗で実施している。各大隊毎8名からなる分隊員を編成し、作業服に背のう及び水筒の装具を身につけて、分隊ごとタイム計測し、

大隊の順位は分隊の平均タイムにより決定している。過去の成績は、第2大隊が13回と最も多く優勝している。

## 5 持続走競技会

本競技会は平成4年度から「卒業生の体力向上」を目的に始められ、今年度で18年目となる競技会である。3月中旬の断郊競技会と同じ日の午後に、校内の1区間約5.7kmのコースを5名で駅伝リレーする要領で、4学年を対象としたチーム及び大隊対抗による競技である。服装は、運動靴に軽装である。沿道を埋め尽くした下級生の声援を一身に受け、幹部候補生学校を見据えて疾走する4学年の姿は逞しいものである。また、本競技会には、教授や指導教官からなる職員チームが参加する。過去の成績は、1大隊が8回次いで4大隊が7回の優勝と多く、昨年度は第4大隊が第1大隊の3連覇を阻止している。

## 6 棒倒し

棒倒しは、旧海軍兵学校で実施されていた競技を継承し、昭和29年の第2回校内運動会で初めて行われ、55年の歴史のある伝統的な競技会である。昭和35年には安全上の理由から競技が中止になるも、翌年の36年には伝統行事として復活、昭和43年に試合規定が不明確及び事故多発のため試合時間3分、傾斜45度と規定され、昭和48年からは現在のルールである試合時間2分傾斜30度に改正された。現在では、11月上旬の開校記念祭2日目の午後に、陸上競技場において、予選・決勝が行われ、依然として、開校記念祭のメインイベントとなっている。参加者は、各大隊総勢150名であり、空手道部やボクシング部などの打撃系校友会の学生は「攻撃部隊」に参加できない。対戦前に行っていた棒倒し責任者による口上合戦は、内容及び服装が過激で、防衛大学生らしくないことから、昨年度から実施していない。過去の成績は、第1大隊が13回と最も多く優勝しているものの、近年では第2大隊が4連覇を達成中である。



## 7 体育競技会

本競技会は昭和33年度から実施され51年の歴史がある伝統的な競技会であり、当初は駅伝競走の1種目のみであったが、翌年の昭和34年から格闘技及び球技が取り入れられた。現在では、全学年を対象として、12月下旬に校内の各競技場等において、剣道・柔道・銃剣道・空手道の武道、バレーボール・ラグビー等の球技及び陸上競技など11種目を実施している。各種目に得点があり、全種目の総得点の多い大隊を総合優勝として表彰している。

## 8 おわりに

各競技会において、「優勝」という一つの目標に向けて努力した熱意やノウハウは、各自衛隊で勤務する中で、かなり役に立っていると聞く。一方で、現役の学生の中に、一つのことに熱中することを回避する者が多く、各人の物事に取り組む温度差がかなりあるようである。今後は、各競技会の伝統を継承しつつ、形骸化しないように、いかに各学生の参画意識の高揚を図っていくかが課題となる。

(成績については平成21年8月現在のものである。)

## 「OB特別講話」を聴講して

小原台事務局総務部長  
2等海佐 大保 信一郎 (26期・海)



桜満開の平成21年4月9日、防大に奉職している関係から、防大57期生(平成21年度入校の新入生)に対する「OB特別講話」を聴講する機会を得ることができました。OB特別講話は、防大卒業の先輩に毎年新一年生に対して入校直後のこの時期に実施して頂いているものであり、恒例となっているものであります。私も、防大を卒業し今年で丁度27年が経過しましたが、この機会に初心に帰り一年生になった気分で、神妙に聴講いたしました。

特別講話のために来校していただいたOBは、防大16期の井上廣司先輩(陸:元東北方面総監)、香田洋二先輩(海:元自衛艦隊司令官)、新野修先輩(空:元航空教育集団司令官)、の三先輩でありました。三先輩のうち香田先輩は、私が護衛艦隊旗艦乗組の時の護衛艦隊司令部幕僚長、また、護衛艦艦長の時の自衛艦隊司令官という間柄で、懐かしさとともに、一種緊張した面持ちで講話を聴講した次第でした。三先輩の講話は、0840から50分ずつ、途中10分間の休憩をはさみ、1140頃まで行われました。

新一年生にとってこの時期は、入校して日も浅く、分刻みのスケジュールに追われ、時間の厳守や基本動作の演練を中心とした春季定期訓練期間にあたり、まずこれまで過ごしてきた一般社会での生活環境から、大きく変わる時期であります。精神的にも肉体的にも自分自身で各人各様に葛藤しつつ、与えられた環境に慣熟していく大切な時期でもあります。訓練に疲れたのか、また若者の性行ゆえか、若干の学生に疲れて舟を漕ぐ姿が見られましたが、概ね学生は目を見開き、何かを吸収しようとする懸命な姿が目にとまりました。

ここで各先輩が、講話された内容につきまして、その概要を僭越ながら紹介したいと思います。



井上廣司先輩

井上先輩の講話は、「我が道を振り返って 一豚にならないために」 という題名で、PKO派遣時に、豚に防弾チョッキをつけて武器の性能試験を行った際、防弾チョッキをつけたとたん豚が危険を察知して逃げまどった事例になぞらえ、人生にはびっくりすること、うろたえることがたくさんあり、そのままうろたえ逃げて終わってしまえば、豚と同じ人生となる、世の中の変化に対して素直に理解し、納得し、そしてそれを前向きにとらえ、善導できる能力を獲得しなさい、という趣旨の講話をされました。特にこのカンボジアPKOに際しては、ご自身が中心的に活躍され、あわせて自己の人生観も大きく変化されたことなど、また、世の中には、嫌なこと、嫌いな人などたくさんあるが、それらを大きく包み込んで自分が主役となる人生を作りなさい、など示唆に富む講話をされました。



香田洋二先輩

香田先輩の講話は、「君たちの一年間」という題名で、入校してすぐに、アイロンかけ、靴磨き、便所掃除などができるようになって、防大に入校していない10日前の自分たちとは大きく変化していること、そして実はこの自分のことは自分でできるようになるという習慣が集団生活には不可欠であり、これが将来幹部自衛官になった時はおろか生涯を通じて役立つことなど話されました。また、学生舎生活が立派な社会人になる上で得るところが大きいこと、防大生の競争相手は国内の大学生ではなく、世界の各国士官学校で同じような教育を受けている将校生徒であること、教務中に寝ないということへチャレンジすること、運動部をきちんとやれば強靱な体力と精神力そして多くの人との連帯感が生まれ人生が豊かになること、など4点を強調され、今の1年生の生活レベル、目線にたった講話をされました。



新野修先輩

新野先輩の講話は、ご自身が北海道ご出身ということもあり、「Be Ambitious」という題名で、映像とパワーポイントを使用され、防大を卒業した後は、ご自身が奉職された航空自衛隊を例に、航空自衛隊には様々な職種があり、活躍の場が用意されていること、個性豊かで才能豊かな人材が求められており、素晴らしい人生が待っていることをまず話されました。そして、自己の人生を振り返られ、次の2点、すなわち、「日の丸を背負い仕事のできたこと」、「素晴らしい仲間と共に仕事（特に同期生）のできたこと」を強調され、国のことを思い国民のことを思いながら仕事のできたことが幸せであったこと、そして、素晴らしい仲間と共に仕事のできたこと、特に同期生は、終生の宝であり何よりの財産であることを話されました。そして、最後に「迷った時には、Be Ambitious！ 苦しいときにはBe Ambitious！ いつでも前向きな結論を出して欲しい。」と締めくくられ、新一年生の将来を見据えた明日への希望をつなぐ講話でありました。

以上のように、三先輩いずれとも、ご多忙の中、創意工夫を凝らされ、心に染み入るお話をされました。

三先輩の講話を聴講した新一年生は、全体として当初は、やや緊張した面持ちでしたが、三先輩の言葉巧みな話術とリラックスした雰囲気に徐々に緊張の糸が解けて、表情も明るくなっていくのが、彼らの後方で聴講していた私にも肌で感じることができました。そして、これらの大先輩のお言葉を心の中におき、防大生活を力強く乗り切って行って欲しいと切に願った次第です。

私自身も、三先輩の講話を聴講し、自己を真摯に振り返ってみる機会を得ることができました。日常をただ目先の仕事に追われ、それを処理することだけに忙殺されている毎日を大いに反省させられました。一年生への講話でありましたが、一年生から見れば防大出身の大先輩である私などにも大変有意義な、そして心洗われる一時となりました。「初心忘るべからず」という格言の重要性を改めて感じた一日でした。

## ■ 顕彰碑献花式／開校記念祭今昔物語 ■

総務部担当記

11月8日、防衛大学校開校記念祭が例年通り行われましたが、防大同窓会事務局業務の関連で顕彰碑献花式とともに見学する機会を得ました。1975年の卒業以来、久しぶりに見学する開校記念祭を通じて感じたことを紹介させていただきます。話は若干逸れますが、開校記念祭前日に実施された顕彰碑献花式には、昨年母国で殉職された

インドネシア共和国軍フェビ・フィティアン中尉（第47期）のご遺族もご列席され、厳粛に執り行われました。同中尉は、



顕彰碑献花式

2006年の中部ジャワ地震災害における医療支援活動の為自衛隊が派遣された際、派遣部隊に対して献身的な支援をされたと聞いております。

さて、開校記念祭当日の朝、馬堀海岸駅に到着すると、既に多くの市民が防大行きのバスやタクシーに乗車するため列を作っていました。私の学生時代にもこのような光景があったのか知る由もありませんが、学生はもとより、学校で勤務した歴代職員の努力が、このように多くの市民にも親しまれる防大を作り上げたのだという思いを強くしました。

開校記念祭最初の行事である観閲式では、観閲部隊の糸乱れぬきびきびとした動作に改めて感動しました。三十数年にわたり陸上自衛官として勤務し、中央記念式典を含めて何度も観閲式を見てまいりましたが、観閲式を見てこのように高揚した気分になったことはありませんでした。自らのノスタルジーだけではなく、紺の制服に白手袋という服装が各動作をより際立たせており、誤魔化しのきかない基本動作に感動したのかもしれません。中には女子学生に率いられる中隊もあり、遜色のない彼女たちの指揮に時代の変化を感じました。



観閲式

午後には開校記念祭の華である棒倒しが行われました。各大隊の攻撃部隊は大隊のカラーに彩られた上着を着用しており、棒を中心に繰りひろげられる攻防の様子がよりわかり易くなっていました。守備隊形など戦法に若干の変化はありましたが、昔ながらの肉弾戦は変わりありません。優勝大隊の凱旋パレードで顔から出血している学生もみられましたが、防大のよき伝統は脈々と受け継がれており安心しました。棒倒しが開校記念祭最後の行事でしたが、陸上競技場の観客席を埋め尽くす数多くの市民の存在が印象的でした。



棒倒し

公教育の低下が問題視されて久しいわけですが、遅い学生の姿を目の当たりにして、防大においては建学の精神が今なお受け継がれており、文武両道を目指すわが国「最後の砦」として、いつまでもこの状況が続けてほしいものです。最後までご覧になった市民も、この若者たちにわが国の護りを託しても問題ないと安心されたことと思います。

一瞬のうちに青春時代へタイムスリップしてくれるような伝統行事がある一方で、私の学生時代にはなかったものは国際色豊かな出し物です。残念ながら訪れることはできませんでしたが、留学生母国の文化・伝統等を紹介するコーナーがあったと聞いております。私が目にしたのは、タイ、ベトナムなどお国自慢のエスニック料理の模擬店であります。訪れた時間がお昼を大分過ぎていましたので、「完売御礼」の立て札しか見ることはできませんでしたが、きっと長い行列ができていたものと想像します。聞けばタイ王国から留学の在校生は20人を超えるそうです。来年は是非とも本場のトムヤムクンを味わいたいと思いました。



野点



インドネシア店

同窓生の皆さん、青春時代を回顧でき、また新たな発見もできる開校記念祭をご家族とともにご自分の目でご覧になってはいかがでしょうか。

## 部 屋 会



松井 滋明 (2期・空)

表題のような会は、今どき用語として通用するのだろうか。

小原台への初の新入(3期)生が入った昭和30年、学生隊は2コから4コ大隊になった。第一第二幕僚監部が陸・海・空の三幕となった頃だが、まだ航空要員は生まれてなかった。連日砂ボコリを真っ向からかぶっていた第4大隊の一室の、たわいないハナシである。

早期に他界した2名の御冥福を祈りつつ、退官の頃関東周辺に居住した6名によりスタートした部屋会。誰言うことなく年に1度程度集合してワイワイやっていたが、2度目の退職の頃から居住地も関東のみならず中国・九州地方へも分散し、御無沙汰が長引いてしまった。それが今年に入って、あるチャンスから去る5月、走水でやろうということになり、紆余曲折の末、ランデブーポイントが懐かしい馬堀海岸バス停と決まり、更に中身は小原台での昼食や見聞等から走水界限を含む地域での行軍及び夕食会となった。夜の部は割烹旅館「東京湾」…ご存知? その昔伊勢町の小さいお店、元気な(バイクの)お嬢サンがいたではないか…。この日参加メンバーは、1期が深野俊さん、3期は秋元尚さん、黒川武彦さん、田中和彦さん、登川修治さんの面々。ウン十年の間、まれに母校を訪問した者・しない者の集合であったが総じて浦島太郎の如く、この春の感慨には言い尽くせないものがあつた。その日は、学校入口の地域で「楨」の記念植樹が行われた数日後であった。仰ぎ見る施設の威容や素晴らしさを始めとして樹木や道路網の変貌、資料館や体育施設の充実、そして学生舎は配置の変化や8人部屋の広さに感嘆したものであつた。資料館では柔和な表情の中に厳しさを秘めた思い出の楨校長像に敬礼、記念撮影をした。教育訓練の歩みや現況にも目を見張り、顕彰室で合掌。各種施設等々を覗かせてもらったものの、全容を知るに半日ではとてもとても。万歩計を持参した御仁が1万4千歩を確認した。更に海上(舟艇)訓練場まで行軍したら実習状況を垣間見ることが出来た。そこは我々の時代、レーンの敷かれた水泳プールを兼ねていた。「飛び込めー!」の号令のもと岸壁からドボンともぐり、帰らぬ人となった級友を思い出す、合掌。午前中に夕食会場へ荷物を預けてからというもの、学生会館での昼食に続き、高齢者による登山や下山続きのようであり、気持ち惹かれる観音崎までそろって行軍というわけには行

かなくなった。

とりとめもない駄文となるが、さて夕食会等でのワイワイガヤガヤといえ、察しのとおり(紙面の都合からも)網羅することは難しい。遂には、どうなるのか我が国は、といった「ヨモヤマ話」に至ったことも印象に残る。無数にとび出した話題の中から記憶をたどって幾つか拾ってみれば、例えば同窓会の原点は部屋会だというのがあつた。その昔、校外で「税金泥棒!」とののしられる環境にあり、砂ボコリの中で人造米を食べながら、雑草の如く強くなれ、と言われるはストレスにも繋がつた、しかし心落ち着ける寢室・自習室があり、同期あり先輩(対番)あり、その気兼ねなき場を原点だとするものか。そう言えば今や広々とした環境になった上、走水荘が転売されたこと等は、室員交流の場が減つたことになるのだろうか。更にまた「スカート姿」に時代を感じるといふ話題も大きかつた。美人や良い子が多くなり、楨校長の「心に遅れ、腕に力は抜けてないか…」が気になると言う。「…見はるかす人の巷…」もすっかり変わってしまったその環境で、また小原台の素晴らしいたたずまいの中で、「核」となるものは何だろうかといふテーマも現れた。関連して、学生の心を躍らせ、血を漲らせるために、先輩の国内外でのさまざまな活動——不撓不屈の精神が花開いたその活躍ぶりを——もっともっと大きく展示してはどうだろう、といった談話もあつた。

創立60年にならんとする、その歴史にまつわる断片・普遍の思惑を網羅することは至難の業だ。漫然とした一面なしとしないが、短時間にして有意義かつ愉快な集いであつたが故にトータルの感慨を、しかるべくレポートしたいと願うが、前述のとおり、とりとめのない散文になつてしまった。

高齢化に免じて…と甘える態度をお許し願うのみである。



昭和30年代の居住同室員  
小原台資料館にて(21.5.12)

## 楨校長の思い出

鹿野三千男（7期・空）

「小原台だより」vol.16の表紙「楨記念室」の写真を見て記念室はどの様になっているのだろうかと思いを巡らせているうちに、楨校長のことがいろいろと思い出され、投稿しようと思いついたものである。楨校長と特別なことが有った者ではない、遠くから仰ぎ見ているだけの目立たない学生であった者の「楨校長の思い出」である。なお、以下記すことは全く記憶のみによるものであり、その年月に若干のずれが有るかもしれないことをあらかじめお断りしておく。

### カッターは防大の表芸である

防大4年生の時のことであるから、昭和37年6月のことであった。短艇委員会の4年生7名が校長応接室に招かれた。そこで楨校長は「先の第6回全日本カッター選手権大会での準優勝おめでとう。カッターは防大の表芸であります。そのカッターで素晴らしい成績を挙げたことを大変嬉しく思う。又、4年生がしっかりやってくれたと聞いております。」と話された。顧問の指導教官を交えて小1時間ほど懇談したが楨校長は終始にこやかであった。1年生の時から「2位以下はビリと同じ、目指すは全日本の優勝のみ」として短艇委員会の先輩に鍛えられた。4年生の時、私は体調不良の為、正クルーを外れていたが、優勝したい気持ちは他の4年生と一緒にだった。優勝を目指し「2位以下はビリと同じ」と先輩たちと同じ檣を飛ばして練習をした。従って、万年4位の壁は突破したものの、準優勝は残念な結果であった。その準優勝を楨校長に喜んでいただけた事が自分達には嬉しかった。もし優勝していたらどんなに喜ばれたらうと7人で話し合ったものである。

「長年荒くれ男どもを相手にして疲れました」

退官された楨校長を招待して札幌で防大同窓会が開かれた。昭和40年の5月頃のことだったと思う。千歳基地・第2航空団に勤務していたので参加したが、パーティではなぜか楨校長と同じテーブルにいた。簡単な自己紹介をした後は、楨校長がどの様なことをお話になるか耳を傾けているだけであった。このときの楨校長のお話のなかで「長年荒くれ男どもを相手にして疲れたので、今はやさしい女性の学校に勤めております」と話された事だけが記憶に残っていた。数年後、新聞で、楨校長の訃報を見た。何回も読んでいるうちに「長年荒くれ男どもを相手にして疲れた…」と話しておられた楨校長のお姿が思い出された。

### 第2代防大校長来隊

昭和40年8月頃のことであった。第2代防大校長になられたO校長が空自・千歳基地に来られ、防大卒業生と

懇談された。（この時、1期生の方々は1尉で7期生は3尉であった。）席に着くとO校長は「卒業生の皆さんが防大生活で良かった事を聞かせてください」と言われた。それに対して先輩の方々が発表したことをO校長はニコニコしながら聴いてメモを取っておられた。しかし、それだけがあまりにも長く続くので、校長の話を知りたいと思っていた私は「校長はどの様な方針で学生教育をされるのかお聞きしたい」と言う主旨の質問をしてしまった。それまでニコニコしていた表情を一変させたO校長は、私は楨校長の方針を受け継ぎ、楨校長のやり方を継承し、楨校長の…、楨校長の…、楨校長の…、と早口で喋ったかと思うと会議室を出てしまったので校長副官があわてて後を追った。気まずい雰囲気が残り、私は何か悪いことをしてしまったような気持ちになった。しばらくして気持ちが落ち着くと「自分達は楨校長時代の学生で良かった」と思ったものである。

### 防大卒業生は10年後を見てください

1期生の防大指導教官着任前であるから私が2年生の時、その話をしてくれたのは短艇委員会顧問の指導教官だったと思う。その話とは『高級幹部会同か何かの席で、陸、海、空自衛隊の高官から楨校長に対し防大卒業生に関する文句・苦情が寄せられたとき、楨校長は「防大は卒業後すぐ役に立つ幹部を養成しているのではない、10年後を見て下さい」として、高官連中を黙らせた』と言うものであった。この話を聞いたとき、「卒業後10年で一人前の幹部に自分は成れるだろうか？」と心配に思ったものであった。卒業後は夢中で過ごしていたが、卒業後12年ぐらいたったとき、ふとそのことを思い出した。その頃は、空自の航空機整備幹部として一人前に成れたと思っていたので、楨校長の「10年後を見て下さい」に遅ればせながら何とか間に合ったのではないかと安堵した。但し、上司や部下がどの様に評価していたかは不明である。

### 防衛の務め

昭和38年防大卒業、幹候校、術科学校を修了して千歳基地・第2航空団整備補給群修理隊整備小隊付幹部として整備幹部の実務についたのが昭和40年2月からである。F-104J×2ヶ飛行隊、F-86D×1ヶ飛行隊から成る空自最強の第2航空団の各部署で活躍する防大の先輩の姿が眩しかった。私はと言えば、何事にも自信が無く落ち込むばかりであった。そんな時ふと、B4用紙に印刷され、防大4年生の時に配布されていた楨校長の「校長講話集」を読んだところ、気持ちが落ち着き元気が出てきたように感じられたので、それからは、「校長講話集」を何回も読んだ。半年も過ぎた頃には、机の上に置いておくだけで読んだと同じように感じられたので、常に机の上に置いておくようになった。楨校長の「防衛の務め（防衛大学校における校長講話）」が出版されてからは、B4用紙の「校長講話集」に代わり「防衛の務め」を机の上に置いていた。昭和43年3月初の転勤となったが、

以後、何処の部隊に転勤になっても常に自分の机の上に「防衛の務め」を置いていた。定年後の今もそのようにして元気をもらい続けております。

## 村井よしひろ (防衛大学校28期・陸) 宮城県知事 「加速!! 富県宮城」を掲げ、 大差で圧勝・再選される

前防大同窓会東北地域支部長  
袖井 孝 (9期・陸)

任期満了に伴う宮城県知事選は、10月8日(木)に告示、10月25日(日)に投票が行われた。

本知事選は、2期目を目指す村井よしひろ氏と遠藤保雄氏、天下みゆき氏の3氏による連立政権成立(9月16日)後の大型地方選挙として全国的に注目された選挙である。

### 1 村井知事の実績と立候補表明

松下政経塾出身の村井氏は、平成17年10月知事選に初当選後、富県宮城を掲げ、宮城のトップセールスマンとして、4年間にわたり東奔西走した。その結果、トヨタ自動車生産子会社のセントラル自動車やパナソニック等の企業誘致を次々に成功させるとともに、宮城県産品ギフトの販売等による「宮城ブランド」の確立、デスティネーションキャンペーンによる観光客の大幅な増加等、職員と県民、市町村一丸となり、宮城を豊かにする道筋をつけてきた。

村井氏は、この4年間の実績をもとに、9月9日「引き続き、県政の重責を担いたい」と述べ、再選を目指し立候補することを正式に表明した。この際、政党の推薦を求めない無所属で出馬し、広く県民に支持を呼びかける県民党の立場で選挙に向かうことを明らかにした。

### 2 告示から投票日までの選挙選

村井氏は、告示後「加速!! 富県宮城」をキャッチフレーズに、①企業誘致を加速させ、1万人以上の雇用創出②子育て支援を加速させ、今後4年間で待機児童ゼロの実現③農林水産業振興を加速させ、食糧需給率85%の達成などを政権公約として掲げ、県民に訴え続けた。村井氏は、第一声を被災地栗駒で行ったのを皮切りに、県内各地を17日間にわたり走り続けた。後援会を軸にした県民党を前面に出し、多くの県民の支援を受けながら、富県宮城への加速を強調した。知事の歩く先には、握手を求める人垣ができ、市部・郡部においてもその知名度と、温厚な人柄は党派・年齢・地域を超えて広く県民に浸透していった。

### 3 投票結果と2期目の知事への期待

10月25日(日)投票が行われ、即日開票の結果、村井氏が64万7,734票を獲得し、2氏(遠藤氏17万4,702票、天

下氏5万1,848票)に大差をつけて再選を果たした。県内の全市町村においても、村井氏が圧勝した。本得票は、1998年、支持政党なしで圧勝した浅野史郎氏の62万2,928票を上回る宮城知事選史上2番目に多い得票である。

大量得票により信任を得た村井氏の2期目の課題は、政権公約に掲げたマニフェストを着実に実行し、活力ある宮城に導くことが県民への約束であり、県民の期待でもある。

村井氏が多くの県民から支持を得て再選されたことを、小原台で学んだ同窓生として誇りに思うとともに、心からの祝意を申し上げる次第である。

今後、松下政経塾で学んだ政治・経営理念のもと、230万県民の代表として民の力を最大限に活用し、県職員・各市町村と一体となって富県宮城を加速させ、歴史に残る名知事を目指し、ご活躍されることを心から願っている。



村井嘉浩宮城県知事

## 日本の慰霊事業は今!



(財) 慰霊協  
若木 利博 (10期・陸)

先日久々に、防衛大学校同窓会本部(市ヶ谷)を訪問した。平成12年から同窓会本部でボランティア活動として、第一事業部長名の名刺を準備して頂き、事業支援を担当したことを思い出した。その間、防衛大学校創立50周年記念行事が小原台で挙行され、建設間もない立派な記念講堂内の壇上で、小森谷(12期・海)氏と共に記念行事の司会を担当した。思い出の小原台である。

平成21年1月から、(財)大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会(以下慰霊協)を支援中である。長い名称を持つ本協議会はいくつかの特性を持つが、名の示すとおり多くの民間の慰霊団体と共に大東亜戦争で戦死された日本人の慰霊を事業としている。名誉総裁として三笠宮崇仁親王殿下を仰ぎ、会長は陸士58期生の山本卓真(現富士通(株)名誉会長)、理事長は柚木文夫(2期・陸)氏である。約半年間の業務を通じ、特に日本国の慰霊事業の概要と特性を垣間見ることが出来た。以下、日本の慰霊事業の特性と本協議会の事業内容を中心にご説明する。

### 1 日本の慰霊事業の概要

#### ①日本の慰霊事業の特性及び問題点

過去の戦争に於いて、尊い生命を捧げられた戦没者に

対する慰霊は、国家として極めて重要な義務である。しかし我が国においては戦没者慰霊に専従する国の行政機関も実行組織も無く、戦没者慰霊に関わる事業及び活動は、民間の戦没者慰霊団体に委ねられている。国民に対し、国が行っている戦後処理の事業としては、厚生労働省が復員局の任務を継承し、厚生労働省設置法「引き揚げ援護又は戦傷病者、戦没者遺族、未帰還者留守家族若しくはこれらに類する者に対する援護又は旧陸海軍の残務の整理を目的とする事業」のみを根拠とし、慰霊祭、遺骨収集、慰霊巡拝等が主体である。一方、米国を始めとする諸外国の政府機関は、組織的活動にて、戦没者、捕虜等を徹底的に捜索及び回収に尽力している。

## ②大東亜戦争における戦没者数と遺骨収集状況

大東亜戦争における硫黄島、沖縄、シベリア抑留戦死者を含む海外戦没者数は約240万人であり、その内日本に送還されたのは、約125万柱で、未送還のご遺骨が未だ約120万柱もある。そのうち約30万柱は海没遺骨であり、又約25万柱は中国の旧満州地域や北朝鮮、ウズベキスタンなどにあり、中国等は国民感情を理由に遺骨収集を拒否している。結果、未だに約60万柱余のご遺骨が異国の地に残置されている。

国の命により戦地に赴き、家族そして日本のために、日本の将来を信じて、亡くなられた多くの方々の遺骨を速やかに収集し、国家として感謝の気持ちを込め、慰霊を行うべきではないだろうか？

## ③軍人墓地の管理状況

戦前には、「陸軍墓地規則」等に基づき陸軍省と海軍省が軍人墓地（82箇所）の管理を行っていたが、戦後は軍所有の土地や施設は全て行政財産から一般財産として大蔵省に移管された。昭和26年6月以降は「事務次官通達」により軍人墓地を都道府県又は市町村に無償で貸付け、公園等として利用も可能とし、自治体で管理することとした。地元の善意のみに依存する維持管理には限界があり、放置された軍人墓地は厳しい状況に直面している。同様に、全国市町村に2万5千箇所以上もある忠魂碑・忠魂塔についても同様の状況にある。これらの忠魂碑等には戦没者の遺骨を収納している施設も多いと聞く。

国のために殉ぜられた戦没者を祀る軍人墓地を管理し、慰霊するのは、国の責務であろう。しかしながら、この軍人墓地を維持管理する国の機関・組織が存在しない現状も、異常であろう？

## ④海外所在民間建立の慰霊碑の現況

国は大東亜戦争の主要な戦域に、合計15箇所の国立戦没者慰霊碑を建立している。しかし、海外各地にはその他、戦友会、部隊会等によって建立された慰霊碑（民間慰霊碑）が多く存在し、680箇所を数えている。建立団体の多くは、長期にわたりその地を訪れ戦友の霊を弔うと共に、地元関係者との交流を重ね、維持管理に努力されているが、近年は会員の高齢化に伴い、十分その意を尽

くることが困難となり、荒廃化の様相も十分推測できる。これらの民間建立慰霊碑の維持管理に、国としての格段の配慮を期待するものである。



## ⑤日本国は何故慰霊事業、遺骨収集、軍人墓地の管理を放置しているのか

戦後、陸・海軍省の解体に始まり、GHQの神道指令及び関連通達による「自治体主催の戦没者慰霊祭の禁止、忠魂碑の撤去」、等の影響であろう。例えば「学校が主催する靖国神社や護国神社及び主として戦没者を祀った神社を訪問してはならない」という禁止条項があり、独立後も日本は戦没者慰霊事業を放置してきた。その後、昭和59年3月10日衆議院予算委員会で、「独立国として神道指令は失効」とされ、平成20年文部科学省は関連通達を無効とし、訪問を解禁した。

## ⑥戦没者の慰霊に関わる日本国政府の姿勢・考え方（現状）

新公益法人法の別表（公益目的事業の定義）の22項目に戦没者慰霊に関わる該当項目は無い。当慰霊協の問い合わせに対し厚労省は、「障害者若しくは生活困窮者又は事故、災害若しくは犯罪による被害者の支援を目的とする事業」に該当すると回答した。流石にその後、戦没者慰霊は「国政の健全な運営の確保に資することを目的とする事業」に該当すると訂正した。しかし、そのようなレベルの問題だろうか？新たな法令で、「戦没者慰霊事業」と明記して制定されるべきであろう。

## 2 慰霊協の概要

①設立時期：平成17年7月7日

②本協議会の設立の趣意：先の大戦においては、多くの方々が家族を思い、祖国の安泰と民族の幸せを念じつつ、散華されました。これら戦没者に対し国民として、末永く、感謝の念を捧げその心を讃え、慰霊の誠を捧げなければなりません。しかし長い年月の経過の中に、国民の戦没者に対する慰霊の心が風化しつつあることを憂慮されます。私どもは戦没者崇敬に関する思想の昂揚を図るとともに、全戦没者慰霊事業の永続を図るため、既存の戦没者諸団体と相語り当協議会を設立いたしました。

- ③事業項目は、戦没者崇敬に関する思想の普及、戦没者慰霊の事業、今後の慰霊事業のあり方研究、海外における戦没者遺骨の収集及び戦没者慰霊碑の護持に協力することである。
- ④本協議会の参加団体（正会員団体）（平成21年7月1日現在）は、英霊にこたえる会、(財)千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会、(財)特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会、(NPO法人) JYMAの他、計32団体である。

### 3 まとめ

当慰霊協事務局は、理事長以下2名の小勢力であるが、参加正会員団体と共に、(財)借行社、(財)水交会及びつばさ会等の関連団体の協力を得て、戦没者崇敬に関する思想の普及、遺骨収集支援、及び全戦没者の慰霊事業を行うことを重視して事業を推進している。毎年7月には慰霊協の名誉総裁である三笠宮崇仁親王殿下のご臨席を仰ぎ、靖国神社で合同慰霊祭を実施し、多くの賛助会員等の参加を得ている。更に、遺骨収集、軍人墓地管理を含め全ての慰霊事業を国の責任で実施して頂くため、各慰霊団体と相携えて、政府への働きかけに努力している。読者の皆様には、日本の慰霊事業の概要を承知して頂き、本慰霊協の活動にご声援・ご支援・ご協力を頂ければ幸いです。



## 日本の屋台骨として育て



篠田 芳明 (13期・陸)

私は今、私が置かれた環境にいくら感謝しても十分でないと思える程幸せな気持ちである。

その第1の理由は、偶然とは言えこの日本に生まれた事である。

世界中の人々はそれぞれ“自分が生まれた場所が地球

上で最高である”との自信と誇りを持つのは当然であろう。然は然し乍ら、世界の多くの国で過半数の人達が、言論の統制と弾圧・貧困と犯罪・教育の不平等の他、人が人として生きる自由な行動や人権を著しく制限され困窮しているのが現実である。伝え聞く情報によれば、私が生を受けたこの日本から僅か1000Kmしか離れていない北朝鮮や共産中国のような国では『体制の批判』を口にしただけで罪人となり官憲に連行され正当な裁判にかける事も無く断罪されてしまうと言う。これらの国々では官民の格差、貧富の差が日本では想像も出来ないほど大きく、抑圧された多くの人民にとっては自分や家族の生命の維持さえおぼつかない。国を統べる首脳は、人民の困窮を横目に見ながら膨大な支出を軍事力に振り向け、見掛け倒し、あるいは他国に脅威を与えるような軍事力増強に血眼を上げている。要するに私達日本人の考える常識が全く通用しない世界なのである。

一方、我が国の状況はどうであろうか？戦後の不真面目な教育界（これを放置した国民、就中、政治家の責任は極めて大であるが）の墮落で、国民教育が疎かになり、日本人としての自覚も誇りも、更には人間として生きて行く指針さえ持たずその日暮らしの生き方しか出来ない日本人が大量生産されてきた。私の憶測ではあるが、もう少しましな教育が実施されて来たとしたら、より多くの人達が社会から脱落することなく幸せな人生を送っている筈であろうし、今の日本はもっと心豊かで平穏な国になっていたであろうと思う。

真っ当な人として生きてゆく指針を持たず社会から脱落した人は、生まれてから今日までの人生の軌跡が招いた結果であり『すでに本人の歴史であって、過去の事』と諦めるしかない。それでも、今の日本に於いてはそのように社会から脱落したと思われる人でも日々の生活に困窮し、餓死したという話は聞いたことがないし、今日から一念発起して努力すればいくらでも道が開けている国なのである。世界中を見渡して見ると日本ほど文化・教育・政治(?)・治安・自由・清潔など、どの分野を取ってもこれらを凌駕できるような上位の国は殆ど見られず、多くの国々がそれぞれ特有の悩みを抱えている事を考えると今の日本は別世界と言えよう。そのように恵まれた環境の日本に生まれた私の運命とこのような素晴らしい国を営々と築いて下さった祖先に先ず感謝したい。

第2の理由は防衛大学校で教育を受けた事である。私が入学した当時（昭和40年）は安保闘争真っ盛りの時期で、制服で外出した時には『税金泥棒!』となじられるような雰囲気も有った。私自身積極的に国防の重要性を認識して防衛大学に入学したわけではなく、貧しい親の収入を考慮して、たまたま理工系の大学で学費が不要というだけの理由による。しかし、当時日本の多くの大学生が、まるで熱病患者の様に政治闘争に明け暮れ騒然とする中、私は小原台という別世界で心身を鍛え、真理を追究し、それまで考えた事も無かった『国家とは何か？国際政治や戦争とは何か?』についても学ぶ事となった。

私の世界観はここで大きく変遷したと思う。そして、日本・日本民族の自由で逞しい生存・独立が（この国に生を受けた）我々にとって守るべき最も重要な核をなす事と同時に、他の民族・国家もお互いにその生存と主権を尊重しなければならない（というあたり前の）事を学んだ。

当時学生紛争に血道を上げていた同世代の人達もそれなりに真剣に考えていたのであろうが、今になって振り返って見ると、偏った情報のみを狭いフィルターを通して吸収し、実際の国際政治・人間社会の力学や歴史を無視した、新思想を囁（かじ）って心酔し、消化不良のまま若者の特権とばかり純粋で理想的な点のみを教条的に叫んでいたに過ぎない。そして、『日米安保反対！戦争反対！平和！平和！』と叫びながら自分達が行っている行動が平和には程遠い、破壊活動や内ゲバ、はては殺人行為にまで及ぶ矛盾を含んでいた。彼らはまた、国際社会ではそれぞれの国家首脳の国益判断によって（人類が目指す）理想など芥のごとく無視され、冷徹な事がまかり通る現実を見ようともしていなかった。

そのような混乱から隔離された別世界の防衛大学校において『日本人として世界に通用する紳士であり、かつ国防の中核となる士官を育成する事』を目標とした教育・訓練を受け『自分が何をしなければならないか』と言う自覚が芽生えていったと思う。

人類の歴史を学べば、この素晴らしい日本と雖も恒久の平穏と繁栄が保証されているわけではない。幾多の先人達が命懸けで守り継いで下さったこの祖国日本に如何なる困難が降りかかるうともその原因を断固として排除するのは我々日本人であり、その時点で生きる日本民族の責任である。万が一日本が国難に見舞われる様な事が生じた時、その中核として困難な任務を先陣切って遂行すべく防衛大学校学生は平素から、鋼の様に体を鍛え、鉄の様な強い意志と柔軟な実行力を持った人材たるべく錬磨しているのである。何と素晴らしい青春の過ごし方であろうか！

そして、60歳をとっくに過ぎてしまった今『心身ともに健康で、落ち着いた家族』にも恵まれている私の現実には些細な幸せではあるが『心豊かな人生を送らせていただいているのもそのお陰！』と自覚し、感謝している。何よりも、今を生きる日本人の一人として『日本の平和と安全』の一翼を担う国防の職務に仕え、多くの友人達と共に充実した日々を過ごせた事を有り難く思う。

若い防衛大学校の学生諸君には恵まれた小原台の青春を無為に過ごすことなく、精一杯謳歌して明日を担う若者として『日本の屋台骨をしっかりと支え得る人材』に成長すべく日々の修練に精励してもらいたい。防衛大学校の教育・訓練は日本国家にとって極めて重要であることは論を待たないが、ここで教育を受ける学生自身の人生にとってはそれこそ何ものにも換え難い素晴らしい宝物であると私は確信する。

## ノモンハン航空戦の 今日的意義



航空自衛隊幹部学校戦史教官  
源田 孝（18期・空）

昭和14年夏に日ソ両軍が旧満州国とモンゴルの国境線をめぐって激戦をくりひろげたノモンハン事件から70年が経過した。このことを記念して近現代史研究会（財団法人偕行社主催）は、平成20年度の「近現代史講座」でノモンハン事件に関する研究発表や97式戦闘機シンポジウムを行った。筆者も新たに入手したソ連軍の資料をもとに、「ノモンハン事件における空戦経緯」と題して研究発表をおこなった。

ノモンハン航空戦は、建軍以来、優勢な空軍と対戦することのなかった陸軍航空が初めて体験した本格的な航空戦であった。日本軍の中島97式戦闘機は、軽量ながら、日本人パイロットの操縦感覚に合致した良好な空戦性能と抜群の射撃安定性を有する軽戦闘機の極致とも言うべき傑作機であった。ノモンハン航空戦では、精強なパイロットの戦技とあいまって、対戦闘機戦闘ではその能力を遺憾なく発揮した。



97式戦闘機

ソ連空軍の主力戦闘機ポリカルポフI-16は、野戦での酷使に耐えられる頑丈な機体であったが、性能が公称より低劣で、機体の安定性も悪く、高練度のパイロットでなければ乗りこなせなかった。しかし、ソ連空軍の戦術は、柔軟であった。集団戦闘を常用し、戦訓を素早く反映させて戦法を改善し、機体を強化したことはソ連機の低劣な性能を補うこととなった。そして、落としても落ととしても向かってくるソ連空軍パイロットの敢闘精神は、ノモンハン航空戦に参加した日本軍パイロットが等しく観察している。陸軍は、長らく仮想敵であったソ連空軍の実態に触れたことになったが、ソ連空軍は手強い相手であった。

ノモンハン航空戦には、次のような多くの戦訓があった。

①当時の日本軍は、高性能の戦闘機、軽爆撃機、重爆撃機をバランスよく整備していた。しかし、地上部隊に対する協同の演練は不徹底であった。そのため、ノモンハン航空戦では、航空撃滅戦に勝利し、戦場上空の制空権を確保した後、激戦を続けている地上部隊に対する航空支援に成功せず、航空戦の戦果を拡大させるに至らなかった。

②戦闘に参加したパイロットは、体力を回復する暇もなく、連日、複数回出撃したため、疲労が蓄積し、それが原因となって戦死・未帰還が続出した。また、指揮官先頭を旨とする陸軍航空の伝統から、将校は連日、交代なしに出撃したため、中隊長以上の戦死・戦傷は17名に達した。将校パイロットの補充は、主として飛行教育部隊である明野陸軍飛行学校の教官に求められたが、陸軍航空本部は、このまま将校の損耗が続けば、冬まで戦闘を続けることができないと考えていた。

③航空機の損耗も驚くべきものであり、撃墜、大破を合計した機数は、補充機数とほぼ一致した。当時の97式戦闘機の月間生産数は38機であり、生産機の大部分がノモンハン航空戦につき込まれた。ノモンハン航空戦は、当時の日本の航空機生産力の限界でもあったのである。

④ノモンハン事件では、当初日本軍は、戦闘機部隊の勇戦によって、戦場の制空権を確保した。しかし、パイロット、航空機ともに補充が続かず、ソ連軍が多数の航空機を投入して、航空戦が消耗戦の様相を呈して以降、機体の消耗、パイロットの疲労、低練度要員の補充により、戦場の制空権はソ連空軍に渡り、防勢に陥ってしまった。

ノモンハン航空戦の教訓は、少数精鋭の航空部隊が、我に倍する敵と戦って消耗戦に陥った場合、劣勢に陥ることを示したものであり、航空軍備は「高性能の航空機」を装備して「訓練の精到」を追求するだけでなく、「質と量の兼ね合い」、「要員養成基盤」、「航空機生産基盤」を踏まえた総合的な政策が肝要であることを認識された。また、地上部隊の協同作戦の重要性も認識された。

筆者が奉職している航空自衛隊幹部学校の幹部普通課程は、1尉、2尉のほぼ全部の航空自衛官が履修する課程であるが、ノモンハン航空戦をテーマにして課題付与し、研究させている。入校するまでノモンハン航空戦などほとんど知らなかった学生達は、この研究で多くの教訓を学ぶ。研究発表を観察して判明したことは、学生の多くが、ノモンハン航空戦で露呈した当時の陸軍航空の問題点は、今日の航空自衛隊に内在している問題点と類似していると観察していることである。

ノモンハン航空戦には今日的意義があるのである。

## リーダーに求められるもの



菊川 忠継 (18期・空)

今年、わが国は戦後64年目を迎えている。敗戦の日から日本は驚異的な復興をとげ、世界に冠たる経済大国としての地位を築き上げた。一方、世界を見渡してみると、政治的にも軍事的にも、経済的にも、あらゆる分野で大きな変化が生じている。この変化は今後さらに拡大が予想される。こうした中、日本は世界の大きな変化に必ずしも適切に対応できず、政治、経済、社会ともに混沌とした状態からなかなか脱却できないでいると感じているのは私だけではないだろう。

塩野七生氏は古代ローマに注目し、関連する多くの著述があるが、「歴史とは人間である」と言う視点、すなわち歴史は人間が作るものであり、その中で、上に立つ人間の資質がきわめて重要な意味を持つとの指摘は興味深い。現在、多くの分野で混迷のさなかにあるといわれる日本が、ここに立ち至った原因とその処方を考える上で大いに示唆に富むものがあるのではないかと。

昭和58年になくなった安岡正篤氏は東西の古典から学び、人間としてのあり方を模索した人であり、日本の歴代宰相の師であるとか、帝王学の祖といわれた人である。この安岡氏の指摘のポイントはやはり人間そのものを注視したことで、いわゆる人間学として多くのものを残している。

私は昭和45年、防衛大学校入校以来、約40年間、防人としての道のりを歩んできた。

この間、世界の情勢やわが国の諸々の状況変化と同時に自衛隊を取り巻く環境も大きく変わってきた。国民の自衛隊に対する理解は深まり、自衛隊にかかわる役割、任務も増え、海外での活動が普通の状態となってきた。しかしながら、自衛隊にかかわる本質的なものは何も変わってはいない。

最初に述べたように、世界の大きな変化に対して日本は的確に対応できていない。これが真実とするならその原因は何か。それを考えることは極めて大きな意義がある。その一つの原因に、わが国の政界、官界、経済界等各界のリーダーたるべき人達に何か根本的に欠落したものがあからずかではないか。私は、日本を背負って立つ人達に欠くべからざるもの、それは「国家観」と「人間力」だと思う。

国家観とは自分の住む国をどういう国と認識しているかということである。そのことが今後この国をどういう国にしていきたいかにつながるのである。特にわが国の場合、各人の国家観を形成する上で、明治維新以降、今

日に至るまで世界との関係を押さえた上で、日本がどういふ道をたどってきたかを自らの努力で可能な限り客観的に勉強し身につけたかどうかポイントである。そして、昭和20年の敗戦以降、連合国並びに日本を占領統治したGHQがどういふ政策を実施したのか、そしてそれが今日の日本にどのような影響を与えているのかを知るべきである。今、盛んに日本の劣化、日本人の劣化が叫ばれ、日本の将来を不安視する声が多いが、リーダーたるべき人はその原因は何か、そしてまたその処方箋は何かを明確にする必要があるだろう。その出発点が明快にしてゆるぎない「国家観」である。年を重ね、地位が上がるにつれ人間は自分の考えに固執しがちであるが、いつの時代でも過ちをあらたむるに遅いということはないのである。

もう一つの「人間力」についてはいろいろな見方があると思うが、まず上に立つものにとって一番大切なことは、武士道、騎士道、貴族精神にも共通する、「ノーブレス・オブリージュ」、すなわち「上に立つものの責務」をしっかり認識しているかどうかである。その上で人間力を磨いていく。人間力の要素は沢山あると思うが、私はこれまでの経験から次の10項目を挙げた。そのほとんどは各分野に共通するものだと思うが、これからさらに人の上に立とうとする人は大いに参考にしてもらいたい。

- 高い志をもて
  - ……国のため、人のために尽くす心が大事
- 誠実であれ
  - ……何事にもまじめであることが第一
- 誇りを忘れず
  - ……プライドは最後の砦
- 一生自分を磨け
  - ……日々精進する気持ちを忘れずに
- 先頭に立つ
  - ……苦難のときこそ自らが矢面に立て
- 信頼が大事
  - ……相互の信頼が組織の礎
- 責任は我にあり
  - ……責任を取る覚悟がないと誰もついてこない
- 決心は適時適切に
  - ……これが物事の行方を決める
- 部下の力を結集せよ
  - ……個人の力はたかが知れている。組織力で戦う
- 謙虚さを持つ
  - ……上に行くほど謙虚さは大きな力

## 常在教場 —再任用教官として—



防衛大学校防衛学教育学群  
国防論教育室准教授 2等海佐  
色川(旧姓山田) 喜美夫(18期・海)

### 1. はじめに

平成18年2月27日海上自衛隊を定年退官しましたが、翌日制服教官として再任用され、引き続き防大において後進の育成に当たっています。18期生は陸・空幕僚長等の将官配置と警務隊司令等の特殊配置の数名を除き概ね定年退官し制服を脱いでしまいましたが、時折、来校される先輩方や同期が制服姿の私を見て、何故こいつはまだ制服を着ているのかと怪訝な眼差しで質問を受けることが度々あり、その都度説明に苦慮しています。

そこで今回このような投稿の機会を与えられましたので、再任用制度の概要を紹介し、在職中に培った能力、部隊勤務を通じて会得した技術等を退官後も自衛隊において活用する道があることを認識していただくとともに、再任用教官としての防大における勤務状況、感想を述べさせていただきます。

### 2. 再任用制度

再任用制度は、職員の定年後の雇用と年金との連携を図るとともに、長年培った能力・経験を有効に発揮できるようにするため、平成13年4月1日に導入された制度であり、定年後も引き続き働く意欲と能力を有する職員を対象として採用されるものです。

定年を約2年後に控えた平成15年12月に人事係から再任用の志願調査がありました。定年後は他の職業で第2の人生を過ごすのもいいかと思いましたが、平成13年12月に防大教官を拝命し学生教育に当たっており、教育によって日々成長していく学生の姿に喜びを感じ、また、自分の経験、体験を後輩に伝え、立派な幹部自衛官を育てたいとの思いから再任用を志願しました。

教官としての知識・技能については様々な条件がありましたが、幸い現役時代に教育分野での勤務が比較的多く、プログラム業務隊(現指揮通信開発隊、艦艇開発隊)で行われていた特別講習の教官や幹部専修科情報処理課程の主任教官を経験し、そこでは教育に当たって上司、先輩方から厳しく指導を受けました。また、平成10年8月には海上自衛隊幹部学校の教官を拝命し、当初安全保障関連を担当しましたが、海上戦略担当の先輩の定年退官に伴いその後任として勤務し、そこでも多くの先輩から幹部教育のあり方、教官としての心構え等をご教授いただきました。

このような経歴もあり、再任用のための臨時健康診断でも特に異常は認められず、また、当時の上司初め多く

の方のご尽力・ご支援をいただき再任用教官として上申されました。そして平成16年5月に再任用候補者にリストアップされ、6月には再任用の内定をいただくことができました。

任用後は1年ごとに健康診断を受け、更新手続きをして現在に至っていますが、健康状況に加え体力検定結果も審査対象になるとのことで健康管理に留意するとともに、時間を見つけて体力練成に努めています。

### 3. 再任用教官としての勤務

防大では現役時代と同様に国防論教育室に所属し、「防衛学概論」と「防衛学特論」の2科目を担当しています。「防衛学概論」では入校早々の1年生に対し防大で学ぶ防衛学全般の概要を、「防衛学特論」では4年生に対し防衛学の集大成としてゼミ形式で国防・軍事に関わる内容を教えています。

今年で着任して8年目（再任用期間を含む）を迎えますが、入校早々教場においても緊張し、オドオドしていた1年生が4年間（中には5年の学生もいます）の防大生活で逞しくなり、卒業式を終え幹部候補生の制服を着て本館前を通って巣立って行く姿を今春で4期見送りました。また、着任早々に「防衛学特論」で教えた4学年海上要員が、平成19年以降、小隊指導官として防大に戻ってきました。任官して部隊経験等を積み立派な初級幹部となった教え子との再会は教育指導に当たった教官から見るとうれしいものです。更に幹部学校で教えた学生達が部隊・機関の指揮官、中枢で活躍している姿を見るにつけ、また、思いがけないところで出会い、「お世話になりました」、「元気にやっています」と声をかけられることもあり、教官冥利に尽きる所でもあります。これも再任用され引き続き自衛隊で勤務しているお陰と感謝しています。

学生教育に当たっては、「一期一会」、「常在教場」を座右の銘とし、学生達との出会いを大事にするとともに、教育にたずさわる者として、いつでも、どこでも常に教場で学生を教育する心構えで臨んでいます。

また、引き続き教官（准教授）として勤務するに当たって、以前から関心のあった人文社会科学分野における深奥を究めるため、平成20年4月に放送大学大学院に入学し、院生として勉学、研究活動に従事し、論文作成に苦勞しています。

### 4. おわりに

現在、防衛学教育学群には4名（陸1名、海1名、空2名）の再任用教官がいますが、防衛学教育の継続性とその歴史・背景の継承に極めて重要であり、また、教官個人にとっても有益であることから、教育分野における再任用を積極的に推進し、所要の知識を有し学生教育に意欲のある教官を引き続き任用されることを願っています。

## 沖縄の思い出と中国の脅威



滝脇 博之（18期・空）

「青い空と碧い海」——沖縄のイメージを表すフレーズですが、空自在職中、2回の沖縄勤務を今思い出してもその通りだと思います。

私は平成11～13年（1999～2001）に航空方面隊の防衛部長として又平成17～18年（2005～2006）には那覇基地司令として勤務しました。最初の勤務では2000年問題や沖縄サミット等、大変でしたが、楽しく充実した勤務が出来ました。2回目は、基地司令という事もあり沖縄県の多くの人達と付き合うことが出来、更に充実した勤務でした。素晴らしい自然は勿論、酒や肴も美味しく、人情も最高でした。後述しますが、特に私が新聞で叩かれた時、本当に多くの沖縄の人々から励ましの言葉を頂きました。

時々「沖縄の人々は反米・反自衛隊で、左がかった人が多く大変だ」と言う方もいますが、沖縄で生活してみると全く違います。多くの沖縄の人は、温かく気さくで、初対面でも物おじせず、明るく話しかけてきますし、自衛隊が大好きな人も大勢居ます。左がかった新聞社の若い記者達とも、よく飲みかつ語りあいました。

一方、沖縄は中国の脅威を肌で感じる地域でもありました。最初の勤務時、防衛部長ということで毎日、周辺の情勢報告がありますが、その頃一番の懸念事項は、中国の海洋調査状況と軍事情勢でした。中国は20年も前から沖縄周辺の資源探査を含む海洋調査を行い、私が勤務していた頃も毎日3～4隻の調査船が周辺海域で調査を繰り返していました。北欧の調査船まで使用し徹底的に実施していました。おそらく、その総仕上げが平成16年の中国原潜による石垣島領海侵犯事案だったと思います。所によっては、深さ200mも無い浅海を座礁もせずに潜航を続け、中国の軍港に逃げおおせたのは、沖縄周辺の海底の調査を完全に終え、海底の地形を熟知していたのだと思います。

勿論、日本本土周辺の調査もしていたようですから日本周辺の海底全てを調査済みかも知れません。そういう意味では2000年頃から中国は、太平洋の深海へ何時でも自由に進出できるようになった訳であり、これは米国にとっても大きな脅威であるといえます。

更に中国はこの20年来、毎年二桁の伸びで軍事費を増額し、今や名目上の金額でも自衛隊の防衛予算を上回り、実質は5倍以上の軍事費（計上されない研究費や物価水準を勘案すれば）を費消しているのです。

2000年当時から、そのような中国の覇権主義と軍事大

国化に懸念を持っていましたが、二度目の勤務の2005年頃には、各種兵器の近代化やミサイルの沿岸配備数の増加、空母の建造計画等、中国の脅威が顕在化してきました。

その頃、定期的に記者懇談会を開いていましたが、5回目の懇談会で、私は那覇基地司令として記者の質問に応じる形で中国の脅威の顕在化やそのための沖縄の重要性、或いは日米同盟のあり方等について軍事的観点から懇切丁寧に話をしました。次の日、これらの内容が沖縄の新聞（赤旗より左傾）に大きく取り上げられました（3日間、連続）。曰く「現役の基地司令がとんでもない事を言っている」「下地島空港の軍事化か？」等々、その当時の沖縄の新聞だけは、先般の田母神さんよりも大きく取り扱ってくれました。

翌日早速、空幕に出頭を命ぜられ、嚴重な「注意」を受けました。しかし当時、航空総隊司令官の田母神さんを始め多くの上司のお陰もこれあり、その後それ以上の処分を受ける事なく航空救難団司令職を最後に私は今春、無事退官しました。

当時、沖縄の新聞によるバッシングの際、上司の方々の支えだけでなく沖縄の多くの方々から励ましを受けました。「よくぞ言ってくれた」「当然のことだ」「言論を封じようとするマスコミや労組等こそおかしい」等々、沖縄選出の国会議員を始め、首長さんや経済界の方々、或いは名も知らぬ多くの方々からもメールや手紙或いは電話で励ましを頂きました。

私は涙が出る程嬉しく思いましたし、改めて感じたのは「沖縄の人は本土の日本人と何ら変わる事の無い日本人である」という事であり、マスコミが流している「沖縄の強烈な反米や反自衛隊」というイメージは虚構であるということです。逆に沖縄県の多くの人々（一部の左翼は別にして）こそ本土の日本人以上に中国の脅威を感じているのかも知れません。

かつて旧ソ連の脅威が我国の安全保障にとって最大のものでしたが、今や中国の脅威が我国にとって最大のものです。日本との地理的距離において、また圧倒的に増大しつつある中国の軍事費と世界経済に及ぼす影響の大きさにおいて、更には民主主義とは相容れない共産党の独裁国家でありかつ苛酷な国民性、いずれの面からみても脅威です。我々は、決してパンダ外交やピンポン外交に騙されてはいけません。その微笑の裏に隠された鎧もしっかり見据えなければなりません。

最後に後輩の防大生諸君に言っておきたい。中国を拒否する必要は全くありませんが、その本質や本性をしっかり見る必要があります。物事を見誤る事無く、軍事的観点や安全保障の観点からも中国を分析し評価できるようになってもらいたい。更には今後、幹部自衛官になっても安全保障や自衛隊について、臆することなく又黙ることなく、何時、誰とでもしっかりと議論をし自分の考えや信念を話せるような有能で素晴らしい指揮官になってもらいたい。

防大生および現役幹部諸君の弛まぬ精進に期待します。

## 自衛隊という素晴らしい組織



織田 邦男 (18期・空)

今年の春、35年間着なれた制服を脱ぎました。防大入校直後、明日やめようか、明後日やめようかと思ひ悩んだ日々が、ついこのあいだのように思い出されます。あれから39年間、自衛隊には「よくぞ、ここまで育ててもらった」と感謝の気持ちで一杯です。

高校時代の同級生も、同じく退職時期を迎えています。故郷に帰った時、酒を酌み交わしながら、互いの人生を振り返る時があります。その時、今更ながら自衛隊と一般企業との違いの大きさを再認識させられます。

「事に臨んでは危険を顧みず」任務に邁進しなければならないという違いはもちろんあります。それより目立たないですが、意外と見過ごしている大きな違いに気が着きました。それは一般の企業が個人の「能力の消費」を要求するのに対し、自衛隊は「能力の貯蓄」を求める組織だという違いです。

企業は当然ですが短期的な業績が求められます。社員の業績の総和で企業が成り立っている以上、個人の能力を企業の為に目一杯発揮してもらわねばなりません。しかしながら能力は常に充電し、磨かねば擦り減り、消耗し、陳腐化します。忙しさにかまけて自分への貯蓄を怠っていると、際立った能力を持っていた人もただの人と成り下がります。会社にとって有用な存在ではなくなれば、会社は新しい有用な人材を求めます。

目一杯働かされた揚句、弊履の如くリストラされる現代の悲劇が昨今取りざたされています。市場原理で動く企業にとっては当然と言えば当然です。昔とてつもなく優秀だった同級生が、昨今リストラの憂き目にあった事例をいくつも聞きました。かつて優秀で颯爽としていた同級生が、何十年かぶりに再会した時、使い古された雑巾のように変貌している姿を見て驚いたこともあります。放電し尽くした使用不能のバッテリーのような変貌ぶりです。そういう人に限って、入社直後から高給取りの企業戦士として一心不乱に働いて来た人達が多いようです。放電量が充電量を上回った結果がその変貌ぶりに現れたのでしょうか。長年の充電努力の有無は歴然として現れます。我々の年になりますと、もうその個人差は取り返しがつかないでしょう。

一方、自衛隊は百年に一度あるかないかの国家危急存亡の際に、立派に働けるよう、日頃から実力を蓄えておくことを生業とする組織です。従って、常日頃から各個人が自分自身に投資し、充電に心がけ、ポテンシャルを高めておくことが要求されます。いわば「能力の貯蓄」

が求められるわけです。「自衛官の心構え」に「個人の充実」が掲げられている所以です。「自分自身を高めるために日々頑張る」ことが自衛官の責務であり、「自分自身の為に頑張る」ことがひいては国の為になるという有難い組織なのです。



総理挨拶（当時）

防大を含め39年間、私も様々な教育機会を与えられ、能力の向上を求められてきました。また自己研鑽によって能力の充電や貯蓄を心がけるよう指導されて来ました。部隊では常日頃から、気力、体力、徳力の向上が求められ、知識や技能の練磨が日々要求されます。39年間、その恩恵を受け続け、「自分の為に頑張る」、大いに育ててもらったというのが退職時の実感です。

自衛隊は、「如何に敵を倒すか」に焦点を絞り、上記のように培った個人の能力を集約し、総合戦闘能力を高めるのが平時の任務です。その結果が精強さとなり、抑止力になるわけです。

二十数万の自衛隊員は日夜、「敵を倒す」ために一生懸命汗を流しています。しかしながら自衛隊の面白いところは、汗して得た戦技や戦法が決して使われないことを祈りながら更に汗するというところでしょう。私も戦闘機操縦者として、まさに「我が汗、無駄なれ」と祈りながらの35年間でした。我々の汗が結実せず、使われないことが日本にとって最も幸せだという類まれな組織だからです。

一般企業にとっては、そうはいきません。毎日の汗が結実しないようであれば、早晚その企業は倒産するでしょう。短期的な業績が求められる企業にとって、各個人の能力の充電より、放電、消費が優先されるのは当然といえば当然かも知れません。

自衛隊と一般企業の違いを再認識するとき、防衛省、自衛隊という組織はつくづく素晴らしい組織だと実感します。防大入校時、明日辞めようか、明後日辞めようかと思悩んだ末、我慢して続けたことの決断の正しさを褒めてやりたい気になります。

「我らここに励みて、国安らかなり」という言葉を信じてつづつ過ごした39年。自分自身を磨き、戦技戦法を練磨し、精強な存在実現に汗してきました。優れた兵器体系を保有し、それを使う自衛官が日々、個人の充実を図り、戦技戦法を磨き、精強な存在でいる。これが最大の抑止力

です。戦わずに平和を保つのが理想なのです。結果として「殺すことなく、殺されることもなく」、「国安らかな」状態で無事任務を終えることができた喜びはこれに優るものありません。退職した今、「自分の為に頑張る」＝「抑止力向上」＝「国の為」という素晴らしい組織に所属した幸せをしみじみ感じる今日この頃です。39年間、我を育ててくれた防衛省、自衛隊に感謝あるのみです。

## 撤収業務について



中部航空方面隊司令部  
装備部長1等空佐

寒河江勇美（21期・空）

### 1 はじめに

航空自衛隊が実施したイラク復興支援活動は、2003年12月26日先遣隊が出発し、2009年2月14日撤収業務隊が帰国し終了しました。

その間、延べ3,600名の隊員が従事し、飛行距離約70万キロ（地球17周に相当）運んだ人員約4万6,000人、運んだ物資670トンにのぼり、全くの無事故、一件の不祥事もなく、高い規律を維持し、多国籍軍からも高い評価を受けた活動でありました。

今回、「小原台」に寄稿する機会をいただきましたので、2008年12月から撤収業務隊で勤務した状況及び現地でも感じたこと等の一端を述べたいと思います。

### 2 撤収業務概要

撤収業務隊は、最終の空輸任務を無事完遂した第16期派遣輸送航空隊から業務を移管され、使用していた物品を全て引き継ぎ、撤収の業務が開始されました。

装備品等は、使用できる物、できない物、本邦に輸送する物、現地で処分等する物を判断し、それに見合った必要な処置を実施しました。

宿舎等は、隊員の宿泊場所を清掃の計画に合わせ移動しつつ部外の現地業者を活用し、室内清掃及び主要の塗装等を実施しました。事務所等は、業務の進捗を見ながら、自分達で清掃と塗装等を実施しました。

輸送に関しては、本邦において契約された部外の業者を活用し、品目個々の梱包及び集積等輸送準備、船便、空輸便の出発までの保管、通関書類の作成、積載状況の確認等を実施し、航空貨物 約64トン、船舶貨物 約87トン、計約151トンの本邦に向け発送処置しました。

通信設備は、運航のために必要な通信回線、器材を運用及び事務所地区等から撤去し、床下及び天井に張り巡らせたケーブル類を、埃の中マスクをしゴーグルをかけ、這いずり回りながら撤去しました。

プレハブ等の物品は、費用対効果を考慮し不用決定の後、一品一品相互にチェックし、正式にクウェート軍へ引き継いできました。

### 3 本活動で感じたこと

撤収は、イラク復興支援活動の「しんがり」として、長期滞在型、派遣型の国際貢献活動を無事に終結させる業務でありました。この撤収という業務自体、航空自衛隊の歴史の中で初めての任務であり、歴史に残りかつ今後の同活動等のひな形となる重要な位置づけのものでありました。

このため、任務を実施するにあたり隊員達に要望したことは、「立つ鳥跡を濁さず」という日本の美德を実践すること、そして日本人として武士道の国から来た誇りを胸に大和魂で常に活動して欲しいということでありました。

とは言いましても、「立つ鳥跡を濁さず」、借りた施設は借りた時以上にきれいにして返す等の日本の美德を実践し、他国の軍隊に見せつけてくることが、非常に大変なことでありました。その一例を紹介します。

クウェート軍から借用し使用していた宿舎等の清掃に活用した部外の現地業者は、ワーカーと称する東南アジア等からの労働者を雇用し、清掃等を実施させます。これがクウェート国内では、一般的なやり方でした。

クウェートは年中風が吹き、この風が非常に細かい粒子の砂と一緒に運び、いくら窓を閉めても隙間から入り込み、いつの間にか室内が砂で汚れているのが常態です。こういう所での清掃は、モップに水を十分につけ、表面をただ拭き取るだけなのです。どうせまた汚れるのだから、汚れたらまた水で拭けば良いという感じです。

室内の塗装なども、前の塗装を除去し塗り直すのではなく、剥がれた表面を簡単に落とし、その上から何度も塗り重ねたような感じなのです。このため古い箇所は捲り上がり、触るとパリパリとどこまでも剥がれ落ちてくるといった状態でありました。したがって、ここには触れないようにするのが普通のようなものでした。

しかし我々は、「立つ鳥跡を濁さず」の気持ちをしっかり表して、借りた時以上にきれいにしたいということで、窓枠の隅々までも汚れをとり、壁の塗装もきれいにしよう妥協することなく徹底して要求しました。しかし、現地の責任者を含めワーカーは、そのような日本の感覚、清掃のやり方など今までやったこともなく、なぜそこまでするのか全然理解できない状況でした。

航空自衛隊との契約ということで、業者に監督者としておられた日本人の方を通じ、何度も何度も修正をお願いしました。なかなかきれいにならなかった訳ですが、日本人の監督者の方が我々の要望を十分理解し、我々の撤収に懸ける熱い思いを酌んで下さりワーカーに一生懸命教え、自らやってみせ、やっとの事で何とか満足のいく、借りた時以上のきれいな状態にすることができました。

この建物の清掃、塗装は一週間以内で終了させる計画でしたが、実質約2週間強かかってしまっていました。

しかし、これが文化、習慣及び自然環境等が異なる外国における現実の一つなのであります。

これはほんの一例にすぎず、かつこのようなレベルの話だけではなく、過去の教育、経験では推し量れないことが多々あり、日本の常識が通じないことをつくづく感じました。今後同じような任務に就く又は計画を立案する方々等に覚えておいていただければ幸いに思います。

## 防人の魂を胸に、 政治を志して



宇都 隆史 (42期・空)

防衛大学時代は、学業不振から1年生を2回も経験するほどであったから、どちらかといえば出来の悪い方の部類に入る学生であったろう。そんな私が、政治家を志して退職した時、恐らくかつての教官達は驚いたに違いない。おぼろげにも国家のことを考え始めたのは、やっと3学年になった防衛学ゼミ位からで、任官してからも、現場勤務を通じて国防上の様々な問題点や矛盾を感じつつも、同僚らと酒で憂さを晴らし励まし合って明日への活力を充電する、そんな平均的自衛官だった。そんな私が、松下政経塾の受験に臨んだのは、「自衛隊で育った自分が、政治家を志す若者たちの中で、どれ程通用するか試してやろう」という程度の軽い気持ちからだった。

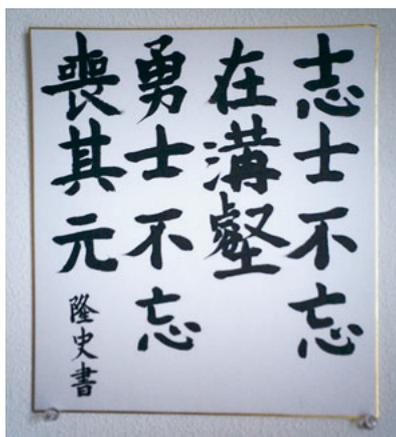


松下政経塾正面景色

政経塾の入試は書類選考と3回の面接からなる。書類選考では、日頃の国防問題に対する熱き想いを書き綴り、一次の個人面接には制服で臨んで、民間の面接官の度肝を抜いた。二次試験は変わっていて、公園の便所掃除だった。その時は夢中だったが、尿石や汚物のこびりついた便器を素手で磨くのは、やはり勇気がいる。しかし、便所掃除で試されていたのは、率先力だけではなく、他人との協調性や作業全体への目配り、そして何よりも嫌がらずに楽しめているかどうかという点にあったらしい。三次の役員面接での評価基準は、「運と愛嬌」だったようだ。これは創設者の松下幸之助が決めた基準で、1期生以来30年経った今でも、頑なに守られている。後日届いた通知には、松下政経塾第28期生内定者6名に選ばれた旨が記されていた。恐らく私は「愛嬌」採用だったに違いない。

いざ内定までもらうと、「退職」という想像もしなかった現実に、私はうろたえた。「仲間を置いて、辞めていいものか」「分不相応なことを考えているのかもしれない」と、心の中での葛藤の日々が続いた。ある日、私は思い切って上司に進路相談をした。上司にとっては青天の霹靂だったと思う。罵声を覚悟していた私だったが、「お前一人がいなくなっくらいで揺らぐような組織じゃない。思いっきりやってみろ。」と背中を押してくれた上司の温情に、私は頭が上がりなかった。

松下政経塾の入塾式当日。湘南の空はどこまでも澄み、新たな未来が開ける予感に満ち溢れていた。しかし、喜びもつかの間、翌日からの研修が始まると、山のような課題図書と多忙なスケジュールに政治を志すことの厳しさを思い知らされた。



書道教室

政経塾での研修は、人間教育に重きを置いている。よって、政治学や選挙の手法といった講義は皆無で、朝の清掃から始まり、剣道、茶道、書道、坐禅といった、およそ政治とは無縁と思われる精神修養が多くもり込まれている。そこから、「国を護る」ということは、単に領土を保全するということだけではなく、「国の伝統や文化、そして日本人としての精神性を堅持し、それを子孫に受

け継いでいくことである」ということを教えられた。

政経塾での研修も残すところ半年となった頃である。忘れもしない平成21年8月30日。戦後の日本政治を担ってきた自由民主党が、衆議員総選挙にて歴史的惨敗を期し、民主党政権が誕生した。私は、時代が変革する音を確かに聞いたような衝撃を受けると共に、そのあまりに拙速な変化を許容した国民全体の空気に、国家の未来を案じて恐ろしくなった。「今の日本に必要なのはチェンジではない。世の中には、変えてはならないものがある。そして、日本には他国にまねのできない不変の価値が存在するはずで、それを護り通し継承していくのが真の保守の役目だ。」と信じてやまない私は、日本の再生のために「保守」の旗を掲げた自由民主党に馳せ参じ、自ら党改革の一員として戦うことを決意した。



防衛大臣（当時）との懇談

将来に対する不安は無いと言えば嘘になる。しかし、制服を脱いでこの方、一度たりとも後悔したことはなく、むしろここまで育てていただいた防衛大学校や自衛隊、そしてこれまで出会った多くの方々から心から感謝している。現在は全国を行脚し、真に日本を愛する保守層、自衛隊支援協力団体や自衛官OBらを訪ねて、これからの政治に対する願いや、国家に対する憂い。そして我々若い世代に対する熱い想いに耳を傾け、人生の先輩方からの「魂のバトン」をしっかりと受け取ることに時間を費やしている。愛する日本と未来の子どもたちのため初志を忘れず、政治の道を一步一步、確かな足取りで進んでいくことが私の使命であり、私心を排して、国家のために政治の世界で汗を流すことが、現場で任務に邁進する仲間達に対する、私なりの「国防」であると信じてやまない。

# 期生会だより

## 「楨の樹」記念植樹の記

高岩 利彦 (2期・陸)



平成21年4月26日(日)、記念植樹のセレモニーが厳粛に行われ、ここに卒業50周年記念事業はすべて終わった。その日は「天気晴朗なれど風強し」で、前日の大雨もなかったかのように芝生は乾いていた。

この日集まったのは、1期生6名(荒海巖、安藤堅一、伊藤巖、小西琴生、鈴木龍生、法性弘)、2期生9名(井川宏、鎌田武司、川嶋忠、佐藤平人、高岩利彦、野々村郁利、平山繁樹、松下尚武、水野信夫)、学校側6名(副校長2名、司1練部長、陸・海・空制服自衛官各1名)と鎌田君の長男(日本製鋼所勤務)及び孫(男子中学生)の総勢23名であった。



(左から)  
一期生と楨の木  
伊藤 巖氏  
法性 弘氏  
小西 琴生氏  
荒海 巖氏  
安藤 堅一氏

一行は、応接室で自己紹介をした後、セレモニーは玄関前で行う予定であったが、あまりにも風が強くて話が聞こえない状態だったので、挨拶だけは玄関ロビーでということになった。まず、1期生期生会会長の法性氏が挨拶。「今回の記念植樹についてはことごとく2期生のお世話になりました」と感謝の言葉を述べられた。続いて2期生会前会長で記念植樹実行委員会委員長の井川君が、記念植樹を実施するに至った経緯、地元横須賀市在住の北野、高畑、川嶋等実行委員によって、学校との交渉、造園業者との調整等をやって頂いたことを披露し、更に、久里浜の仮校舎を経験し、小原台への引っ越しを実施した1・2期生が本館前の左右に楨の樹を植樹することの

意義を述べ、参集者一同の納得を得た。最後に、岡崎副校長が、謝意と今後に力強い言葉を述べられた。

引き続き玄関前で記念の集合写真撮影。浦賀方向からの強風にあおられながらもプロの写真屋さんのカメラに収まった。



(左から)  
二期生と楨の木  
佐藤 平八氏  
平山 繁喜氏  
高岩 利彦氏  
井川 宏氏  
水野 信夫氏  
松下 尚武氏  
鎌田 武司氏

鋤入れ式は、本館右側に植えられた1期生の楨の樹から行われた。23名が入替わり立ち替わり鋤入れと自分のカメラで撮影しようと思死になったものだから厳粛どころではなく、お祭り騒ぎの様相になった。風がこんなに吹かなければこのあたりでゆっくり懇談も出来たであろうに。

ここで記念植樹を実施するに至った経緯について少し述べておく必要がある。

そもそも記念植樹は苗木を植えて、その成長を見て当時をしのぶものとの印象があるが、われわれの最初の構想もそれに違わず、小さな苗木を防大の何処かにと言うことで、防大側も「駐車場の片隅にどーぞ!」と言うことだった。ところが検討を重ねているうちに、北大のポプラ並木、東大のイチョウ並木等、特色のある並木を計画してはと言う案が浮上した。そういえば、防大では、毎年、各期が植樹をしているが、全く統制のとれた計画がなく、場当たりに空いているところに、乱雑に植樹をしている。だから、卒業生が防大を訪れても自分の期が何処に植樹をしているのか分からない状況である。これではいけないと、2期生卒業50周年を機に、整備されつつあるキャンパスに相応しい植栽をと「1・2期生の記念植樹」と「卒業生並木」を提案することにしたのである。4年前、防衛大学校創立50周年記念事業として図書館や多目的講堂を整備し、一段落したところにこの話で

ある。防衛大学の青写真は委員会を設けて審議を重ねて出来上がっているものである。ましてやその表玄関に関わることは学校側としては軽々に応じるわけにはいかないのは当然である。その後、紆余曲折はあったが話し合いを重ね、北野君の元副校長の人脈も生かしながら関係者の協力も頂き今日を迎えたのである。今回の槇の樹は樹齢50年は優に超える立派な成木である。

平成20年11月5日、2期生会総会の席上、担当の水野君は、平静に（おそろおそろとも見えたが）出席者に説明をしたところ、全会一致の賛同を得ることができた。これは2期生会総会を母校防大で実施したと無関係ではない。この日集まった人たちは小原台が立派に変容していることに一様に感激し、記念植樹事業推進の力になりたいと思ったのである。

役員会の会期が3月に終わるとい状況の中、実行までこぎ着けておかなければと最後の詰めに入ったのである。最終的には4月にずれ込んだけれども、素晴らしい結末に役員等関係者一同胸を撫で下ろしたものである。

ところで、日比谷公園に「首かけイチョウ」があるのをご存じだろうか。この大イチョウは日比谷公園ができるまでは日比谷見附（現在の日比谷交差点脇）にあったものです。明治32年頃、道路拡張のため、この大イチョウが伐採されようとしているのを見て驚いた日比谷公園生みの親本多静六博士が、東京市参事会の星亨議長に面会を求め、博士の進言により移植されたものです。移植不可能とされていたものを、博士が「首にかけても移植させる」と言って実行された樹なので、この呼び名が付けられているのだそうです。

物事にはタイミングというものがある。その当事者は、信念と気概を持って事に当たらなければいかなる良案も実現しないという事例ではないかと思う。その首かけイチョウは今でも日比谷公園内松本楼脇にある。都立日比谷公園は幕末までは松平肥前守等の屋敷地で、明治初期には陸軍練兵場となっていたところ。明治36年（1903年）に開園した日比谷公園は、文化の先駆者としての公園設計者本多静六博士の意気込みが随所に感じられる。

さて、話は飛んで、平成20年10月28日発行の槇記念室図録「建学の精神自主自立～初代校長槇智雄の時代～」の中に「久里浜から小原台へ」という項目がある。ここには本校が小原台に建設されることが決まった経緯が次のように書かれている。

『昭和28年（1953年）4月に入校した1期生は、横須賀市久里浜の陸上自衛隊駐屯地内の旧海軍通信学校と、隣接の旧海軍工作学校を臨時校舎として使用しました。他方で正式なキャンパスの選定が進められ、相模湾に面する横須賀市武山のキャンプ・マックギルに決定しましたが、米軍との話し合いが難航し、代替案として小原台が浮上しました。しかし小原台も、横須賀市旧軍港転換委員会のもとでゴルフ場を中心とする一大高級リゾート建設計画が進行中で、一方、入り組んだ私有地では大津・浦賀等農業協同組合等による農地化も進んでいました。このため市側は旧海軍航空技術廠のある追浜地区への移

転を本校に勧めましたが、槇が自ら転換委員会に出席し、あくまで小原台を希望し、本校の設立趣旨、教育内容、特色と意義などを力説して、出席した委員たちの賛同を得ることに成功しました。』

ここには「首かけイチョウ」に見る本多静六氏に優るとも劣らない気概が感じられる。浦賀水道を眼下に見下ろし、西に富士を仰ぐことのできる小原台は横須賀市の一等地である。この時、槇氏は世界を視野に入れた軍学校をつくるという構想を持って臨んだに違いない。その槇氏の信念と気概が委員の心を動かしたと思うのである。

昭和59年（1984年）入校30周年を迎えたわれわれ2期生は、吉田茂氏の「治に居て乱を忘れず」を刻んだ記念碑を旧本館前に置かせてもらった。これは本校生みの親吉田茂氏の遺徳をしのぶためのものだ。今、吉田氏の石と槇氏の樹が同じ場所に鎮座していることは大変意義深い。

五百簗頭眞校長は、「世情必ずしも順風でなかったにも拘わらず、卒業生が立派に育っているのはなぜか」に着目し、着任するや槇校長の残されたものを勉強し、防大生教育の原点を槇氏におくこととした。槇記念室開設はその証の一つでもある。

記念植樹をしてこの風景を眺めながら、草創期の時代に思いを馳せてひととき感慨に耽った。

槇氏の薫陶を受けたわれわれは槇氏を忘れることはないが、槇氏を知らない若い期の人たちにも語り継いでいって欲しいから本館前に槇の樹が2本あるのである。

## 3期生卒業50周年記念行事

3期生会会長 浮田 尚家（海）

昭和34年3月に小原台を築立った我々第3期生は、平成21年3月に、卒業50周年を迎えた。防衛大学校と改称し、それまで仮住まいだった久里浜から小原台に学校が移転し、建物も最低限必要なものだけながら、白亜の教室と学生舎は、戦後間もない当時としては贅沢なたたずまいと感じたものだった。国防の理想を抱いて入校したが、まず身近な足元を固めることから毎日を過ごしたが、卒業の時点では5大隊まで整備され、一応の体制が整えられた。その時から半世紀余が経過したのである。

我々第3期生は、2年生の時から陸、海、空の要員区分がなされ、それぞれ期生会を運営しており、合同で卒業50周年記念行事を行うに当たり、約1年前から準備に取り掛かり、小原台で行う案、都心で行う案、記念誌を発行する案など、前任者からの引き継ぎを含め検討した結果、我々3期生のための「卒業50周年記念行事」を掲げ、交通の便、参加者の健康状況、50年前にタイムスリップ出来る方法、などを考慮した結果、会場「グラウンドヒル市ヶ谷」の予約を5月11日に確保し、「卒業記念懇親会」を開催する運びとなった。計画に携わったのは、陸；白水会長、野本事務局長、空；河村会長、杉原副会長、

海；加藤事務局長と浮田の6名であった。

当日は、第3期生卒業464名のうち、逝去会員68名という現状で、出席会員191名、夫人25名、加えて、我々第3期生が在校当時ご指導いただいた指導教官は、ご高齢ですが、ご出席いただける教官8名を得て、約230名という盛会でした。会を始めるにあたって、テーブルを4グループとし、入校時の所属大隊としたが、これが意外と盛況で、顔を合わせた途端に50年前に戻り、入校後大隊、専攻過程、要員別など、ついで話をする機会もなかった者同士も、すぐさま打ち解け、思い出話とともに、時の過ぎるのも忘れるほどであった。締めには、全員輪になって肩を組み合い、「海青し、太平の灘」の学生歌を声高らかに歌い、大変に盛り上がった。



懇親会（指導教官）



懇親会

既に、お互い年金生活者であり、経費節減をモットーに、記念写真、アルバム作製などは省略し、代わりに、陸；古越、島田両君、海；酒井君、空；松岡君が中心となって、それぞれ撮影したものをまとめてHPで紹介してくれていますので、同窓生の皆さんものぞいてみてください、参加の皆さん、何れもいい顔をしていました。

卒業50周年記念行事の「いま一つの行事」として、防大学生課の牧野2佐（当時、現在1佐）の協力を得て、「記念植樹」を行うこととした。学校側の意向が明確となり、「卒業後各期1本の記念植樹」が承認され、1期、2期は、本館玄関前に、榎の木を植樹していたので、3期生以降は、1大隊学生舎から、新体育館に向かう道路の東側に、6月30日近隣の同期生12名の参加を得て、記念植樹を行った。植樹の実施に先立って、陸、海、空の会

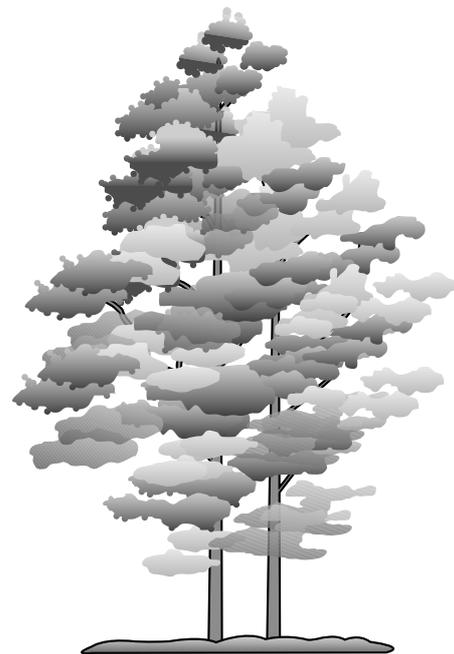
長3名が、6月16日午後、五百旗頭校長に挨拶に出向きました。その折、植樹については当然のことですが、以後の管理の問題もあり関係各部へのお願いも合わせて行った。



記念植樹

記念植樹当日、午前中は生憎の雨模様だったが、午後には雨も上がり、植樹を行った後、牧野2佐（当時、現在1佐）の協力で、新学生舎の見学、時計台からの眺望、資料館、及び図書館見学など、最近の防大の様子を眺める良い機会であった。

今後、卒業50周年、卒業20周年Home-Visitを迎える後輩諸氏への参考にしてもらえればと、紹介します。



# 今人生、男盛り

## 再定年を迎えて思うこと

小柳 毫向 (11期・陸)

この9月末をもって自衛隊退官後お世話になっていた会社を退職し年金生活に入った。若干の寂しさは禁じ得ないでもないが、それよりもホッとした気持ちの方が強い。いよいよ老後というべきか余生というべきか、そういう域の年代を生きていくことになるが、どの様に生きるかは一つの大きな課題ではあるが、そう急ぐ必要もないのでボチボチ考えようと思っている。これまでの66年の人生を振り返ってみると我ながら結構いい人生が送れたと思う。自分の人生を芝居に例えるなら、主役はいうまでもなく自分自身であり、親、兄弟、妻、友人、先輩、後輩、部下等々全ての人は脇役を演じてくれている。いい芝居にするためには主役がそれなりに好演しなければならぬが、それにも増していい脇役をいかに得るかが決めてになる。私のこれまでの人生が結構良かったのは多くのいい脇役に恵まれたからだと思う。脇役を演じて頂いた全ての人に感謝である。中でも助演男優賞をあげるとするならば誰であろうか、本当にたくさんの人にお世話になり迷うところであるがやはり親父であろうか。親父は小学生の時父親を亡くし、苦学しながら東工大の前進になる学校を卒業、その後満州に渡り一旗揚げたが現地召集を受け、終戦後シベリアに約3年抑留、帰国後もいろいろ苦労しながら仕事の虫といわれるほど働き人並みな生活ができるようになったのは私が防大を卒業した頃であろうか。しかし苦労をしたという顔は私たち子供には一切見せたことがなく、また貧しい中でも人の面倒をよく見た人でもあり人間としての奥行きを感じさせてくれた人でもあった。親父の生き方、その後ろ姿は私の人生の指標になったのは間違いない。すでに36年前58歳の若さで亡くなった。私は親父の年を越えたが未だに親父に勝ち得ないでいる。では助演女優賞は誰か、これは何ら迷うことなくわが女房殿である。自分の女房を褒めるのはいかがなものかと思うので細部は省略するが、私が今日あるは女房の内助の巧によるところ大であり感謝、感謝。

さて立場を変えてみるならば、私は妻を含めた多くの人の人生の脇役を演じなければならないが、名脇役といわれる程の演技はしていなかった。申し訳ない次第である。

これからの人生は、芝居でいうならば終幕にあたる、

終幕はあまり長くなると締りがなくなるがこればかりは自分で決めることができないため寿命に任せるほかない、しかし中身はそれなりのものにしないと全般の芝居が間の抜けたものになってしまう。また人生の終幕は脇役を演じてくれる人が極端に少なくなる。狭くなった世間の中で自分自身も何とかいい脇役を演じたいと思っている。これからどう生きていくのか未だ決めかねているが、しかし目標はある。

助演男優を演じてくれた親父の域に少しでも近づくと、助演女優を演じてくれたわが女房に、私の人生も結構良かったよと言わしめることである。

## 米国珍道中記

間中 文夫 (12期・陸13班 応用物理専攻)

米国珍道中記を述べる前にまずは自己紹介。

私は、酒乱の父を押さえ込むために千葉県野田市の警察署長の子供が友人であったため小学6年の時、警察の道場で柔道を始めた。中学2年生の時、野田市主催の近隣の中学校の柔道大会があり優勝し、それがきっかけとなり、14歳で古武道の道に入った。

我が師匠は、戸隠流忍法34代宗家の初見良昭先生である。この宗家が忍術を教えてやるからと言うので通い始めたが、一向にそれらしい稽古が無く、体術、棒術、剣術、手裏剣等の稽古ばかりで、漫画のような麻の木を飛び越したり水の上を歩く等の稽古は全くなかった。

ある日、師匠に「猿飛佐助のように消えるのはどうすればよいのですか？」と質問をしたら、「相手の目を瞑らせれば良いのだよ」との返事で、大変がっかりした思いがある。以来50年古武道の深さに嵌り込み、現在も修行している。



剣構



忍術稽古風景

当然の事ながら自衛隊時代は転属の連続で、師匠との稽古は、年に数回の帰省時に集中した。そして、私がお仕えた上司、同僚、後輩の理解と援助のお陰でその時間を与えて頂き、古武道の基本は充分身体に染みこませることが出来た。

満50歳の時、師匠から独立し、自然流（じねんりゅう）を編み出し自然館を創立した。

陸上自衛隊を2000年12月に定年退官し、以前から退職後は日本の歴史伝統を教えることを生涯の目標に立てていたため、迷わず表題の「米国珍道中」に飛び出した。幸いなことに、同じ12期の加藤弘明君（陸1班、電気工学専攻）が同じ道を歩んでくれるというので鬼に金棒と、翌2001年の4月に太平洋を渡った。目標達成期間は、丸3年と決めた。

任務分担、私は、古武道を教えること。加藤君は、計画立案から成果確認まで。つまり私は、彼の掌の上で動き回れば良く、本当に有り難い事だった。防大同期は良いものですね。語学能力は、Come hereをコメヘレと読む程度。しかし、二人とも自分の意思を相手に理解させる自信あり。相手の話していることはアバウト？

行き先は、メリーランド州ボルティモア市である。何故此処を選んだかということ、ワシントンDC迄車で1時間程度、ニューヨーク市迄同じく3時間程度で地の利もあり、また、250年以上の歴史のある町で、伝統に関心が高く我々の教えることにも理解を示してくれると考えたからである。蛇足ながら、米国海軍士官学校（アナポリス）はボルティモア市の隣町である。

2001年4月9日1605、二人は、防大同期の高野夫妻の見送りを受け、就業ビザと片道切符を手に、成田空港を夢と希望に胸を膨らませ飛び立った。アトランタ空港で乗り換え、ボルティモア空港に到着。30名の弟子達の歓迎を受けた。周りの人々は我々を何処の何者と思ったのか視線に晒され、少々恥ずかしかった。その足で当面の家となるアパートに向かい、その夜は遅くまで今後の説明を受けた。

翌日、諸々の生活用品などを購入し準備を整え、先ず、最初にやったことは、インターネットの接続である。丸一日かかり完成。

次に、車の購入。月賦で購入しようとしたが、我々は、米国で仕事をしていないため所得証明などが無く、月賦契約が出来ない。仕方なく弟子の名義で月賦を組み、車を手に入れた。これでゴルフにも行けるようになった。

次に、家の購入。米国到着約1ヶ月後、男の不動産屋と接触した。この不動産屋がいいかげんで家探し不調。別な女性の不動産屋と接触。この不動産屋は積極的であったが、彼女の縄張りに適切な物件が無く、さらに別の女性の不動産屋と交渉。6月初旬にやっと我々の希望の家が見つかり契約。この時も車と同様でローン契約が出来なかったが、銀行が家の価格の三分の一を貯金すれば

ローンを組めると言ったので、日本から資金を取り寄せた。アメリカでは、有能な不動産業者は女性に多いことを痛感した。勿論、この間も稽古は色々な場所を借りて実施していたが、引っ越しも無事に済み、物置を改造して20畳程の道場を日曜大工で作し、裏庭には自然の中での稽古場も作り充実させ、週3日程稽古日を定めて本格的に稽古を始めた。また、米国内とヨーロッパには、年間に数回出張稽古を実施した。劇的な事件にも遭遇した。2001年9月10日夜、我々は、スイスからJFK空港に帰着し、加藤君と「あれが貿易センタービルだ」などと話しながら夜中にボルティモアの家に帰宅し、翌朝、CNNのニュースで第一機目が突っ込んだのを偶然見た。最初信じられずにいたが2機目が突っ込みNHKのニュースで再確認し、初めて本物の事件と理解した。この辺りが語学に不安のある証である。

さて、米国で仕事をすると、当然、収入に応じ納税の義務も発生し、必然的に税理士との契約も行った。アメリカの税理士は、顧客に有利な情報もくれないし、その作業もしない。こちらの申告通りに税務署に申告するだけであった…。

まだまだ珍道中記の入り口ですが、紙面に限りがあり、経験したことの割も述べられず残念。しかし、私が学んだ古流の一派、高木楊心流の教えにある「掌の中の蜂を強く掴むな。そっとしておけば蜂は決して刺さない。」を米国では実践した。2004年6月、所期の目的を達成し帰国。故郷の千葉県野田市に道場を建築し、稽古に励んでいる今日この頃である。また、現在は、麗澤大学の生涯学習の3年生として古文書の勉強にも勤しんでいる。最後に、私は今後も『夢と希望と少しの勇気を持ってドアーを叩き続ける。』であろう。

## 「今人生、男盛り」

川村 成之（13期・海）



平成15年4月、私は「日本原燃株式会社再処理事業部」で新たな勤務を開始し、今は核物質管理部に所属しています。私の任務は、日本各地の原発で使用済みとなった核物質燃料の再処理を行なう工場において“核物質の盗取やプラントの破壊等を企図するテロ”の抑止に任ずる治安機関等に迅速・的確に連絡通報し、抑止と防護に資するよう工場内の即応体勢の確立・維持を担務することです。

「日本原燃株式会社」は、18年3月末に開始したアク

タイプ試験の最終工程「高レベル廃棄物の処理」の問題で竣工時期が1年2ヶ月延期されましたが、数年後には年間最大800トンのウラン再生処理ができるようになります。そこで、日本は、核物質の保障措置を確実に実行するとともに、その不法な移転を許さぬテロ対処能力を保持しているとの強い決意を世界に表明しています。

第一の核物質の保障措置は、2009年7月に天野之弥氏が次期IAEA事務局長に選出されたように世界随一のレベルにあります。そして、日本原燃(株)核物質管理部で勤務する人の中にIAEAを経験された社員がいますし、更に、業務遂行のため日常的にIAEAと国際電話で調整する光景を目にすることがありました。また、社内には保障措置分野において世界的な権威の方もいます。

第二に、テロ対処において諸外国では軍が常駐し高圧電流の流れる有刺鉄線や銃器を使用して侵入者を阻止するのが主流ですが、我が国の場合、武器の使用は自衛隊や治安機関に限られ、民間会社としてはテロリストの侵入をいち早く検知するため、各種の高性能警備システムを重層的に配備して、その能力を最大発揮し、発見した後は、治安機関にお任せする方法を採っています。

しかし、テロの脅威は千変万化、時間と空間を選ばず突然顕在化します。日本原燃(株)の警備システムが性能どおり威力を発揮し、情報伝達が如何に整齊と実施されるか、その成否は警備現場を支える人達の双肩に懸かっています。所謂、小さな誤った情報が錯綜する中で、取返しのつかない“錯誤の迷路”へと導かれる愚を避けるためには、訓練を積み重ねる以外に有効な方策はありません。

そもそも、日本原燃(株)再処理工場は、日本各地の「原発」と同等以上の最高レベルの核物質防護区分が付与されています。更に、「原発」が一つの集約された建屋内でプラントを操業していることに比較すれば、再処理工場では“剪断・溶解・分離・精製・脱硝”の工程に対応した各種建屋と広大な敷地の再処理事業部をテロリストや不法な侵入者から防護する必要があります。



再処理工場全景

一方、テロの脅威として、①北朝鮮がかつて実行を試みたように工作船などを利用して特殊部隊を潜入させ妨

害破壊行為を敢行することが、また、②米軍関係施設を標的としているイスラム過激派(アルカーイダ)が我が国重要施設に指向することが、更に、③日本赤軍が海外テロリストと連携して獄中メンバーの奪還等を目的としたテロ事件を引き起こすことが、懸念されています。

そして、自衛隊と存在目的の異なる一般の会社に「緊急時対応のための訓練をどのように定着させるか？」これが長年に亘る私の問題でした。“桃・栗三年、柿八年”と言われるそうですが、それだけの日月が必要でした。当初は「テロ対処は治安機関」と他人事のようにでしたが、「初動の自助努力の大切さ」が認識されるようになり、今では警備組織を挙げ真剣に訓練に取り組むようになりました。

此处まで到達できたのも、国際社会と協調して「テロとの闘い」を忠実に実行した国家の力があつたことは勿論、長年に亘って警備システムの設計及びその構築並びに警備運用に係わった日本原燃(株)関係者の築き上げた企業文化の集大成と言っても過言ではありません。また、反対意見の逆風の中で多くの方々から温かい御理解と御支援を賜ったことに深く感謝しています。

終わりに、私は防衛大学校に入校した18歳の時から過ぎ去りし45年間の歳月を振り返ったとき、陸・海・空を問わず、沢山の先輩・同僚・後輩に支えられて、今日に到ったことに本当に感謝しています。そして、変わらぬ愛情をもって私の人生を支えてくれた両親を始めとする家族の存在に、就中、今もって私に寄り添う妻の笑顔に、心から“有難う！”のエールを送りたいと思います。

## 「今、人生男盛り」

三好 光男 (15期・空)



私は、今年還暦を迎えました。

人生を1年に譬えると、生まれたときが正月で、やがて春の時期に成長し、30代、40代は働き盛りの夏、それが終ると秋がやって来て、やがて冬に到って人生も終りを迎えます。

その中で最も楽しく良い時期が二度あります。春と秋、すなわち青春時代と熟年を迎えた今の時期です。青春時代には若さと希望はありますがお金がありません。今の時期、子供も手を離れ、女房は無いと言いますが退職金もあり、再就職もさせてもらって、それなりに生活にはゆとりがあります。元気も少しですがまだ残っています。ある意味、人生で一番良い季節、この時期に人生を楽しむことが大事だと思います。

人生を楽しむには、いくつかの要件があると思います。

第1は、健康です。保険屋さんの統計によりますと、一般の人が60歳定年で5年以内が危ないと言われているのに比して、若年定年の自衛官は3年以内に大病を患ったり、不幸にして亡くなったりする人が多いと言います。その3年を無事に乗り越えると天寿を全うする確率が多いと言います。おそらく環境の変化によるストレスが原因ではないかと思えます。

ストレスには2種類あると思います。ノルマを与えられてプレッシャーの続くストレスと、生き甲斐、存在感を失うストレスです。私は、前者を正のストレス、後者を負のストレスと言っています。負のストレスも、正のストレスに劣らない大きなストレスだと思っています。

第2は、趣味や人生の楽しみを持つことだと思います。趣味は、人生を豊かにしてくれると共に心を癒してくれます。人生を80年としますと、仕事と家庭だけだと2つだけの人生になってしまいますが、趣味がありますと3つ、4つの人生を歩むことができます。

私の場合、健康管理を兼ねてテニスをしておりますし、下手ながら花の写真を撮ったり、エッセイや小説もどきを書いて、ブログに載せています。ブログのテーマは「男と女」で、たくさんの同好者のコメントが寄せられ、いろいろな人達と知り合いになれます。休日などカメラを持って歩きますし、雨の日はパソコンに向かってブログの書き込みなどを行っていますので、まず退屈することはありません。

趣味も、できればゴルフやテニスなど仲間と楽しめる趣味と、盆栽、絵画、俳句など一人で楽しめる趣味があると良いでしょう。

第3は、友達を大事にすることだと思います。

長い自衛官生活で、たくさんの知己を得ることができます。中には、これらの関係を絶ってしまう人もいますが、寂しいことだと思います。第2の仕事をしているうちはまだ良いのですが、それが終わると急に友達が減ります。同窓会で知り合ったある陸上の先輩は、今でもあちこちで活躍し、たくさんの知己を大事にして幅広い付き合いをしています。実に羨ましいことだと思っています。

第4は、夫婦仲良くすることです。多くの人達は、子供も巣立って夫婦二人の生活に入ります。夫婦仲良くして、楽しい家庭生活を送りたいものですが、しょっちゅう夫婦喧嘩をしている私には詳しく語る資格がありませんので、この件についてはこのくらいにしておきますが、定年後、毎年夫婦で海外旅行だけはして来ました。

第5は、ボランティアでも何でも小さなことでも良いですから、人のためになることをすることだと思います。

自衛官は真面目です。何か人のためにしていないと、心の空虚さを感じてしまい、これがストレスになりかねません。幸い、時間とお金にはかなりのゆとりがある時

期です。町内会の役員でも、同期生会の役員でも何でも良いですから、元気な限り人のために働いていたいものです。

私の場合、再就職はしましたが顧問という立場であり、普段はかなり暇です。

自衛隊を定年後すぐに同窓会の事務局で経理を担当させて貰いましたが、このことがいろいろな勉強にもなりましたし、陸、海のたくさんの素晴らしい方々と知り合うことができ、また自分の存在感を確かめることもできました。

いずれにしても人生の季節は秋、元気でいられる日々はそんなに長くはありません。冬になる前に、人生を十分に楽しんでおくことが大事だと思います。

細川総理のとき、地元熊本の人達が球磨川で獲れた鮎を生きたまま東京に運んで食べて貰おうとしましたが、水槽の鮎は流水でないために死んでしまいます。そこで知恵を絞って、鮎を竹串で突き続けました。すると鮎はおちおち死んでもいられないということで無事に東京まで生きたまま運ぶことができたと言います。程々の刺激は生きて行く上で必要なのです。

皆さんが、より良い人生を送られることを心から祈念しております。

ブログの入り方

Yahooの検索で、「三好光男」→「男と女」で入ることができます。

<http://blogs.yahoo.co.jp/mmm242152000/MYBLOG/yblog.html>



## ホーム カミングデー (HCD) に参加して

第10期生会会長 酒巻 尚生



3月21日(土)夕刻、HCDに先立って実施された「10期生会懇親の夕べ」参加のため、全国津々浦々から同期生及びご夫人約360名が、昔懐かしい横須賀の町に集まってきた。中には防大卒業以来43年ぶりの再会を果たした諸兄も少なからずいたようであるが、互いの外観の変化振りに若干の戸惑いを覚えつつも、往時の面影を瞬時に見出して互いに肩をたたき、握手を交わしながら再会を喜び合う姿が処々に見受けられた。やがて来賓の**五百旗頭学校長、君塚幹事、岡崎副校長**も到着され、26名の物故者に対する黙禱で始まった懇親会場の雰囲気は、さながら全員が43年前の紅顔の防大生時代にタイムスリップしたかのような盛り上がりを見せかけていた。予定した二時間は瞬間に経過し、懐かしい「逍遙歌」を全員で合唱した際には、自然発生的に肩を組み体を左右に大きく揺らしながら蛮声を張り上げて歌う光景をみせる等、会場全体が完全に一体化した感じであった。齢65歳の集団の誰しもがここ数年来味わったことがないような高揚感と充実感・満足感を感じていたのではなかろうか。まさに「熟年(老人)パワー」が遺憾なく発揮されたひと時であったものと思う。

翌3月22日、本科第53期生・研究科学生などの卒業式に参列する機会を与えられた我々は早朝から小原台に集結した。あいにくの曇天模様であったが、全員が前夜の余韻を色濃く残しつつも奥様と子ども元気一杯参集した。予定した集合時間よりも大幅に早くから集まり始めたため、受け入れ準備が完了していなかった実行委員会の面々が慌てふためいて逐次に戦闘加入せざるを得ないといったハプニングもあった。前日に続き予定時間を大幅に早まって行動するのは、老人集団の特性なのか、それとも、小学生が遠足当日に興奮のあまり早く起床してしまうといった類の本行事への期待感なのか？

卒業式場には当初の入場割り当てが150名であったため、残念ながら全員が入ることができず、折角の機会でもあることから同行されてきた奥様方全員に入場してもらい、厳粛な卒業式の雰囲気と卒業生の凛とした行動振りなどから「わが亭主の43年前の姿を連想し惚れ直してもらおう」こととした。式辞において「本日は卒業生諸官の前途を祝うため、卒業43年目の10期生の皆さんが小原台に集まり、本式典に参加してくれている」との望外の言葉を学校長からいただき、我々のみならず奥様方も大いに感激を覚えたものであった。

折からの強風のため在校生によるパレードが中止になってしまったことは極めて残念であったが、各班代表による顕彰碑への献花を行って殉職者及び志半ばにして病に倒れた同期生諸兄の御霊に対して慰霊の誠を捧げ、また、班ごとの記念写真の撮影を終了した後、在校生の協

力を得て実施した学生舎など校内の施設見学を通して、吾らが母校の変化振りを目の当たりにしながら回顧談に花が咲いていた。参加者全員が心の故郷「小原台」を十二分に堪能し、同期生の強い絆を再確認した後、相互に健康を祈念し合い、また、将来の再会を約しつつ大なる充実感と満足感を感じつつ帰路についたのであった。終わってみれば短い二日間ではあったが、参加者全員にとってはまさに至福のひと時であったのではなかろうか。

我々は、本行事の成功に向けて足かけ二年にわたって諸準備を推進してきた。陸海空から所要の要員が快く集まってくれ、「スマート&シンプル」をモットーとして意見を交換しながら逐次構想を固めていった。「全国に所在する同期生諸兄に対して、いかにHCDの趣旨を理解してもらい、また、一人でも多く参加してもらおうか」、「初老の集団に対して、いかに実行委員会としての決定事項等の周知徹底を図るか」、「懇親会をいつ、いかなる要領で実施するか」、「当日の400名近い大集団をいかに手際よく受け入れるか」などなど解決すべき問題点は山積されていた。問題点を一つ一つ克服しながら準備を積み重ねていくに従って我々実行委員会メンバーの最大の関心事は、「全国津々浦々から参集してくれる同期生、ご婦人に対し、いかにしたら充実感、満足感を味わってもらえるであろうか」ということに逐次変化していった。度重なる会合において議論を重ね、やがて本番を迎える頃には、実行委員の全員がそれぞれの役割において自信を持って任務遂行可能な体制・態勢までになったのである。まさに、陸海空三自衛隊による統合運用であり、改めて「同期生の強い絆」の存在を再確認させられた本行事であったものと確信する。

全国から馳せ参じてくれた多くの同期生諸兄よ、有難う。長期間にわたる諸準備を一生懸命遂行してくれた実行委員会メンバーよ、有難う。そして、かかる機会を我々に与えてくれた**五百旗頭学校長**をはじめとする防衛大学の関係職員の皆様、防大同窓会事務局の皆様のご高配に対し、紙面をお借りして深甚の謝意を表させていただきます。



## 33期生のホーム・ビジット・デー

中塚 千陽 (33期生会会長)

平成元年に防大を卒業した我々33期生にもとうとうHVDという時期を迎えることになりました。日頃「若いつもり」ではいても、「同期が大指（大隊主席指導官）をしている」と聞くと、自分の歳とともに、「20年経ってしまったんだな」との実感をせずにはられません。11月8日当日は、154名（本人及び配偶者）と多数の参加を戴きました。本来なら、期生会長の私がきちんと報告すべきところですが、仕事の都合で欠席せざるを得ず、当日参加した同期からコメントを集めましたので、順不同で報告に変えさせていただきます。

無責任な期生会長に代わり、何度も防大に足を運び、本行事を切り盛りしてくれた準備委員各位にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

「卒業以来、初めて会う者も多数いて、大変懐かしい一時でした。」（空・樋山）

「棒倒し会場で橙色の旗を目にした途端、妻子の前で一人の若人に戻っていました。」（4大隊・空・安藤）

「小原台は今の自分の原点のひとつであることを再認識。」（2大隊・空・増田）

「人間10年や20年で進歩するものじゃないな…」（1大隊・空・今城）

「白髪こそ増えたけれど、同期はやはりそのまま。ただ初々しい学生を見て20年を実感。」（3大隊・空・菅原）

「小原台の環境も同期の風貌も、20年経つとぱっと見変わっていて驚きましたが、それもほんの少しだけで、あっという間に馴染んでしまうから小原台と同期生がもつ雰囲気は不思議です。」（海・檜垣）

「20年ぶりに会った同期に昔の面影を見つけ、語らい、肩を組んで逍遙歌を歌ったら、すっかり20ン歳に戻っていました。この楽しく元気が出る貴重な機会を与えてくださった防大、同窓会、そして実行委員の皆様には感謝申し上げます。」（4大隊・空・森田）

「卒業以来20年ぶりに防大に行き、校内が見違えるほど綺麗で立派になったことにまず驚きました。それより何より同期の懐かしい顔に久しぶりに会え、とても感動しました。学生時代からすっかり体型などが変わった人、あまり変わっていない人など様々でしたが、学生時代の面影が残っていて昔にタイムスリップしたような錯覚を覚えました。これからも同期や家族の皆さんが元気でまた会えることを楽しみにしております。ありがとうございました。」（室井）

「当日中に神戸に戻らなければならず、懇親会途中で中座しました。逍遙歌を歌えなくて残念でしたが20年ぶりの顔も多く拝見し大変嬉しかったです。小原台には自分の「血と汗とあの時の想い」が染み込んでいる土地と実感いたしました。」（2大隊・陸上・山本）



## 18期生会の現況について

前18期生会会長 大西 正俊 (18期・陸)



平成21年3月、補給統制本部長の職を最後に陸上自衛隊を退官しました18期の大西正俊です。ここ数年の間に、陸海空各自衛隊の同期生も極少数の現役を残してその大半が退職の時期を迎え、それぞれ新たな分野での活躍とOBとして自衛隊・防大の活動を側面から支えていくことが期待される状況となりました。

このような状況を踏まえ、この度、機関紙「小原台だより」への投稿の機会を得ましたので、同窓生の皆様へ18期生会を紹介するとともに、18期生会会員諸兄への現況の報告を兼ねて拙文を記すことにしました。

### 【同期生会役員について】

18期生会は会長職を3年任期で陸、海、空各軍種の期生会長による持ち回りとし、私は平成18年4月から平成21年3月まで勤めさせていただきました。陸・海・空の会長及び副会長(同窓会代議員を兼ねる)職はそれぞれ軍種毎任期を定め、海空は固定配置(永久職)となっています。期生会長就任時の同窓会の業務幹事については、その時々

の会長が属する軍種から要員を出すこととしています。平成21年4月から18期生会会長は、海の杉本正彦君に交代したところで

### 【期生会の歩み】

昭和49年3月の防大卒業に際し、18期生会を発足させて今日に至っています。

この間、卒業20周年と30周年を祝い記念行事を開催しました。20周年記念行事は、平成6年品川プリンスホテルにて高坂正堯先生(故人)に講演をしていただき、引き続き懇親会を開催しました。記念品として「廉恥・真勇・礼節」を印字したペンケースを作成・配布しました。

30周年記念行事は、平成16年4月アルカディア市ヶ谷で懇親会を開催しましたが、その際、何か記念になるものをとということで、陸の中村憲一君、木下典夫君の多大なるご尽力により記念CDを作成しました。CDには、防大時代の若々しい顔写真と30年後の年季の入った顔を対比して入力しましたので、その劇的な変化(ビフォー・アフター)に、わが目を疑った同期生も多かったと思います。また、自衛隊退官後の18期生会の在るべき姿を考え、会則の改正を行いました。会則には「終生、同期という繋がりを深めるため、今後10年毎の節目に行事を行うこと及び軍種毎の名簿を整理して、連携を強めていくこと」が謳われています。次回、卒業40周年記念行事は5年後の平成26年に実施予定と成っています。その時の18期生会長は、空の外園君で、陸、海、空それぞれの副会長及び理事が主体となって、計画・立案し実行する予定です。

さらには、平成29年とかなり将来のことになりますが、防大61期生の卒業式にはホーム・カミング・デーの行事も予定されていますので、18期生諸兄には、健康に留意

され一人でも多くの同期が小原台に集えることを期待しております。

### 【陸・海・空別の現状・活動状況】

陸上18期生会は、卒業時222名でしたが、既に8名の同期が逝去しています。主な活動として、東京地区では2ヶ月に1回、一般・部内幹候も含めて市ヶ谷会館の「安具楽」で懇親会を行っており、各方面区でも同様の集いが持たれています。その他、2ヶ月に1回のゴルフコンペを開催しています。海上18期生会は、卒業時95名でしたが7名が逝去しています。一般幹部25期と合同で「尚武会」を結成し、東京地区で月1回の懇親会と2ヶ月に1回のゴルフコンペを実施しています。航空18期生会は、卒業時109名でしたが、5名が逝去しています。平成6年4月に一般幹部62期と合同で「梨会(ありのみかい)」を結成し、毎月、外園空幕長を囲んで市ヶ谷での昼食会、毎年6月と12月に夫婦同伴の懇親会、2ヶ月に1回のゴルフコンペを実施しています。また、梨会のホームページも開設しています。

### 【結び】

現時点で、同期から陸上幕僚長及び航空幕僚長を輩出し、両君にはそれぞれ厳しい環境の中で激務に耐え、わが国の防衛のために尽くしてもらっていますが、その活躍を同期生として力強く応援したいと思います。

また、平成20年度から18期生が防大同窓会事務局の要員として参加することとなり、陸・海・空の同期生10名が本来の仕事の傍ら、ボランティアとして活躍いただいています。10名の同期生には心から御礼申し上げます。

最後に、あの4年間の小原台での生活が、それぞれの人生にとってかけがえのないものであったことを確信し、今後の人生においてもお互いの絆を更に深めて行きたいと考えています。

軍種が異なり、不明なことがあれば、次の方々に連絡してください。

18期生会の益々の隆盛を祈念いたします。

陸：岩切 厚 富士通株式会社 特機システム事業本部  
〒102-0074

東京都千代田区九段南4-7-2 市ヶ谷パロスビル

海：持永 昇三 日本アビオニクス株式会社  
〒141-0031

東京都品川区西五反田8丁目1番5号

空：笠原 久(株)IHIエアロスペース 営業部  
〒135-0061

東京都江東区豊洲3丁目1番1号 豊洲ビル

### 18期生会役員

会長 (H21~H24)	副会長(同窓会の代議員兼務)		
	陸	海	空
杉本正彦	岩切 厚	長谷川 洋	長尾 斉
	理事(同窓会の業務幹事兼務)		
	陸	海	空
	岩切 厚	持永 昇三	是永 俊憲

H24.4~H27.3の会長は、空の外園健一朗君を予定する。

# 防大53期生に聞く

## 幹部候補生学校に入校して思うこと



第1候補生隊 第1区隊  
陸曹長 田川 弘貴

3月の終わりに陸幹候校に着校して以来、忙しい日々が目まぐるしく過ぎ、卒業まで数えられるくらいに月日が流れた。4学年の時から陸幹候校に入校したら忙しくなるだろうとは予想していたが、案の定1学年時のような忙しさが待っており、当初は心と体が受け付けなかったが、そこは一度来た道ですぐに慣れるようになった。現在の陸幹候校はBU課程として防大出身者と一般大出身者との一体化が約9ヶ月間で行なわれている。ここで、私は昨年の小原台だよりの52期生の記事が印象に残っている。それは、陸幹候校に来て防大の頃と同じようなことをやらされ、さらにU（一般大出身者）の成長率の高さに、防大の存在意義とは何なのだろうか、という内容のものであったのを記憶している。これについて私の思うところを少し記述してみたい。

B（防大出身者）とU、また部内選抜のIの課程が陸幹候校の大部分を占める。それぞれの存在意義は、それぞれの求められるもの、役割の違いだろう。もちろんIは部隊経験に裏打ちされた指揮、運用を求められているのだろう。陸幹候校に来て意外だったのは、Uの半分以上が部隊経験のあるU'と区別される者であったことだ。彼らは年数は少ないものの部隊での経験を持っていて、そこでの経験、知識はUにはもちろんBの私達にとっても参考になることが多い。部隊経験のないB、Uの私達は、その点をとって見ればどうしてもIやU'より劣る。また、Uの成長率は確かにすごい。3月の終わりには当たり前だが基本動作一つできなく、体力的にも優れてるとはいえなかった彼らが、今はBやU'と同じように生活している。ではBはどうか。一番に感じるのは、リーダーシップである。確かに知識の面ではU'に劣りはするが、知識の面以外でリーダーシップを発揮しなければならない、たとえば区隊の方針を決めたり細かな統制を出したりという場面では、Bが率先して前に立っている場面が多い。UにしてもU'にしても、人の前に立って、あるいは上に立ってリーダーシップを発揮した経験が少なく、その点学生舎や校友会でその機会が多くあるBはリーダーシップを発揮しやすい。また、例えば陸幹候校の伝統競技である高良山登山走を見てみても、上位を占めているのはほとんどがBであった。

視点を変えてみる。3幹校合同訓練が6月、江田島の海幹候校で行なわれた。陸、海、空の幹部候補生が集まって、主に海幹候校研修、意見交換や懇親会が行なわれた。海、空の制服を身に着けた、かつての防大の同期に会うのは約3ヶ月ぶりであったが、その短い期間にもそれぞれ海、空の自衛官として成長している彼らを見ることができた。この3幹候校合同訓練の中で最も感じたことは、防大での同期の絆であった。たとえ勤務するフィールドが変わったとしても、4年間防大で寝食をともにしてきた同期の絆はそう簡単には消えないものだなと感じるとともに、吉田茂首相（当時）の防大設立時の意向にもあった、陸海空の幹部自衛官となるものを同じ場所でも、ともに汗を流しながら生活させることの意義を強く感じた。統合運用がますます多くなってきた現在、また将来に亘ってこのことはとても意義深いことである。

私は防大の存在意義にあまり疑問を感じたことはない。今の私が思う防大の存在意義とは、自衛官としての基礎的体力と基礎的動作を身につけ、リーダーシップを発揮する経験を持った若者を幹部自衛官として送り出し、自衛隊の根幹とすることであろう。だからこそ、陸海空の絆が必要であるのだろう。佐官や将官になることが多いBは、それはおごりではなくて、求められる役割からくるものであると思う。

これを書いている時点では、あと陸幹候校での大きな訓練も野営を一つと100Kmの行進がある総合訓練を残すのみとなった。防大の訓練よりも厳しい陸幹候校での訓練の中で、自分の弱いところを思い知らされたり、逆に意外に強いところを発見したりもできた。これから数ヵ月後には部隊に赴任する事になり、期待以上に不安も大きい。それでも将来を見据えながら、目の前の訓練に懸命に励んでいきたい。

防大の後輩達へ言えることがあるとすれば、「校友会と学生舎生活を一生懸命やってください」ということだ。体力はあるに越したことはないし、それだけで自信にもつながる。学生舎生活は防大出身者の最大の強みであると思うので、ぜひ学生時代にリーダーシップを発揮する経験を多く持ってもらいたいと思う。

## 幹部候補生学校で学んだこと

～自分の意志を持つ～



第2候補生隊 第5区隊  
陸曹長 今野 奈保子

今から約5ヶ月前、まだ防大生であった頃、様々な噂を聞いていた私は幹部候補生学校に対して、時間がない、忙しい、体力、勉強全ての面において大変であるというイメージを持っていました。そのため、幹候校に入校する前は不安で、どのような生活が待っているのか恐れていました。実際、約5ヶ月間この生活を送って感じたことは、行事と行事との間が短く、次から次へと様々な事をこなしていくので、あっという間に時間が過ぎてしまうことです。例えば、課目試験と同じ週に高良山登山走があり、その次の週には、元寇研修・水泳訓練と、毎週とっていいほど何かしら大きなイベントがあります。そのような状況の下、忙しい日々流され、気づいたら卒業していることもあると思います。次々とやってくる行事をやらされているのか、それとも自発的にやっているのか、その意識の違いで自分の成長が大きく異なっていくことを感じました。そのように感じたのは6月に行われた熊本での大矢野原野営訓練の時でした。

その大矢野原野営訓練では、主に班攻撃、班防御、前衛班の班長動作の修得を目標として行われました。班長は任務達成のために、班員を掌握し、適時適切に状況判断しながら指揮をしなければなりません。つまり、その時の地形、気象、班員および敵の士気などによって、状況が全く変わってしまうので、これら全ての要素を考慮しつつ指揮をしていかなければなりません。しかしながら、この10日間の野営で班長に当たる機会は2、3回くらいしかありません。そのように班長として指揮する機会が数少ない中、どのようにしたら班長として円滑に指揮が行えるようになるのかを考えました。そこで私は、自分が班長ではない場合においても、これから行われる条件の下で、自分ならどのように指揮をしていくのかを毎回考えるようにしました。もし、その時の班長が私の考えていたような指揮とは異なっていたとしても、このような指揮もできるのかと感じ、考えの幅が広がりました。自分が班長を行えない分、他の同期の班長動作を見て、自分なりに考え、その考えを自分のものとして取り込む。こうすることによって、少しずつ、指揮というものを理解できるようになりました。さらに、知識が増えてくると、様々な疑問が浮かんでくるようになり、もっと詳しく知りたいと思うようになってきました。今までよりも、

訓練に対する気持ち・意識が変化し、私は大矢野原野営訓練を自分の意志でやっていたのだと感じました。一列員としてただひたすら訓練をこなしているか、それとも自分の意志をもって考えながら訓練をやっているのか、どちらも同じ時間、訓練を行っていますがその訓練の成果は大きく異なってくると実感しました。

「環境や才能といったものは生まれながらにして不平等であり、1日24時間は、唯一人間に平等に与えられているものである。一方、幹部候補生として入校してきた君たちの能力差はほとんど無い。有るとすれば意志の差である」と区隊長がおっしゃっていました。今その言葉が身にしみてきます。これはもちろん訓練だけではなく、全てのことに当てはまると思います。私たちは、同期と同じ時間、同じ場所で生活しています。同期と与えられた条件が同じ中、どれだけ自分の意志を持って生活するかでそれぞれの成長が大きく異なると感じました。

現在、私と同様に幹部候補生学校入校に対して不安に思っている後輩がいると思います。しかしながら、幹部候補生学校には、辛くなったときに励ましてくれたり、時にはライバルとして高め合う事ができる同期、わからないこと、困ったときに親身になって指導してくださる教官がいます。自分がこうありたいという強い気持ち、自分の意志を持っていれば、自分の能力を最大限に伸ばすことが出来る環境であると思います。

あと卒業まで4ヶ月、まだまだ未熟ではありますが、自分の意志を持ち、少しでも多くの資質を涵養し、私が描いている幹部自衛官の理想像に近づいていきたいと思います。



## 入校して半年



幹部候補生 海曹長  
金澤 佳也

今年3月22日に防衛大学校を卒業し、3月27日にここ江田島の海上自衛隊幹部候補生学校に着校してはや半年が過ぎました。この半年間さまざまな行事があり、楽しいことがある一方きついこともありました。その中で私を感じたことを少し書き綴ってみたいと思います。

まずこれまでの生活を通じ、一番印象的であったことはやはりこの江田島は防衛大学校とは全く違い、海上自衛隊なのだということです。陸上にある施設であっても、海上での生活を模擬して日課や各種規則が定められており、加えて様々な躰も同様に行われます。

防大時代と比べて考えてみると、自由という部分は少ないと感じました。防大では生活や学生隊運営も学生に裁量が与えられ、かなり自由に様々なことを実施することができました。また生活面でも学生相互の教育指導が基本であり、2学年に進級すると主体的に動く場面も出てきました。

しかしこの幹部候補生学校は、初級幹部として必要な資質を身につけるための場所であり、任務遂行を第一とするため、指示されたことや決まったことを与えられた時間内に確実にこなすことに主眼が置かれているように感じました。

防大時代は長い時間考えてベストな答えを出す、ここ候補生学校ではすばやく考え行動しベターを追及するというような、身につけるべきものの考え方が別のものであるといえるでしょう。



分隊点検

代表的な例を考えるとやはり幹事付による各種指導です。朝の総員起こしに始まり、清掃状況、食事のマナー、服装容儀、行進態度、日課の施行状況、五省、消灯状況、外出点検などまだまだ書ききれないほど、生活すべてを

見られており、一瞬たりとも気を抜くことはできません。また幹事付に限らず分隊長や教官など候補生学校のすべての職員が我々を海上自衛官としてこれから勤務できるように全力で指導をしてくれます。

候補生はそれに応えるべく日々の生活を全力で行いますが、やはり至らないところも多く、局地的ないわゆる「江田島台風」が発生したり、肉体をもって反省をするなど、受けた指導が骨の髄まで染み込みます。するといつしか頭で考えずとも自然に体が反応するようになり、気がつくとうとうと悩む前にどこが悪かったのかを考え、改善策を考え実行していることになっており、自分の成長を感じ取ることができます。



江田島台風

このことを感じるようになったのは、5月に行われた3自候補生交流行事でした。陸海空すべての候補生が江田島に集まり、3日間交流をしていく中で、確かにここ赤レンガでの生活は規則や躰が厳しく、陸空の候補生がうらやましいなど思う点もありました、しかしここでの生活をやめたいと思うことはありませんでした。自分なりに考えた答えは、他の自衛隊と比較してみることで、厳しい生活をやり遂げたという自信と誇りになったのだと感じました。

9月末、航空自衛隊の同期は候補生学校を卒業しました。また陸上自衛隊の同期も12月に卒業します。しかし我々海上自衛隊幹部候補生は3月までのあと半年をこの候補生学校で過ごし、その後約半年間はまだ実習幹部として練習艦隊での教育が待っています。

確かに時間的に考えたならば、海上自衛隊は学生としての教育期間が一番長く、退屈と感ずることがあるかもしれません。しかし我々にはそれだけ部隊に出る前に十二分に勉強する時間を与えられているのです。そのことを無駄にすることなく過ごしていかなければなりません。

とある先輩は「候補生学校の1日は部隊での1週間分の重みがある」とおっしゃられました。それだけこの江田島での日常は密度の濃いものであり、また我々は大きな期待を背負っているのです。

これからもすべてにおいて妥協することなく、高みを目指して日々の生活や教務、行事に向かっていき、練習艦隊での遠洋練習航海を終え部隊に羽ばたいていけるよ

## 防大53期に聞く



防衛大学校53期卒業生 空曹長  
佐藤 光紗

私は防衛大学校在籍時、バレーボール部に所属しておりました。部では、私たち53期は「ゴミ期」と呼ばれ、先輩方に可愛がっていただきました。そのゴミ期も防衛大学校を卒業し、各自衛隊の幹部候補生学校へ進んだ中で、陸、海要員に先んじて幹部候補生学校を卒業して部隊へ赴任するにあたり、現在の心情と意気込みを述べたいと思います。

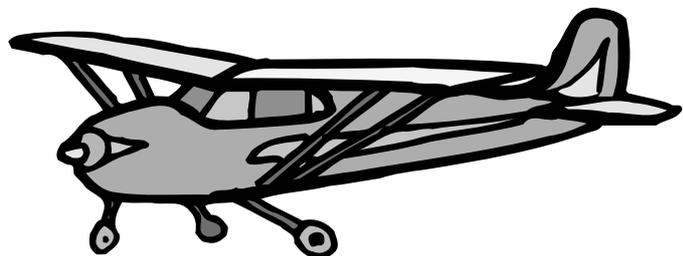
防衛大学校時、航空要員であった者の中には訓練期間前及び訓練期間中、周りの他要員に対して気を使っていた学生もいるのではないだろうか。なぜなら航空要員の訓練は、陸上、海上要員から見れば「楽勝航空」であり、「また座学か?」という印象を強く与えていたからである。そして、それを肌で感じていた私たち航空要員は他要員から訓練期間中、距離を置いて生活していた。しかし、幹部候補生学校に来て、その考えが変わった候補生も多い。私達が防衛大学校で学んできたことの全てが航空自衛隊への基礎であり、今後も必要不可欠な内容であることに気が付いたからである。幹部候補生学校で履修することの多くの導入が防衛大学校での訓練で学んできた中にある。そのことを防衛大学校にて学ぶ航空要員の後輩達に伝えたい。ゆえに、堂々と訓練に臨んでもらいたい。いや、臨むべきである。

53期の防衛大学校卒業生の中で、航空要員がいち早く部隊での勤務に就くこととなる。これからは、部隊での勤務によって専門的な知識を習得し、戦力となるべく鍛錬をしていくことになる。現在、私の中には、部隊での勤務に対して不安がある。知識がないに等しい私が、航

空自衛隊のために何ができるのであろうか。自分の存在意義を見出すまでの期間がとてつもなく恐ろしい。私たちは幹部候補生学校において、「指揮官は部隊団結の核心でなければならない」と教わった。事実、これまで私に教育を実施してくださった幹部の方々は、部隊の核心となるオーラを放っていた。では、部隊に配属された際、私は何をすればよいのであろうか。自分より知識も経験も豊富な空曹、空士に対してどう接すればよいのであろうか。部隊を導き、任務達成に寄与できるのであろうか。不安は募るばかりである。しかし、私の中に存在する感情は不安ばかりではない。最近はこの不安を「武者震い」なのではないのだろうかと考え、楽しむようになった。「部隊に行って、最初は右も左もわからないのは当然である。私に今最も必要なのは、『学ぼうとする姿勢』であり、素直な気持ちを持って勤務にあたり、一つ一つを着実に取り組んでいこう。」と考えられるようになったためである。防衛大学校時代から考えると4年半という長い年月をかけて、部隊で活躍するために勉強してきた私が、実際部隊で何処までできるのか楽しみである。また、私には頼もしい同期が、航空自衛隊の中でさえ101名（内2名はタイ王国空軍）もいる。幹部候補生学校を卒業し、同期と別れ、全国の基地に赴くことになるが、彼らが一番の理解者であり、また切磋琢磨できるライバルでもある。彼らの存在は必ず私の力となるに違いない。

防衛大学校時、訓練期間が怖かった私たち航空要員が他のどの要員よりも早く部隊に行く。そこには何が待っているのだろう。泣いたり、怒ったり、凹んだり、笑ったり…。私が航空自衛隊で働くこれからの30余年は何が起こるかわからないが、一瞬一瞬を大切に、同期を大切に、大きな希望を持って航空自衛隊に身を委ねてみようとする。

防衛大学校卒の先輩の皆さん、53期卒業生をよろしくお祈りします。他自衛隊の53期卒業生の皆さん、お先に部隊で頑張ります。防衛大学校54期以下の皆さん、防大の勉強をしっかりやって、同期との絆を深めてください。これからの53期（ゴミ期）の活躍に乞うご期待。



# 支部だより

## 東北地域支部の活動状況

東北地域支部支部長 仲村 悦義（12期・陸）



○宮城県在住28期、陸・村井嘉浩氏が県知事に再選。当地域支部もこれを支援した。

平成21年10月25日、任期満了に伴う宮城県知事選挙の投票が行われ、現職（1期目）村井嘉浩（よしひろ）氏が再選された。開票が始まって0.2%の時点で当選確実という結果で対立候補2名を圧倒的に破った。

村井氏は、県政4年の実績を踏まえ企業誘致を柱とする「富県戦略」の継続を訴え県政刷新を主張した民主党系遠藤氏と共産党天下氏を退けた。

村井氏は、防大及び幹部候補生学校を卒業後東北方面航空隊に配属されヘリのパイロットとして活躍したが、30歳ころに政治家を志し自衛隊を退職後松下政経塾に入り、その後県会議員に当選、一時期自民党県連幹事長を42歳の若さでつとめ平成17年県知事選に出馬、初当選したものの。

当地域支部としては、次の4つの支援をおこない再選を支援した。

- ① 激励金を送り、選挙費用の一部にあてていただいた。
- ② 宮城県在住の会員全員に、村井氏応援の趣意書を送り家族・親戚及び友人の理解、協力を促進した。
- ③ 選挙専用の村井氏推薦ハガキを、当支部役員で手分けして記載、選挙事務所に届けた。
- ④ 遊説期間中、選挙事務所を数回訪問し、県隊友会（会長10期、陸 大越雅行氏）と連携し応援にあたった。

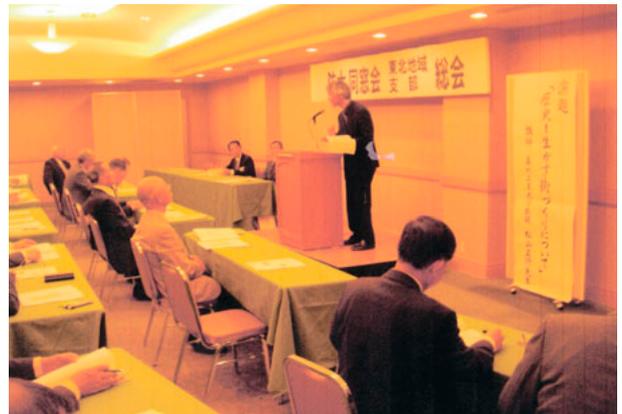
### ○当支部会員の現状

会員総数は180余名で、そのうち117名（65%）が宮城県に在住している。更に宮城県のなかでも仙台市に居住している会員は102名（全体の57%）となっていて都市部に集中した形になっている。ほかの東北5県は福島県21名、青森県が14名、山形・秋田・岩手の3県は10名未満という現状である。

### ○主な事業は年1回の総会・講演会及び懇親会

毎月中旬に総会を行うようにしているが、毎回の出席者は35～40名程度になっている。平成21年度は、5月16日（土）、仙台市内のホテル仙台プラザで総会を行い、そのあと講演会及び懇親会を開催した。

今回の講演は「歴史を生かす町づくり」について東北工業大学松山正将教授のお話を聞いた。築城から約400年を経過した青葉城の当時の築城技術の解説のあと、現在の街づくりに際して、行政や住民はその知恵をどのように反映して町づくりをしたらよいかというテーマで、参加会員から質問が矢継ぎ早に出るなど好評であった。



松山教授講演の様子

また懇親会では、宗像東北方面総監（当時）及び県内駐屯地司令、松山教授等もまじえて、1期、陸 高橋勲氏などを中心に近況を語り、そして小原台に想いを馳せながら楽しい時間を過ごした。

### ○その他の事業

夏季には防大学生が東北地域内に部隊実習に来るが、この際代表会員が受け入れ部隊を訪問し、寸志を添えて激励にあたっている。

今年7月第6師団で実習を行った陸の3年生の慰労会は神町駐屯地で実施されたが、全国会長の先崎一氏（12期、陸）が訪問され、学生に直接声をかけながら激励にあたられた。また当支部長も先崎会長と懇談の機会を得て、今後の会のあり方等について意見交換を行うことができた。

また12月には防大の教授等が面接試験に見えるので、この際東北方面総監はじめ総監部の主要幹部とともに支部長ほか数名の役員が一堂に会して、防大の近況等について語り合いながら懇談を行い、当支部の今後の活動の参考にしている。

## 関西地域支部の活動状況

関西地域支部支部長 田川 睦夫（12期・陸）

同窓生の皆様には、お元気で御活躍のことと存じます。関西防大同窓会の今年度の活動について、ご紹介します。



同窓会総会

4月に総会及び懇親会（90名参加）を実施しました。そこで、3年間会長として関西防大同窓会を牽引してこられた羽藤会長のあとを受け、田川が会長に就任しました。

新役員は次のとおりです。

役 職	期別	要員	氏 名
会 長	12	陸	田川 睦夫
副会長 (OB)	13	空	盛田 節生
同	15	陸	大久保博一
副会長 (現職)		陸自中部方面總監部幕僚長	
同		陸自第3師団司令部幕僚長	
同		海自舞鶴地方總監部幕僚長	
同		空自幹部候補生学校副校長	
監 査 役	17	陸	黒田 和伸
事 務 局 長	12	海	三浦 靖彦
同 次 長	17	陸	新見 泰朗
会 計 担 当	19	陸	三好 榮治

（その外、顧問、各期幹事、事務局内役員等がありますが、割愛させていただきます）

よろしくお願ひします。



新旧会長



田川新会長

上半期の5、7月には、それぞれ神戸港、大阪港において実施された部外のカッター競技へ中乗（21期）担当幹事以下12名が参加しました。

また、5月には、大阪府泉ヶ丘カントリークラブにおいて、井上（17期）担当幹事以下13名が、ゴルフコンペを実施しました。

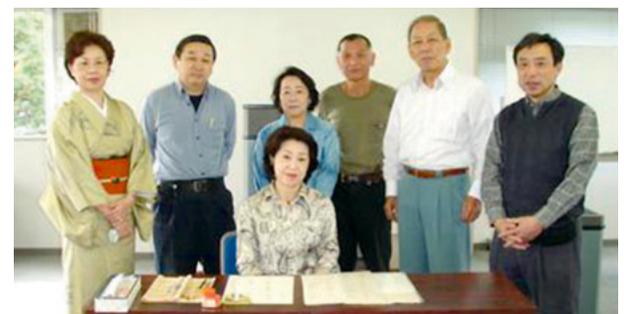


カッター大会



ゴルフ大会

書道教室は、秋葉先生（11期秋葉氏ご夫人）に講師をお願いし、大阪地方協力本部において、月に1度開いています。



書道教室

詩吟教室は、盛田先生（13期盛田氏のご母堂）に講師をお願いし、大阪地方協力本部において、月に2度開いています。



詩吟教室

下半期には、10月に伊丹駐屯地において、新見（17期）担当幹事がテニス大会を、11月には井上（17期）担当幹事がゴルフコンペを、同じく11月には、岸谷（11期）担当幹事が「堺」の歴史探訪第二段（昨年は37名参加）を計画しています。

書道教室と詩吟教室については引き続き実施します。



テニス大会

今年度の締めくくりとして、22年3月には、大阪リーガルロイヤルホテルにおいて、総会・講演会・懇親会を計画しています。

このような活動により、ご家族も含めて、同窓生の親睦を図っています。

なお来年は、関西防大同窓会創立10周年になります。（各写真は、中顧問（7期・空）の力作です）



歴史探訪

## 北陸地区支部の活動状況

北陸地区支部事務局長 西川 清（15期・陸）

北陸地区支部（支部長 濱谷隆平 6期・陸）は、8月29日（土）金沢都ホテルにおいて、第8回総会・講演会・懇親会を開催いたしました。

今回は、講演会講師を古垣史一自衛隊石川地方協力本部長にお願いいたしました。時期が防災の日に近かったため、古垣本部長に石川県から防災訓練の事前調整が入り、急遽、総会に先だって講演会を実施していただくことになりました。古垣本部長の講演は、我々OBの脳に強烈なパンチを与えるようで、参考になりました。

次いで、総会は、整斉と進行し、議案も承認いただき終了いたしました。



逍遙歌

懇親会は、来賓を含め27名参加と参加者が少なくなりましたが、これも防災訓練等の影響が出たものと思われました。しかしながら、例年のごとく、「学生歌」に始まり最後は「逍遙歌」に終わるパターンですが、OB・現役の皆様喜んでいただけたものと確信しました。

国旗に敬礼し、君が代を斉唱するのは、いいですね。



山瀬副連隊長による基調講演

また、平成21年11月7日（土）「2009国民保護・危機管理を考える集い in 小松」を小松芸術劇場の会議室を使用して北陸3県の同窓会会員及び隊友会会員等105名が集い、中西第6航空団副司令挨拶に始まり、基調講演及び討論会を実施しました。

- 1 山瀬第14普通科連隊副連隊長による基調講演（30分）として、「東南海・南海地震対処について」①地震のメカニズム、東海地震の歴史、被害の見積 ②震災対処計画の概要説明 ③震災対処上の着眼事項の説明 ④震災発生後の情報収集、特に「指標」偵察の説明 ⑤震災への備え・心構え など最新の対処要領を説明していただきました。
- 2 古垣自衛隊石川地方協力本部長による震災発生時の広報官の活用要領等説明
- 3 谷内金沢市役所防災安全課補佐（自衛隊OB）による金沢市国民保護計画の説明
- 4 富山県における自主防災アドバイザー制度の説明（濱谷会長）
- 5 福井県の防災の特色とOBの貢献策の一例（山岸理事）
- 6 隊友会全国アンケート調査のまとめの説明（真館石川県隊友会会長）

などの説明・発表がなされた後、質疑応答を実施しました。

特に、今回の講演で「指標」偵察という方策が示され、また、地本の広報官が県内各地の情報収集に活用できるなど参考になりました。

また、防大同窓会会員・隊友会会員等自衛隊OBも積極的な協力支援を行うためには、携帯電話のメール機能が活用できるよう情報収集組織の構成と北陸地区の指標の設定が必要と実感した次第です。

21年3月29日に第5回ゴルフ大会を実施しました。優勝者は、中西氏（4期・陸）でした。

## 山口地区支部の活動状況

— 錆びた感性をリフレッシュ

— サファリ・松陰／みすずを探索 —

山口地区支部 岩本 紀之（10期・陸）



本年10月6日ゴルフで親睦を深めた我が同窓会は、11月15・16日と加齢に応じて錆びた感性を取り戻すため1泊2日の感性リフレッシュツアーを行った。

初日は秋吉台のサファリランド。園長は14期の戸島晨吉君。水を得た魚のように澁刺として園の運営に当たっている様が、園内周遊バスに同乗し動物たちや創意工夫に満ちた施設を懇切丁寧に説明する姿から十分にうかがい知ることができた。監視塔での勤務要領を始め現役時代に培った警備訓練、業務改善等、昔取った杵柄が役に立っているようであった。バスの中から来年の干支であるトラをカメラに収めることもできた。

夜は、日本海の潮騒を眼下に望む黄波戸温泉。恒例の懇親会で政権交代に伴う国防論等で大いに盛り上がり、深川湾越しに見える青海島大橋の夜景に感嘆しつつ眠りに就いた。

翌日は、まず没後150年を期して開館された松陰神社宝物殿「至誠館」を見学。ガラス越しであるが「士気七則」を始めとする松陰先生の肉筆を目の当たりにし其々が感慨を新たにした。松陰は今日の日本を、我々をどのような目で眺めているのであろうかと、しばし肅然たる想いに打たれる一行であった。

次は、感性の宝庫とも呼ばれる金子みすずの記念館。「大漁」、「私と小鳥と鈴と」などを口ずさみつつ純な少年の心を取り戻す一行であった。中には、「さあ、いよいよ出発だ。家族のもとへ急ぐのだ。みんなそれぞれ生きている」などと、みすずになりきる者もいた。

幹事は14期伊藤俊廣君。地元大津高校の出身で行く先々で親戚が出迎え。仕上げに食事をした海鮮村「北長門」の社長も親戚。名幹事を得て感性がこぼれそうになった一行は、満足の体で家路につくのであった。



サファリランド

## 四国地域支部の活動状況

四国地域支部支部長 先山 英毅（9期・陸）



明けましておめでとうございます。同窓会の皆様方には、それぞれの地においてお元気でご活躍のこととお慶び申し上げます。

四国地域支部は昨年12月、発足後ようやく3年目を迎えました。そして恒例の総会・親睦会は、今年度は徳島で開催されました。その節私は3代目として地域支部長を引き継ぐこととなりました。どうぞよろしくお願い致します。

昨年の地域支部内の特記事項は、徳島の阿波踊り「防大連」の活動支援が同窓会本部の助成対象事業として承認されたことです。関係者のご協力に感謝いたしますとともに、大変うれしく思っております。阿波踊りは江戸期からの長い歴史があり、ご承知の通り今では国内的にかなり名の通った阿波の夏の行事です。徳島ではこの時期、企業や学校やあるいは町内会など様々なレベルで無数の「〇×連」と称する踊り子グループを造って楽しく踊り呆けるのです。そして踊る人は阿呆、見る人も阿呆と呼ばれております。まだ御覧になっていない方は、一度徳島で阿呆になってみませんか？「防大連」もその一つで、防大設立後間もない時期から活動した歴史を有しております。郷土出身の現役の防大生・防医大生等を中核として、その家族、OBその他多数の協賛者からなる俄か踊り子グループです。実質的に地方協力本部が主体となってご支援いただいております。防大生等広報の一翼を担っております。このような阿波踊り環境の中で1個の独立連として活動するには様々な課題があり、特に毎年資金上の苦労を重ねている訳ですが、この助成を受けることで広報の継続性が強化されたと考えております。

再来年は防大同窓会創立50周年を迎えることで、本部では諸準備が計画的に進んでいるようでご同慶の至りです。14Bの誕生で域内の防衛環境が変貌を遂げつつある昨今、この折角の節目に四国でも少し工夫を加えた催しが出来ればと考えております。四国会員の皆様のご支援を切にお願い申し上げます。



徳島阿波踊り

## 九州地域支部の活動状況

九州地域支部事務局長 西山 洋（13期・陸）

全国の同窓生の皆様には、益々お元気でご活躍のことと存じます。

九州防大同窓会は、平成10年の発足以来11年目を迎え、会員数も千百余名を超える規模となり、年々増加の一途を辿っています。このうち約450名の会員が福岡県に在住し、次いで会員数の多さとしては熊本県、鹿児島県、大分県、長崎県、宮崎県、佐賀県の順となっています。

活動としては、毎年2月頃に行う九州防大同窓会・懇親会を最大の事業として、その他に夏季定期訓練で九州地区を訪れる防大生の激励、懇親ゴルフ大会等を行っています。このために年間6回の本部事務局会同を行って事業の検討・調整を行っていますが、この際3回の会議は、各県支部長との合同会議、現職陸・海・空代表副会長及び各期代表者を交えての会議、そして各県事務局長との合同会議を行い、各県支部、現職同窓生及び各期との密接な連携を図りつつ事業を進めているところです。



### 1 平成20年度九州防大同窓会盛大に実施

九州防大同窓会は、平成21年2月22日（日）、福岡市内のANAクラウンプラザホテル（旧博多全日空ホテル）において15期生及び35期生を担当幹事として「平成20年度九州防大同窓会総会・懇親会」を開催しました。

総会においては、山口会長の挨拶、西山事務局長の事業報告に続いて、防大創立50周年記念ビデオ「任重く道遠し～小原台を駆けた若人」を放映、開校当時の小原台から一新された小原台までを見て、1期生から51期生までそれぞれの小原台の青春を懐かしく振り返りました。

懇親会では、まず現職を代表して陸上は西部方面総監・用田陸将、海上は佐世保地方総監・加藤海将、航空は西部航空方面隊司令官・小野田空将からそれぞれの部隊の現況報告を兼ねた挨拶があった後、懇親に入りました。ビデオ放映もあったため、例年になく学生時代の思い出話に花が咲き、締めくくりは若手幹部諸君の音頭で参加

者全員肩を組み、学生歌と逍遙歌を声高く斉唱して散会しました。

## 2 平成21年度夏季定期訓練防大生激励

今年度も、夏季定期訓練で九州各地の陸・海・空の基地・駐屯地を訪れている防大生をOBが訪問し激励しました。

陸上では、第3学年の諸君が福岡（第4師団）、小倉（第40普通科連隊）、北熊本（第8師団）、都城（第43普通科連隊）及び国分（第12普通科連隊）で訓練を受けましたが、この間に7月7日に福岡駐屯地で激励会が行われました。

第四師団長主催の激励会に竹下副会長他2名が、7月24日に北熊本駐屯地での激励会に齋藤熊本県支部長他2名が、7月11日に都城駐屯地での激励会に此本宮崎県支部長他6名が、7月17日に国分駐屯地での激励会に福島鹿児島県副支部長他9名がそれぞれ参加して激励しました。

海上では、第3学年の諸君が鹿屋（第1航空群）で航空部隊実習を受けましたが、7月13日に鹿屋基地での激励会に平田鹿児島県支部長他3名が参加し激励しました。

又、第2学年の諸君が佐世保（佐世保地方隊）で乗艦実習を受けましたが、樋口長崎県支部事務局長他3名が7月24日「せんだい」での、そして7月28日「くらま・ちょうかい・あしがら」での激励会に参加し激励しました。

航空では、第3学年の諸君が新田原（第5航空団）で航空団実習を受けましたが、7月8日に新田原基地での激励会に宮崎県支部の兒玉氏が、又第4学年の諸君が春日（西部航空警戒管制団）で警戒管制部隊実習を受けましたが、7月9日に春日基地での激励会に西山事務局長他一名が参加し激励しました。

それぞれの激励会では、若い防大生、現役の同窓生及び退官した同窓生が和やかな談笑の中で先輩は後輩への期待を語り、防大生は先輩自衛官の活躍の話聞き大いに参考になったことでしょう。

いずれも、今年度のはじめから防大、各部隊及び各県支部と密接に調整しつつ役割分担を行って組織的に行いましたが、この事業を通じて九州防大同窓会と防大生の絆はもとより、関係した防大、各部隊及び各県支部との関係もより強いものになったと感じています。

## 3 平成21年度懇親ゴルフ大会

平成21年度九州防大同窓会懇親ゴルフ大会は、10月2日（金）小郡カントリークラブで期別対抗方式で行うよう計画されました。約80名の参加が予定され、今年も盛大に楽しくプレーが出来るものと期待していた参加者も多かったと思いますが、当日北部九州一帯を襲った集中豪雨のため残念ながら延期となりました。せっかくゴルフ場まで来た者は、それぞれ喫茶室等で談笑の後、12月4日（金）での再挑戦を胸に秘め、帰路につきました。

## 桜華会の活動状況

桜華会事務局長 吉田ゆかり（40期・空）



新年明けましておめでとうございます。

同窓生の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

桜華会の活動状況について、紹介させていただきます。

平成18年3月、発会準備委員会が編成され、1年間の準備期間を経て、平成19年2月、正式に防衛大学校女子学生の同窓会として発会しました「桜華会」は、平成24年2月には発会5周年を迎えます。

そこで、桜華会事務局では、「桜華会発会5周年記念事業」を実施することを決定いたしました。その準備の一環として、発会3周年となる平成22年2月（若しくは3月）に総会を実施予定であります。総会においては、現在、桜華会事務局が策定中であります「桜華会発会5周年記念事業基本計画（案）」を報告するとともに、「桜華会発会5周年記念事業準備委員会」を編成予定であります。会員の皆様には、総会の細部については、別途ご案内予定ではありますが、是非ともご出席いただきますよう、紙面をお借りしましてお願い申し上げます。併せて、総会への本科女子学生の参加についても検討しております。これは、発会式に当時の現役の学生2名が参加してくれたこともあり、また、5周年記念事業を実施するにあたり、本科女子学生の生の声を聞くことも大切であると痛感しているからであります。

桜華会は、これまで、なかなか十分な活動が出来ていないのが現状ではありますが、これを契機として、今後、活発に活動していこうと考えております。また、平成24年は、防衛大学校に女性の門戸が開かれてから「20年」という節目の年でもあります。本事業が、会員相互の親睦を深め、会の発展に寄与するだけでなく、防衛大学校本科女子学生の充実・発展にも寄与することが出来るよう、各種検討・準備して参りたいと思っております。

平成22年度以降は、準備委員会が中心となって、5周年記念事業の準備を進めていく予定であります。

防衛大学校同窓会の皆様、今後とも、どうぞご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いたします。

なお、「桜華会」に関するご質問・ご意見等は、桜華会事務局員までお願いいたします。

（航空幕僚監部防衛部防衛課 吉田3佐）





同窓会からは、会長が出席し、卒業式に引き続き午餐会での祝辞において、「特に、本科学生の入学時の幼さが残る表情からまことに凛々しい顔つきに変わった姿を見て嬉しくかつ頼もしく思う。」「頼もしい後輩の同窓会への入会を心から歓迎する。」「防大生活で指標としてきた学生綱領や横イズムの精神は、これからの自衛官生活においても普遍の価値であり、これまでに培った精神を確信し、糧として新たな飛躍を遂げ、これからの職務を立派に遂行することを期待する。」「学生綱領や横イズムのみならず、この4年間で同期生という大きな宝物を手に入れた。その宝物は、年をとればとるほど、諸官の励みとなり助けとなり力となるであろう。」と述べて、晴れの門出をお祝いするとともに激励をした。

また、この日は、10期生によるHCDが行われており、同窓会長とHCD代表者との懇談が実施されるとともに、3月をもって下番する同窓会小原台事務局員10名に対し、同窓会長から記念品を手渡して労をねぎらった。



卒業証書授与式



解散！

総務部担当記

## 第57期生等入校式

4月5日（日）、北朝鮮のミサイル発射の脅威のある中、本科第57期生の494名、理工学及び総合安全保障研究科前期・後期84名の入校式が整齐と執り行われました。岸信夫防衛大臣政務官に対する栄誉礼に続き、青年将校らしく澁刺と宣誓を行い、防衛大学校学生たるの名誉と責任を自覚し、着校したときのあどけなさの残る表情から防大生らしい凛とした表情に変化しました。五百旗頭防衛大学校長の式辞では、「国と国民を守る崇高な任務のため、参集されたことに敬意を表します」と自衛隊の任務の重要性を述べられ、岸信夫防衛大臣政務官（当時）の訓示では北朝鮮のミサイル発射等わが国を取り巻く安全保障環境を例に上げ、自衛隊の任務の多様化を述べられました。ご家族の見守る中、57期生494名はやや緊張した面持ちで、防大生としてのスタートを切りました。

光うらかな陽気の中、新入生はバタバタと倒れ、防大生としての厳しさを早速味わったようです。



57期生により宣誓

午餐会では、厳しい入校式及び観閲式を乗り越え成長した姿を両親に見せることができ、ほっとした様子で食事を楽しんでいました。ご両親も成長した我が子を見て涙したり、厳しい生活・訓練に耐えられるか心配な気持ちで我が子を送り出していました。



岸防衛大臣政務官に対する栄誉礼



午餐会

観閲式では観閲部隊指揮官角丸学生の指揮の下、2・3・4学年約1,000名が新編成で観閲行進を行いました。春

総務部担当記

## 第3学年の部隊実習支援●●●

先崎同窓会長は、7月23日、防大第3学年の夏期部隊実習が行われている陸上自衛隊神町駐屯地を訪問した。

同窓会では、平成20年度から、夏期訓練中の防大第3学年の激励を実施している。事業内容は、①現職会員地区支部が行う激励会等の支援、②同窓会長等本部役員による現地での直接激励、③退職会員の激励会参加のための旅費支援の三項目である。

今回の訪問は、その一環として行われたものであり、本部役員による激励に併せ、退職会員による激励として仲村東北地域支部長が行動をとらした。特に、本部役員等による現地激励は、20年度においては、種々の都合により中止されていることから、今年度が初めての実施であった。

第6師団での実習は、陸上要員24名に対し、7月3日から27日の間に、20・22・44各普通科連隊に分かれての実習を主体に、師団長訓話、師団内各部隊の研修等によって構成されており、同窓会長が訪れたのは、概ねの実習が終了して、学生達の胸には実習をやり通した充実感とともに部隊への斬新な印象が満ち溢れていた最後の打ち上げ会という場であった。

同窓会長は、駐屯地到着後、まず第6師団司令部に師団3役を表敬した後、駐屯地内のクラブ「あかしあ」での第6師団主催による実習学生の激励会に臨んだ。

激励会の冒頭、安部（21期）第6師団長の挨拶に引き続き挨拶に立った会長は、「自分が防大第3学年の時の部隊実習がやはり第6師団であり、初めての部隊生活の体験で強烈な印象を持った。同じ場所で実習した諸君が今回の体験で得たことを大切にしたい。」と述べるとともに、「現職の同窓生や退職した同窓生との触れ合いを通じて自分の将来あるいは一体感を感じて欲しい。」と述べた。また、仲村東北地域支部長は、東北地区の同窓会活動の状況及び隊員の東北人気質についてユーモアを交えて紹介した。挨拶の後には、激励会の実施に当たり同窓会から支援がなされていることが紹介された。

南（21期）副師団長の音頭による乾杯後は、学生と現職・退職同窓生入り乱れての賑やかな懇談、学生一人一人の遠慮容赦のない率直な所見発表と続いて大いに盛り上がり、最後は、保坂（25期）幕僚長の音頭による乾杯で幕を閉じた。激励会の終始を通じ、学生からは、部隊の実態・陸上自衛隊の本質・幹部の心構えを正しく認識しつつあることを伺わせる発言が相次ぎ、実習の成果大なるものが感じられた。また、同窓会を身近に感じてもらえる良い機会になった。



先崎会長の激励



懇談する会長



懇談する仲村東北地域支部長

激励会終了後には、せっかくの機会でもあることから、第6師団長、同副師団長、同窓会長及び仲村東北地域支部長による懇談会が実施され、同窓会活動のあり方等について、忌憚のない意見交換がなされた。

今回の現地激励は、短時間の滞在であったが、防大第3学年学生の激励の主目的のみならず、同窓会活動に関し現地において意見交換を実施する等きわめて有意義なものであった。同窓会では、引き続き本事業を実施して行くよう計画している。

なお、今回の実施に当たり、安部第6師団長には多大なご配慮をいただいた。紙面を借りて心から感謝申し上げる。

事業部担当記



安部第6師団長の挨拶



# 第13回防大同窓会ゴルフ大会 ●●●●●●●●●●

13回目を迎えた恒例の防大同窓会期別対抗ゴルフ大会が、今年も千葉カントリークラブ川間コース（東、西、南コース）において、今年から新たに第19期生が加入し、シニアの部（第1期～9期）が9月18日奥村副会長の、レギュラーの部（第10期～19期）が9月25日林事務局長の参加を得てそれぞれ行われました。両日とも開会式に先立ち故松本第6代学校長に黙祷を捧げた後、素晴らしい秋空の下、選手達は各期の栄誉を担い日頃の練習の成果を遺憾なく発揮し、防大同窓生らしい澁刺とした熱戦を繰り広げました。



黙祷



9期生チーム

団体戦（レギュラーの部）

順位	グロス			ネット		
	期	スコア	平均	期	スコア	平均
優勝	10期	587	83.9	15期	505.8	72.3
準優勝	17期	590	84.3	14期	507.4	72.5
3位	14期	592	84.6	19期	513.2	73.3
4位	19期	595	85.0	13期	515.6	73.7
5位	13期	596	85.1	16期	516.2	73.7
6位	15期	598	85.4	12期	520.0	74.3
7位	18期	608	86.9	17期	520.2	74.3
8位	12期	609	87.0	11期	523.0	74.7
9位	16期	611	87.3	10期	523.4	74.8
10位	11期	619	88.4	18期	528.2	75.5

団体戦（シニアの部）

順位	期	スコア	平均
優勝	9期	366.2	73.2
準優勝	2期	369.4	73.9
3位	7期	369.4	73.9
4位	4期	373.0	74.6
5位	8期	373.8	74.8
6位	5期	375.0	75.0
7位	3期	380.0	76.0
8位	6期	380.0	76.0



10期生チーム



15期生チーム

個人（レギュラーの部）

		優勝		準優勝		第3位	
グロス	東	武富 龍治 19期 76	田母神 俊雄 15期 78	大内 伸浩 10期 79			
	南	佐野 直文 17期 79	光吉 達幸 10期 81	長谷 勇 11期 81			
	西	佐藤 清 17期 81	安宅 耕一 15期 83	盛山 直樹 17期 83			
ネット		常廣 治彦 14期 70.2	浅野 明照 15期 70.4	林 彬 12期 70.6			

## シニアの部

シニアの部は、各期10名（1期生1名、3期生9名の参加）合計80名が競い、各期上位5名のネットの集計の結果、第9期生が優勝の栄冠を獲得し、優勝カップとチャンピオンキャップを受領しました。

## レギュラーの部

“10期生の連覇か？13期生の巻き返しか？”レギュラーの部は、各期10名合計100名が競い、各期7名のグロスの結果、10期生が連覇を果たしました。また、ネットでは15期生が栄冠を獲得しそれぞれ優勝カップとチャンピオンキャップを受け取りました。

個人（シニアの部）

		優勝		準優勝		第3位	
グロス	東	大塚 武年 8期 81	松尾 照昌 3期 82	西村 義明 6期 82			
	南	新田 務 4期 80	庄 克彦 2期 83	廣崎 恪也 8期 84			
	西	大杉 祐司 7期 76	坂上 哲也 6期 81	松田 淳一 4期 82			
ネット		庄 克彦 2期 71.0	石田 潔 7期 71.4	久保 善昭 9期 71.8			

事業部担当記



## 防大卒留学生歓迎夕食会

防大同窓会は毎年、防大が実施する防大卒留学生招へい事業に連携し歓迎夕食会を主催しています。これは海外における同窓生で11月10日（火）に次の2名をお招きし明治記念館で実施しました。

タイ王国 サーティット サーアッドスッド 空軍中佐 (35期生)

タイ王国 パンヤシリ ミーソムソット 海軍少佐 (43期生)

夕食会には被招へい留学生の同期や在タイ防衛駐在官経験者の同窓生に加え、先崎会長以下同窓会本部役員が参加しました。



サーティット中佐とパンヤシリ少佐には先崎会長から記念品（同窓会の文鎮）が手渡され、



皆で肩を組んで逍遙歌を斉唱しました。



先崎会長あいさつに引き続き、



サーティット中佐は防大卒業後にも数回日本に留学経験があり、見事な日本語であいさつ、さらに



そして最後に記念撮影をしてあっという間の楽しい2時間が過ぎました。



パンヤシリ少佐も防大卒業後10年ぶりとは思えない流暢な日本語であいさつされました。

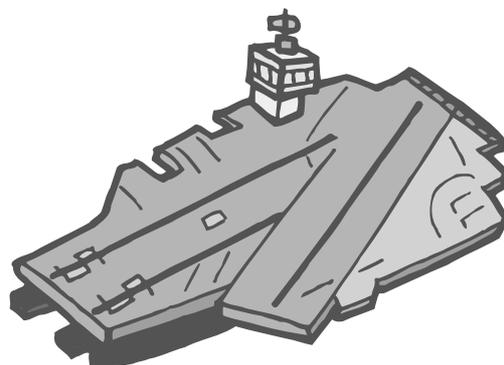


牧本副会長の音頭により日本酒で乾杯しました。会食、懇談では当時の思い出話や、同期の方々と大いに話が弾みました。

防大卒業外国人留学生は最初に受け入れた昭和33年以來200名以上になり、その中でも最も多いタイでは毎年防大同窓会が実施されているそうです。

防大同窓会は、今後も引き続き歓迎夕食会を開催し、ささやかながら国際軍事交流の一助になることを願っています。

事業部担当記



# 連絡事項等

## 平成20年度防衛大学校同窓会決算書

平成21年3月31日  
(単位：円)

項 目		20年度予算	20年度決算
一 般 会 計	収 入		
	前年度からの繰越し	30,000	0
	会費 (52期生等)	21,000,000	21,988,470
	預貯金利息	2,600,000	2,337,698
	雑収入	50,000	12,800,130
	合 計	<b>23,680,000</b>	<b>37,126,298</b>
	本 部		
	機関紙の発行	3,900,000	3,889,459
	代議員会・年次懇親会の開催	1,600,000	1,160,893
	慶弔費 (弔電・供花等)	1,000,000	815,584
同窓会名簿の維持	150,000	11,150	
スポーツ等交流会の実施	90,000	189,170	
防大卒業留学生との交流	200,000	183,210	
会費納入促進活動の推進	370,000	352,580	
長期的検討事項の継続研究	200,000	0	
小 計	7,510,000	6,602,046	
支 部			
地域支部への助成	900,000	159,630	
地域支部等の設立準備	200,000	0	
現職会員地区支部の活性化支援	0	0	
小 計	1,100,000	159,630	
期 生 会			
HCDの実施	300,000	343,304	
HVDの実施	300,000	310,700	
期生会HPの開設助成	100,000	0	
期生会との連携強化	160,000	50,000	
期生会名簿の作成支援	1,000,000	281,680	
小 計	1,860,000	985,684	
防 大			
開校記念祭等支援	1,600,000	1,620,000	
校友会対外活動支援	800,000	399,668	
競技会支援 (記念品)	540,000	479,377	
顕彰・顕花式支援	150,000	215,581	
期生会発足等支援	200,000	200,000	
安全保障講座助成	100,000	100,210	
学生部隊実習支援	500,000	442,410	
小 計	3,890,000	3,457,246	
事業経費小計	<b>14,360,000</b>	<b>11,204,606</b>	
維 持 管 理			
事務費	600,000	1,194,068	
通信費	440,000	341,537	
交通費	550,000	607,120	
会議費	500,000	88,842	
小原台事務局運営費	160,000	38,945	
事務員雇用費	2,000,000	2,000,000	
本部事務局室賃貸費	2,850,000	2,783,336	
その他の経費	0	344,912	
維持管理費小計	7,100,000	7,398,760	
予 備 費	2,220,000	548,160	
支出小計	<b>23,680,000</b>	<b>19,151,526</b>	
積立金に繰り入れ	0	17,974,772	
支出合計	23,680,000	37,126,298	
特 別 会 計			
収 入			
前年度からの繰越し	18,928,086	24,397,582	
預貯金利息	24,000	32,088	
合 計	18,952,086	24,429,670	
支 出			
謝金等	720,000	727,455	
同窓会システムの維持整備	180,000	0	
通信費及び事務費	150,000	20,790	
交通費	200,000	0	
予備費	17,702,086	0	
支 出 合 計	18,952,086	748,245	
次年度への繰越し	0	23,681,425	
合 計	<b>18,952,086</b>	<b>24,429,670</b>	

# 会費納入状況

21.10.31 現在

期別	会員数	完納者数	完納率%	未完納者数				期別	会員数	完納者数	完納率%	未完納者数			
				陸	海	空	計					陸	海	空	計
1	339	320	94	11	6	2	19	30	412	345	84	48	13	6	67
2	359	345	96	10	2	2	14	31	432	410	95	15	6	1	22
3	484	452	93	17	12	3	32	32	406	356	88	31	13	6	50
4	465	434	93	22	8	1	31	33	449	376	84	45	20	8	73
5	529	483	91	26	11	9	46	34	430	375	87	40	9	6	55
6	477	428	90	39	6	4	49	35	496	479	97	9	5	3	17
7	503	459	91	30	7	7	44	36	354	344	97	6	2	2	10
8	467	418	90	36	8	5	49	37	384	347	90	16	7	14	37
9	498	477	96	1	9	11	21	38	338	261	77	63	10	4	77
10	498	449	90	28	11	10	49	39	356	327	92	8	11	10	29
11	495	448	91	29	8	10	47	40	388	327	84	35	22	4	61
12	466	408	88	34	11	13	58	41	405	364	90	24	14	3	41
13	468	406	87	39	11	12	62	42	407	366	90	20	12	9	41
14	491	455	93	21	2	13	36	43	431	385	89	23	15	8	46
15	463	449	97	9	3	2	14	44	381	220	58	118	39	4	161
16	428	403	94	10	4	11	25	45	351	157	45	131	20	43	194
17	498	454	91	20	10	14	44	46	360	281	78	71	7	1	79
18	423	397	94	9	7	10	26	47	388	338	87	32	11	7	50
19	446	415	93	13	16	2	31	48	425	375	88	23	15	12	50
20	383	352	92	17	3	11	31	49	*294	294	100	0	0	0	0
21	491	468	95	13	4	6	23	50	325	294	90	26	4	1	31
22	475	410	86	33	9	23	65	51	*323	320	99	0	0	3	3
23	410	388	95	8	8	6	22	52	369	320	87	27	13	9	49
24	448	415	93	8	18	7	33	53	*371	370	100	1	0	0	1
25	424	401	95	11	4	8	23	54	411	370	90	17	13	11	41
26	507	468	92	26	7	6	39	55	*370	344	93	2	0	24	26
27	389	378	97	8	1	2	11	56	424	344	81	21	25	34	80
28	453	422	93	17	8	6	31	57	*384	383	100	0	1	0	1
29	393	358	91	16	9	10	35	58	431	383	89	22	21	5	48

会員数の項：会費納入対象者（留学生を除く防大卒業者数） 49～53期生の欄：\*印の項は、幹候校入校時の在校生に対する数値

## 会費納入のお願い

防衛大学校同窓会事務局長 林 直人

昨年同様、本年も53期生の陸・海・空幹部候補生学校在校生のほぼ全員に完納していただきました。衷心よりお礼申し上げます。

また、その他の期においても納入率の向上のために、期生会長及び代議員の皆様にご助力をいただき、成果をあげております。重ねて御礼申し上げます。

同窓会事務局では、「会員相互の親睦、母校の発展及び社会的活動に寄与する」という会の目的を達成するため、同窓会の経済的な基盤を更に固めるべく、18年度から学校等を訪問するなどして会費納入の促進に努めております。

同窓会活動の趣旨を理解して頂き、会費未納の方（事務局で把握しておりますので下記連絡先にご確認下さい。）には、納入を宜しくお願い申し上げます。

### 【納入先】 ゆうちょ銀行

口座番号 00260 - 5 - □□24826（百万及び十万の桁は無記入）

加入者名 防衛大学校 同窓会

通信欄 期別、要員別及び部隊名（現役の場合）を記入

### 【納入先】 三井住友銀行 飯田橋支店

口座番号 1270680

加入者名 防衛大学校同窓会 経理部長 持田 清久

なお、銀行振込の場合は、納入者の確認及び完納証等の発送のため、必ず振込者氏名、住所、期別、要員別、振込期日をeメール、Fax、電話等で下記にご連絡下さい。

### 【連絡先】

同窓会本部事務局：〒160-0003 東京都新宿区本塩町21-3-2

Tel/Fax：03-3351-8910（自即電話 8-6-28895）

eメール：honbu@bodaidisk.com

### 【参考】

#### 普通会費

・防大本科卒業生

卒業時の3尉俸給月額（1号俸）の1/4（千円未満切捨）

・防大研究科卒業生（一般大学卒業者）（19年度改正）

卒業年度の3尉俸給月額（1号俸）の1/8（千円未満切捨）

延滞金 1,000円×（完納年度－3尉任官年度又は研究科卒業年度）  
（防衛大学校同窓会会費に関する細則より）

会費算出例：45期生で過去に分納がない場合

普通会費 60,000円、完納年度22年度、3尉任官年度13年度（14.3）

22年度納入額 60,000円＋1,000円×（22－13）＝69,000円

（詳細は同窓会事務局までお問い合わせ下さい）

## 平成21年度防衛大学校同窓会懇親会等へのご案内

平成21年度の同窓会講演会・懇親会を下記のとおり開催致しますので、ご出席を賜りたくご案内申し上げます。

日 時：平成22年3月13日（土）16：10～19：30

場 所：明治記念館

東京都港区赤坂2-2-23（TEL 03-3403-1171）

（JR中央・総武線「信濃町駅」徒歩3分）

懇親会費：5,000円

講演会：16：10～17：10 1階「曙（1）の間」

講師：現職自衛官で調整中

演題：「日本を取り巻く国際情勢と国際貢献（仮称）」

懇親会：17：30～19：30 2階「富士（1）の間」

参加される方は、同封の「返信用はがき」にて、平成22年1月29日（金）までにお申し込み下さい。

代議員会は、平成22年3月13日（土）13：30～15：50の間に行われます。「曙（1）の間」

### 同窓会旗の図案募集について

来年度、防大同窓会発足50周年を迎えるにあたり、同窓会では各種記念事業を計画しております。

その一環として、同窓会旗、記章（旗と同じ図案）を作成することとなりました。

つきましては、図案を同窓会会員の皆様より募集いたします。

#### 応募要領

- ① デザイン、配色、寸法を、A4サイズ横使用にて記載
- ② 応募締め切り時期：平成22年3月31日
- ③ あて先：防衛大学校同窓会本部 50周年記念事業準備委員会 寺谷 猛

郵 送：〒160-0003 東京都新宿区本塩町21-3-2 防衛大学校同窓会本部

メール：honbu@bodaidsk.com

F A X：03-3351-8910

なお、採用させていただいたものは、実施予定の50周年記念祝賀会にて掲示・紹介致します。

# 地域支部等への助成事業について

## 1 紹介趣旨

『地域支部等への助成事業』は、「地域支部等を資金面で支援して活発な活動に寄与するため、平成18年度から実施されております。しかしながら、この助成事業がすべての地域支部等に周知され、等しく恩恵を受けているか疑問であることから、改めてその概要を紹介するものです。

なお、平成20年度との違いは、助成基準に1項目追加（ホームページ立上げ助成）したことです。

## 2 助成基準（助成基準額）

- (1) 現職会員と退職会員が協力して支部として参加する行事で、広報効果が認められる事業(審査結果による。)
- (2) 地域支部等が主催する講演会の講師に対する謝金（3万円／講師）
- (3) 県単位以上の支部が主催するスポーツ行事において、「防衛大学校同窓会」を銘記した優勝カップの購入（3万円以下）
- (4) 地域支部等が新たにホームページを立ち上げる場合（1回限り）（2万円）
- (5) 上記以外の要望は、理事会で個別に審査

## 3 要望手続き

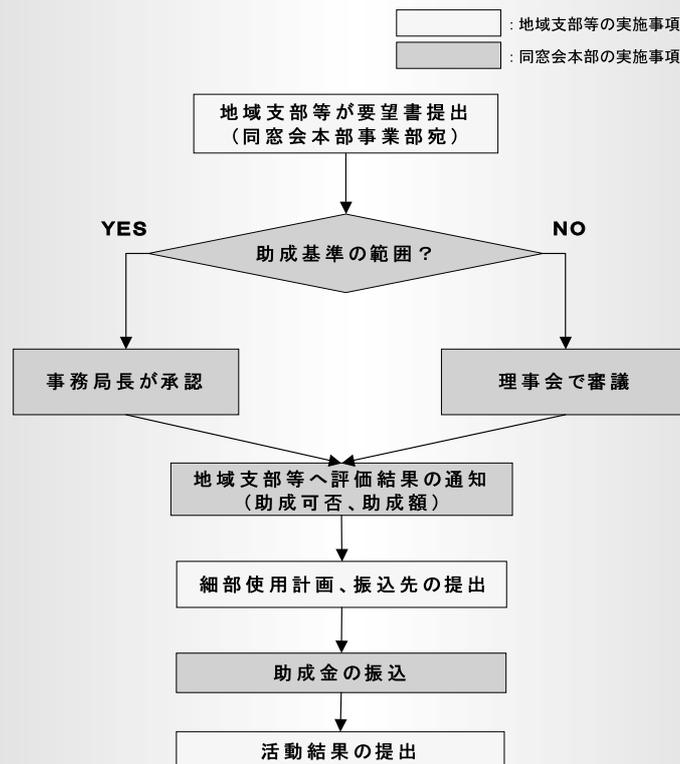
- (1) 「地域支部等への助成」事業（経費）要望書（防衛大学校同窓会HPからダウンロード）で要望
- (2) 地域支部等からの要望は、年度を通じて受付
- (3) 要望手続きの流れ 別図のとおり

## 4 その他

細部は、防衛大学校同窓会HP中、「お知らせ」の項に掲載

別図

### 要望手続きの流れ



## 名簿管理に関するお知らせ

### I 名簿の維持管理

会員名簿は各種同窓会活動の基盤となるものであり、同窓会事務局としましてはできるだけ最新のデータの確保と厳正な維持管理に努めております。データの確保については、主として以下の要領で実施しておりますので、会員の皆様のご協力をお願い致します。

#### 1 各期生会からの通知

個人情報保護法制定等を受け関係各所からのデータ収集が難しくなったことから、名簿の修正は、平成16年度から各期生会代議員に、平成19年度からは各期生会業務幹事に対して、例年8月の定期異動後をお願いしております。

平成21年度は電子メールの活用を図り、期生会との連携の強化を図りつつデータの収集に努めさせて頂きました。

業務多忙にも拘らず担当して頂いた皆様、ご協力有難うございました。

#### 2 会員個人からの通知

同窓会ホームページ上の「異動連絡」の項は、削除いたしました。今後は事務局への電子メールまたは電話等での連絡をお願いします。

### II 利用目的及びプライバシーポリシー

#### 1 利用目的

次の目的で皆様の個人情報を利用又は提供します。

- (1) 同窓会各種事業推進のための連絡
- (2) 機関誌「小原台だより」の発送
- (3) 会員の慶弔の実施
- (4) 期生会、校友会、教務班等各種活動への協力
- (5) 地域支部等への協力

#### 2 プライバシーポリシー

以下のプライバシーポリシーに従い個人情報の適切な保護に努めております。

- (1) 利用目的の範囲内で収集、管理します。
- (2) 会員皆様の承諾なしに目的外の利用及び提供はしません。
- (3) 会員の皆様が、個人情報の照会、修正、削除等を希望される場合は、速やかに対応します。(同窓会本部事務局人事部担当へご連絡下さい)
- (4) 個人情報へのアクセス、破壊、改ざん及び漏洩等の無いように適切に管理します。

## 機関誌「小原台だより」投稿のお願い

平成21年度「小原台だより」は、ご投稿頂きました方々のお蔭で編集することが出来、この場を借りまして厚く御礼申し上げます。ご承知のように、機関誌「小原台だより」は、同窓生の皆様方からの投稿記事によって成り立っており、また、現役自衛官や退職自衛官等の同窓生の様々な分野でご活躍の様子が、同窓生各位の啓発に役立っております。

「小原台だより」を益々充実発展させるためには、皆様方からの積極的な記事の投稿が望まれますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

投稿要領は、次のとおりです。

投稿通知期間：平成22年1月～6月 メール(jmk@bodaidsk.com)、又は、電話(03-3351-8910)で

投稿締め切り：平成22年10月15日(金)

投稿文書：A4縦使用・横書きで、文字サイズ12Pとし、2,000文字(挿入写真の分を含む)を基準とし、投稿者の顔写真を添付

投稿方法：主としてメール(jmk@bodaidsk.com)、CD又は文書・写真の郵送も可

機関誌担当：同窓会本部事務局総務部 松田 和彦(19期・空)

# 期生会会長・代議員名簿

21年10月1日現在

期別	会 長			代 議 員			業 務 幹 事 (期生会)		
				陸	海	空			
1	法性弘(空)	荒海巖	田中治	安藤堅一	鈴木龍生(空)				
2	松下尚武(空)	高岩利彦	小濱氏昭	高澤市哲	高澤藤晃(海)				
3	浮田尚家(海)	齊藤信行	松本岡	山口本	加山道弘(陸)				
4	加藤哲朗(陸)	久保健二	藤大横	近藤五	山浅野勇藏(陸)				
5	松島悠佐(陸)	辻川健二	関口鉄	西田杉	藤関口鉄也(海)				
6	藤原博(陸)	讓葉内富	高木博	大峰一	江藤部正司				
7	江藤兵部(空)	竹内昭德	高宮崎	蜂巢徹	三成裕二(海)				
8	三成裕二(海)	渋谷捷利	功刀文	鈴木昌	藤田幸生(陸)				
9	藤田幸生(海)	小嶋野隆	坂東昭	赤羽三	石川亨(海)				
10	酒卷尚生(陸)	嶋野村和	竹村郎	赤橋康	内山好夫(空)				
11	石川亨(海)	内藤本四	上村由	花岡芳	阿藤本四好弘(陸)				
12	先崎一(陸)	藤関芳雄	小斎光則	稲葉一	内井藤誠喜(陸)				
13	内山好夫(空)	関津光義	小豆野夫	江鈴木	有佐藤川由喜(陸)				
14	吉田正成(海)	小佐川喜夫	小石澄	江見直	石鈴木博				
15	道家一良(陸)	中村幹生	石川洋	長尾清	廣持三男(陸)				
16	折木誠彦(海)	岩切厚	長谷江	岩崎幸	杉本貞夫(陸)				
17	廣瀬正彦(陸)	酒井智聰	廣加曾	宮飯克	佐藤龍一郎(陸)				
18	杉本正彦(海)	西村重樹	山我二	飯田正	荒川龍一郎(陸)				
19	佐藤貞夫(陸)	竹田信裕	山細菊	福杉岩	宮下壽一(陸)				
20	荒川龍一郎(陸)	小岩親正	山菊德	杉岩吉	岩本均(陸)				
21	宮下壽一(陸)	小川敦茂	柴田尚	丸木茂	高橋治雄(海)				
22	岩本均(陸)	小林正人	副島俊	丸茂吉	高屋代律夫(陸)				
23	岩本均(陸)	田浦正浩	島野久	丸茂吉	小田浦正和(陸)				
24	高橋治雄(海)	中山繁司	中正弘	丸茂吉	馬場切光彦(陸)				
25	高屋代律夫(陸)	石丸威典	正今棍	丸茂吉	堀切光彦(陸)				
26	小田浦正和(陸)	山根一司	真大西	丸茂吉	前田忠晴(空)				
27	田浦正和(陸)	大谷勝博	大井上	丸茂吉	阿部睦陽(空)				
28	馬場切光彦(陸)	中足達好	井塩崎	丸茂吉	中塚千陽(空)				
29	堀切光彦(陸)	小川隆宏	浦口真	丸茂吉	佐藤信知(空)				
30	前田忠晴(空)	森本兼太郎	濱田兼太郎	丸茂吉	中塚千陽(空)				
31	阿部睦陽(空)	湯澤小貴	川野田	丸茂吉	佐藤信知(空)				
32	中塚千陽(空)	小武田和繁	堤田和喜	丸茂吉	佐藤信知(空)				
33	佐藤信知(空)	青木佳史	阿岡直智	丸茂吉	稲月秀正(空)				
34	稲月秀正(空)	青山直樹	岡藤太	丸茂吉	足達好正(陸)				
35	足達好正(陸)	石岡田幸	近笠原木	丸茂吉	宇佐美和好(空)				
36	宇佐美和好(空)	納谷田一	笠原木	丸茂吉	石井浩之(空)				
37	石井浩之(空)	鬼塚勇	小八林	丸茂吉	湯下兼太郎(陸)				
38	湯下兼太郎(陸)	成田優	谷	丸茂吉	清堤和田幸(海)				
39	清堤和田幸(海)			丸茂吉	武田和主(陸)				
40	武田和主(陸)			丸茂吉	鎌田淳典(海)				
41	鎌田淳典(海)			丸茂吉	庄司秀明(陸)				
42	庄司秀明(陸)			丸茂吉	原田岳(海)				
43	原田岳(海)			丸茂吉	吉水憲太郎(陸)				
44	吉水憲太郎(陸)			丸茂吉	和上嵩一(海)				
45	和上嵩一(海)			丸茂吉	山井剛拓(空)				
46	山井剛拓(空)			丸茂吉	吉井拓也(陸)				
47	吉井拓也(陸)			丸茂吉	鬼塚勇(陸)				
48	鬼塚勇(陸)			丸茂吉	成田優(陸)				
49	成田優(陸)			丸茂吉					
50				丸茂吉					
51				丸茂吉					
52				丸茂吉					

# 同窓会本部・支部等の役員紹介

## 平成21年度同窓会本部役員

会 長	先崎 一	12 (陸)	総務部長	市川 菊代	17 (陸)	事務局HP技術担当	荒木 紀夫	8 (空)
副会長兼理事長	牧本 信近	13 (海)	総務部長補佐	菊池 伯	18 (陸)	小原台事務局長	岩下 寛	23 (空)
副 会 長	内山 好夫	13 (空)	総務部総務	塚田 章	19 (陸)	小原台局長補佐	片山 博仁	24 (陸)
副 会 長	奥村 快也	14 (陸)	総務部HP・機関誌	笠原 久	18 (空)	小原台顧問	山本 政雄	24 (海)
副 会 長	折木 良一	16 (陸)	総務部HP・機関誌	松田 和彦	19 (空)	小原台渉外部長	牧野 正美	25 (陸)
理 事	奥山 繁樹	14 (陸)	総務部50周年担当	寺谷 猛	19 (陸)	小原台総務部長	大保信一郎	26 (海)
理 事	中尾 誠三	14 (海)	総務部50周年担当	竹口 健二	19 (海)	小原台総務係長	黒川 秀孝	39 (陸)
理 事	長谷 莞	14 (空)	人 事 部 長	原田 千敏	17 (空)	小原台総務係	森下 輝彦	46 (陸)
理事兼事務局長	林 直人	15 (陸)	人事部長補佐	持永 昇三	18 (海)	小原台広報係長	吉村 秀世	41 (空)
理 事	尾形 誠	23 (空)	人 事 部	佐野 一彦	18 (陸)	小原台広報係	保坂 博和	48 (陸)
理 事	松尾 幸弘	24 (陸)	人 事 部	井上 勝	19 (空)	小原台事業部長	藤田 周三	30 (空)
理 事	重岡 康弘	25 (海)	事 業 部 長	横山 俊昭	17 (空)	小原台企画係長	高橋 洋	41 (陸)
理 事	岩成 真一	24 (空)	事業部長補佐	門野 睦廣	18 (陸)	小原台企画係	仲 真言	44 (海)
会 計 監 事	丸田清次郎	13 (陸)	事業部HCD/HVD	斎藤 力	19 (海)	小原台事業係長	阿部 周一	40 (海)
会 計 監 事	繁田 信之	14 (海)	事業部囲碁・留学生	東郷 行紀	18 (海)	小原台事業係	須釜 隆	46 (陸)
会 計 監 事	三好 光男	15 (空)	事業部囲碁・留学生	風間 敏榮	19 (陸)			
会 計 監 事	屋根 正義	17 (陸)	事業部テニス助成	吉川 勝三	18 (空)			
P T 長	増田 憲二	16 (陸)	事業部テニス助成	畀野 一郎	19 (陸)			
P T	坪井 寛	16 (陸)	事業部ゴルフ講演	岡崎 宗男	18 (陸)			
P T	田代 満次	16 (陸)	事業部ゴルフ講演	高橋 敏政	19 (陸)			
P T	富本 啓一	16 (陸)	経 理 部 長	持田 清久	17 (海)			
P T	山本 博秋	16 (海)	経理部長補佐	田中 仁志	18 (空)			
50 周 年	森 哲郎	17 (海)	経 理 部	國澤 輝生	19 (陸)			
50 周 年	井上 恭治	17 (陸)	M C I 部 長	村田 和美	17 (陸)			
50 周 年	紀伊 和憲	17 (陸)	MCI部長補佐	明比 章	18 (海)			
50 周 年	平山 孝雄	17 (海)	M C I	松山 栄幸	19 (海)			
50 周 年	原 悦彦	17 (空)	M C I	松下 睦裕	19 (空)			

## 地域支部等役員 (平成21年度)

北海道地域支部	支部長	穴口 一男	9 陸	山口地区支部	支部長	重永 照彦	8 空	大分地区支部	支部長	小俣 健二	7 陸
北海道地域支部	事務局長	角 謙二	30 陸	山口地区支部	事務局長	高橋 佳嗣	11 陸	宮崎地区支部	支部長	此本 皓男	10 陸
東北地域支部	支部長	仲村 悦義	12 陸	四国地域・高知支部	支部長	池 裕生	4 陸	宮崎地区支部	事務局長	阿万 哲士	4 陸
東北地域支部	業務幹事	伊藤 糸男	15 陸	四国地域・香川支部	支部長	松浦 孝昇	4 陸	鹿児島地区支部	支部長	平田 辰雄	10 海
栃木地区支部	支部長	君嶋 信	3 陸	徳島地区支部	支部長	先山 英毅	9 陸	鹿児島地区支部	事務局長	村山 文彦	14 陸
栃木地区支部	業務幹事	三代 武徳	8 陸	徳島地区支部	事務局長	清水 祥人	12 陸	沖縄地域支部	支部長	山縣 正明	14 陸
群馬地区支部	支部長	石橋 輝治	5 陸	香川地区支部	支部長	豊田 勝也	4 陸	沖縄地域支部	事務局長	天野 道夫	37 陸
群馬地区支部	事務局長	小島 健二	14 空	高知地区支部	事務局長	大西猪一郎	4 陸	小原台クラブ	会 長	岩崎 俊雄	9 陸
北陸地区支部	支部長	濱谷 隆平	6 陸	愛媛地区支部	支部長	赤岡 順	4 陸	小原台クラブ	事務局長	丸谷 俊博	24 陸
北陸地区支部	事務局長	西川 清	15 陸	愛媛地区支部	事務局長	瀬川紘一郎	10 海	桜 華 会	会 長	塚口 千枝	40 陸
東海地区支部	支部長	石黒 邦好	7 陸	九州地域支部	支部長	山口 賢介	7 陸	桜 華 会	事務局長	吉田ゆかり	40 空
東海地区支部	事務局長	木原 文雄	12 陸	九州地域支部	事務局長	西山 洋	13 陸				
関西地域支部	支部長	田川 陸夫	12 陸	福岡地区支部	支部長	伊藤 宏美	7 陸				
関西地域支部	事務局長	三浦 靖彦	12 海	佐賀地区支部	支部長	真崎 峰夫	7 陸				
岡山地区支部	支部長	高橋 正憲	6 空	佐賀地区支部	業務幹事	田中 豊博	12 陸				
岡山地区支部	業務幹事	永岑 富彦	10 陸	長崎地区支部	支部長	中里 紀一	7 陸				
広島地区支部	支部長	松本 暢夫	11 海	長崎地区支部	業務幹事	樋口八洲太郎	10 海				
広島地区支部	業務幹事	森田 寧	17 海	熊本地区支部	支部長	斉藤 四郎	9 陸				

## 会員の訃報

平成21年1月1日から11月30日までに届いた会員の訃報を紹介します。なお詳細は防衛大学校同窓会ホームページでご覧下さい。

<b>1期生</b> (空) 高橋 久夫 5月10日	(海) 中野 一美 9月22日	<b>15期生</b> (海) 篠原 俊 11月9日
<b>2期生</b> (陸) 本田 信雄 5月6日 (陸) 藤枝 衛 5月29日	<b>7期生</b> (空) 森田 忠信 3月15日 (陸) 田中 大三 8月7日	<b>16期生</b> (空) 右近 謙一 2月24日
<b>3期生</b> (海) 田邊 徳郎 1月4日 (陸) 佐方 克信 5月22日 (陸) 阿部 賢吉 8月6日	<b>8期生</b> (陸) 橋本 正俊 9月18日	<b>17期生</b> (陸) 北本 政道 3月30日 (海) 山下 正行 4月24日
<b>4期生</b> (陸) 早田 達夫 8月7日 (陸) 玉村 三郎 9月9日 (海) 苑田 孝司 9月16日 (海) 屋代 精男 9月24日	<b>10期生</b> (陸) 西村 芳雄 3月27日 (陸) 大村 誠 7月6日	<b>18期生</b> (陸) 佐々木 稔 1月3日 (陸) 川原 彰 1月7日 (陸) 林 保男 4月6日
<b>5期生</b> (空) 前田 一郎 5月22日 (海) 中嶋 正勝 7月6日 (陸) 田所 義正 10月23日	<b>11期生</b> (空) 永井 太郎 6月27日	<b>19期生</b> (陸) 石井出保男 3月26日
<b>6期生</b> (空) 松浦 信 1月31日 (空) 西川 道雄 2月26日	<b>12期生</b> (陸) 前田 稔 10月21日	<b>25期生</b> (陸) 團野 英二 10月7日
	<b>13期生</b> (空) 青山 弘 7月11日 (陸) 渡部 一彌 10月2日	<b>30期生</b> (海) 菅野 翼 8月5日
	<b>14期生</b> (海) 後藤 俊生 2月20日 (陸) 吉原 和人 7月4日 (空) 有井 正夫 9月17日	<b>33期生</b> (空) 吉住 博文 8月27日

編集：笠原 久 (18期・空)、松田 和彦 (19期・空)

印刷：(株)エイコープリント



入校式 観閲部隊指揮官

防衛大学校同窓会本部連絡先

〒160-0003 東京都新宿区本塩町21-3-2  
●局 線 TEL・FAX 03-3351-8910  
E/M: honbu@bodaidsk.com